

『恐怖の存在』“State of Fear”

マイクル・クライトン著、酒井昭信訳／早川書房

海拔1メートルしかない小さな島国であるヴァヌーツは地球温暖化による水位の上昇で全土が水没する危機に直面していた。ヴァヌーツ政府はこの危機を回避するため、環境保護団体NERFの支援を得て、最大のCO₂排出国アメリカを提訴する策に打って出た。ところが事態は意外な展開を見せる。まずこの訴訟費用を全額負担することになっていた大富豪モートンが急に失踪してしまい、また訴訟を担当する顧問弁護士エヴァンズの周りにも様々な怪事件が発生する。エヴァンズはマサチューセッツ工科大学の危機分析センター所長ケナーから、人工地震や氷河の爆破などの人為的な気象災害を起こすテロリストの存在を知らされる。エヴァンズらはパリ、東京、ロスアンジェルス、南極など世界各地で、これを阻止するための戦いを始める。第1級のアクションで、息もつかせぬ展開について引き込まれてしまう。

本書は原著では1冊の単行本だが、訳書は上巻と下巻に別れている。上巻ではアクション小説なのに暗号とか地形図のようなデータが出てきて不思議に思うのだが、下巻になるともっと変なものがいっぱい出てくる。グラフや表によるデータも数多く登場するし、なんと言っても引用文献が実に豊富だ。こうなるとどうもこれは普通のアクション小説ではないと思えてくる。学術文献に近い感じもする非常に変わった小説である。

物語自体はフィクションだが、実はこの小説の内容は実際のデータを駆使して構成されているのである。そしてこの本は地球温暖化が、他の大きな目的のために意図的に宣伝されたものであり、実際には起こっていないことを、豊富な科学データの解釈から示している。左派と目されていたクライトンがこの小説を書いたことはある程度の驚きを持って迎えられたし、環境を守る印象が強い地球温暖化説に異議を唱えたことに、当時はかなりの反発もあったようである。

マイクル・クライトンは、ハーバード大学医学部を出て、一時サーク研究所で博士研究員をしていたが、後に作家に転ずることになる。宇宙から来た未知の微生物を扱った「アンドロメダ病原体」、日系企業で殺人事件が起きる「ライジング・サン」、女性上司（デミー・ムーア）による男性社員（マイケル・ダグラス）に対する（逆）セクハラを扱った「ディスクロージャー」、コンゴの熱帯雨林で伝説の

都市を探索する「失われた黄金都市」(映画のタイトルは「コンゴ」)、琥珀に閉じ込められた古代の蚊が吸った血液のDNAから恐竜を再生させる「ジュラシック・パーク」3部作など、クライトンの作品はことごとくハリウッドで映画化されている。

数年前にアメリカ在住の娘がこの高名な作家のサイン会に出席し、一緒に写真を撮って彼の最新作にサインをもらってきたことがある。本のタイトルを見ると“State of Fear”とある。クライトンのほぼ最後の作品が、この「恐怖の存在」だ。娘と一緒に写っているクライトンは若くてとてもハンサムに見える。ところが驚いたことに、クライトンはその後すぐに亡くなってしまった。何故かその後“State of Fear”が映画化されたという話は聞かない。

私たちは大学で学んでいる。大学は科学をするところである。特に本学では学部と修士課程との一貫教育がなされており、ほぼ全員が自分のテーマで研究をおこなった後に社会に出る。ではどのようにすれば、大学での研究の経験を社会で役立てることができるのだろうか？ それには大学で「科学する心」を身につけ、それを社会で活用することであろう。その基本は「まずは疑ってみる」事にある。先輩のテーマを受け継いで研究をしたが目新しい結果は出ない。そのような場合に先輩の過去のデータや、最終的には指導教官の学説さえも疑ってみるのが大事であり、それが科学する心なのだ。人の言うことを鵜呑みにしては目新しい研究はできない。社会に出ても創造性を発揮できず、多数の中に埋没してしまうだろう。しかし「科学する心」を持つ人は常にクリエイティブであり、新しい会社やシステムを立ち上げる事ができる。

「恐怖の存在」はわれわれに「科学する心」が重要である事を教えてくれる。この本では、地球の気温が1954年からのグラフを見れば上がっているように見えるが、これは一時的なもので、1930年から見れば決して上がってはいない事を、詳しいデータと共に示している。またCO₂はそのずっと以前から増え続けており、1954年からの気温の上昇には呼応していないことを指摘している。また気温が定期的に測定される大都会では、コンクリート化によるヒートアイランド現象による気温の上昇がよく知られているので、ヒートアイランド現象による気温の上昇

を差し引いて、実際の気温の上昇はどうかを示した詳しい解説もある。

科学する心は日常生活でも大事だ。「サプリメント」なるものはとても高価で販売されている。前から気になっていることに例えば「コラーゲンを食べる」というのがある。でも「科学する心」のある人は、「コラーゲンを食べてお肌がつるつるになるというのはホントかな？」と考えるだろう。コラーゲンは体の中でアミノ酸に分解されてしまい、皮膚に到達できるようには思えない。「コラーゲンにはヒドロキシプロリンという特殊なアミノ酸があるのです」なんて言う人もいるが、ヒドロキシプロリンは体内におけるコラーゲンの合成過程で生じるので、アミノ酸として取り込まれるのではない。

世の中はよく考えないとつい迎合してしまいそうな主義主張にあふれている。新聞やテレビのニュースに出てくる情報や意見には偏りがあり、どれが本当なのか分からないことが多い。そうなるとどこか信頼出来るような局などの意見に頼る人が多い。またどれもが同じ事を言っており、それを裏付けるデータが示されていたりすると、多数だからと思ってつい信じてしまう人も多い。国民が簡単にだまされるのは「科学する心」を持たないからだ。何が正しいかを本当に判断できるのは、大学で研究を体験したわれわれ「科学する心」を持つ人たちのみなのである。「恐怖の存在」はまさに大学での研究体験の重要性を教えてくれる。

執筆者紹介

三木 徹

生物系教授。専門領域は分子細胞生物学。科学的思考をいかにして教え、社会の役に立てさせるかに興味を持っている。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『恐怖の存在 上・下』 マイクル・クライトン著 酒井昭伸訳 早川書房（ハヤカワ文庫） 2007年 各987円

ブックガイド目次へ

『動的平衡 生命はなぜそこに宿るのか』

福岡伸一著／木楽舎

カルマン渦を知っていますか？ 流体力学を学んだ人にはおなじみのもので、整流流体中に置かれた障害物の下流に規則的に形成される渦列のことですが、この渦は「何で」できているのでしょうか？ もちろん、流路を流れる流体が水ならば、水の渦であるのは間違いないのですが、渦は流れの中の存在であり、渦を作っている水分子は常に交代しています。まさに方丈記冒頭の、ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず、という様の通りで、カルマン渦を「作る物質」はありません。渦は、物質的構造ではなく、時間経過の中で一時的に現れる「現象」なのです。

生物を理解するために、20世紀の生命科学はデカルト以来の還元論的な方法論を取ってきました。デカルトの哲学は、本来、人間は心によって動物とは違う存在であるとし、心の实在を前提とした物心二元論でした。その上で、人間の心以外の、物としての身体生命現象は、物理的、機械論的に説明できるとしました。物心二元論は否定されましたが、物質として生命現象を捉える考え方は主流となり、脳の働きが脳内物質の相互作用に還元して理解されるようになるにつれ、生命は分子機械であるという唯物論的傾向を色濃く持つようになっていきました。現在の生命科学はこの延長上にあります。

感染症の病原体の発見、ワクチンの開発や抗生物質の発見によって、多くの病気が克服されました。感染症以外の病気でも、ビタミンBの発見による脚気の克服など、原因物質の追求という還元論的生命科学は大きな成果を上げてきました。現在もなお、DNAやタンパク質といった個々の生体物質の働き、機能を追求する方向へ進められています。

しかし、そうした個々の分子、「部品」を寄せ集めても生命は宿らない。生物がそこにいてずっと生きている様に見えても、内部の分子は合成、分解を繰り返しており、常に入れ替わり続けていて、生命を形作る特定の物質はないことが分かります。ちょうど、カルマン渦が次々に流れていく水分子の動きによって、そこにあることが認識されるのと同じです。生命は、部品を寄せ集めて作られる「もの」ではなく、時の流れの中で外部との絶え間ない物質・エネルギー・情報の交換を行い続ける「現象」であるというのが、福岡博士の主張です。この生命のあ

り方を、「動的平衡」と呼んでいます。

本書は、生命を「もの」ではなく、外部と繋がった動的な「こと」として捉えることで、生命科学の作法を変えようという分子生物学者からの提案であり、機械論的生命論へのアンチテーゼなのです。

ただ、一般向けでそれほど厳密なことは書きづらいのはわかりますが、ヒョウとライオンの間に子供ができるから、種は変わらず亜種レベルであるというのは誤りです。動物学では一代雑種ができるところまでが、科の範囲であるというのが標準で、雑種ができるのは同じネコ科であることを示すだけで、別種とすることには問題はなく、亜種であるという必要はありません。また、果実の軟化を押さえる遺伝子組換えをしたトマトが、味と香りが落ちるというのも、明確な事実誤認です。一遺伝子一酵素、一酵素一機能なので、細胞壁の分解を行う酵素は、味や香り物質の代謝には全く無関係です。著者の福岡博士は、還元論的な生命観、生物機械論から来る生命科学の特許化、産業化に疑問を持っており、遺伝子組換え作物にも、批判的な立場を取っておられるのは分かりますが、事実として間違ったことが書かれているのは、少し残念です。

執筆者紹介

高原 美規

生物系准教授。専門領域は、植物バイオテクノロジー。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『動的平衡：生命はなぜそこに宿るのか』 福岡伸一著 木楽舎 2009年 1,600円

『動的平衡 2：生命は自由になれるのか』 福岡伸一著 木楽舎 2011年 1,600円

ブックガイド目次へ

『「科学的思考」のレッスン ―学校では教えてくれないサイエンス―』
戸田山和久著／NHK 出版

私は「理屈っばい」と思う。子供の頃から「屁理屈をこねるな！」と今は亡き父によく言われた。小学生の頃は昆虫学者を夢見たこともあり、中学生時代にはしばしばクラスメートに「学者みたいだ」と言われたこともある。そして、15歳で高専という理系の道に進んだ。もともと父の家業を継ぐつもりだったのに、気が付けば、工学部の教員という屁理屈で飯を食う職についている。

「理屈っばい」と理系向きだと言われることが多い気がする。普段、情緒的でなく、論理的なことを言うと、「これだから理系は」と、や々もすれば差別的なニュアンスで蔑まれる。「理系っばい」ことはイケてないらしい。その一方、本屋の自己啓発コーナーには文系が学ぶ理系思考という内容の本を見かける。私からみれば、考古学や法学、教育学を扱う本は、やけに理屈っばい気がする。そのような経験から研究室の学生と「理系っばいって何だろう？」とくだらない茶話に興じることがある。

ここで紹介する本は、そんな日頃の疑問を解く一助になればと思って手にしたものである。作者は戸田山和久さんという科学哲学を専門とする名古屋大学の先生である。内容は「理屈っばい」のではあるが、非常に丁寧に書かれていると感じた。そして、読者に難しい内容を理解してもらおうという気持ちや工夫が随所に見られる。科学とは何か、科学的に考えるとは何か、そして、なぜ市民に科学リテラシーが必要なのかと、最近のトピックスを巧妙に織り交ぜながら、広範囲の問題を巧みに解説している。技術者や科学者の足元を理解するために本学の学生はもちろん、若い教職員にも読んで欲しいと思う。

専門分野の研究を通して科学的にもの考える方法を身に付けさせることが本学の教員の大切な仕事だと思う。仮説やモデルを立て、実験データを利用して現象の仕組みを理解し、ものを作り込んでいく作法を身に付けさせるのが本学の教員の責務のはずである。その割には、科学的思考を定義し、それを学生にわかりやすく伝えるという努力は往々にして怠ってきた気がする。私も、高専や技大の学生であったが、そういう講義を習った気はしない。それは研究室で「たたき込まれる」ものだとされてきた。

加えて、日本の技術者や科学者は、市民に対する科学リテラシーの普及に関し

でもあまり積極的でない気がする。科学や技術と市民の断絶は、昨今の原発問題を見れば、大きな問題であることは明らかだ。

「理屈っぽい」が論理的でない、専門に明るい科学リテラシーが高いとは言えない技術者や研究者が多い気がする。日本の高等教育にはこういう教育の方向性が足りない気がする。しかし、技術者や科学者個人も考えないといけない問題である。

結局のところ、こういう作法は自分で本を読んで、実践して勉強するしかない。そして、さらに理屈っぽくなる覚悟が必要である。私は、ますますイケてない「おっさん」になってゆくのでしょう。

執筆者紹介

南口 誠

機械系准教授。専門領域は、材料工学、高温物理化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『「科学的思考」のレッスン：学校で教えてくれないサイエンス』 戸田山和久著
NHK出版（NHK出版新書） 2011年 903円

[ブックガイド目次へ](#)

『相対論がもたらした時空の奇妙な幾何学—アインシュタインと膨張する宇宙』

アミール・D・アクゼル著、林一訳／早川書房

相対論とは、言わずと知れたアインシュタインの一般相対性理論のこと。奇妙な幾何学とは、リーマン幾何学のことであり、これは非ユークリッド幾何学に属しています。本書はアインシュタインが提示した一般相対性理論に関わる成立過程、物理数学的な内容と、それに関わる彼の伝記的な出来事と、その理論を取り巻いた様々な研究者の研究と人生を綴り、最後に最新の宇宙観を紹介してまとめています。著者のアミール・D・アクゼルは数学を専攻してきた大学の研究者ですが、非常によくインタビューや調査をしており、一般人が興味を引くよう、本書を見事に書き上げています。

本書の原題は、「GOD'S EQUATION Einstein, Relativity, and the Expanding Universe」であり、God's Equation（神の方程式）が本題です。この「方程式」とは、一般相対性理論でアインシュタインが提示することに成功した時空間を表現する方程式のことです。この方程式は、リッチテンソル（空間の曲がり具合を表す）、計量テンソル（空間の距離を計る重み）、エネルギー・運動量テンソル（重力発生源としての物質の分布を表す）、万有引力定数、さらにいくつかの定数が含まれているだけのとても簡素に見える美しい方程式です。しかも、そこから予想される光の場の屈曲や水星の公転周期異常などが次々と実証され、正に神の方程式にふさわしい振る舞いを見せています。

この方程式の導出には、どうやらものすごいエネルギーが注がれたようです。もちろん、アインシュタイン本人の卓越した先見的な資質もあったでしょうが、本書で述べられているアインシュタインは、常人と同じような感情の人間であり、苦勞の塊のような人です。でも、情熱のかけ方が正しかったと言えましょう。その能力、情熱が常人ならざる部分であったようです。加えて、かけられたエネルギーの話は他の研究者にも及んでいます。彼らの研究なくして、この方程式は存在できなかったかもしれないと思わせるエピソードもたくさん述べられています。一番の要と思われるリーマン幾何学も、天才努力家リーマンの命を張った仕事でなかったら、いったいどうなっていたのかと思います。さらに理論を検証してきた研究者達の仕事も、とてもアインシュタイン一人でやり遂げられるものではなかったようです。さらに、本人も自覚していたと考えられているようですが、ア

インシュタインは常に自分の役に立つ数学を追い求めていたようです。このような、各研究者の連携、特に数学と物理学の融合が、その後の宇宙観の形成にどう使われたのかを示すのが本書の主題となっています。

この神の方程式には、アインシュタインが当初には加えながら、後に取り去ってしまった「宇宙定数」と呼ばれる数が入った項を加えることができます。本書では、後にどのようにその項が復活し、どのように解釈されたのか、という切り口で最新の宇宙論の解説をしています。最新の観測により次々と塗り替えられる事実をどう解釈したらよいのか、苦悩する研究者たちの姿も紹介されています。どれもニュースで聞いたことのある内容ですが、それらの本質的なつながりについて語られており、興味深く読むことができました。それにしても、続々と明らかになる事実耐えながら、今も最重要の地位を保っているこの「神の方程式」には驚かされます。

さて、この本では、我々のいる世界の様子を解明しようという、いささか抽象的な題材で話は進んでいきます。では、我々の生活に密着している身近な問題とは違ったことなののでしょうか。科学技術系を学ぶ者であれば、物理学、化学などの科学を、技術として実生活に昇華させるのがひとつの仕事となるでしょう。科学を学ぶには数学と想像力が必要であり、技術として昇華することは、観測事実には照らして宇宙の解釈をすることに似ています。他人がロマンを感じるような仕事も、当事者にとっては大真面目な問題であり、それは身近な問題を解決しようとするのと何ら変わらないことではないでしょうか。

執筆者紹介

熊倉 俊郎

環境・建設系准教授。専門領域は、雪氷学、気象学、気候学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『相対論がもたらした時空の奇妙な幾何学：アインシュタインと膨張する宇宙』
アミール・D.アクゼル著 林一訳 早川書房（ハヤカワ文庫） 2007年 714円

ブックガイド目次へ

『ピュタゴラスの復讐 数学ミステリー』

アルトゥーロ・サンガッリ著、富永星訳／日本評論社

2010年の年末に一つのeメールが届いた。学術的興味を共有してきた15年来の友人アルトゥーロ・サンガッリ氏からであった。カナダ・ケベック州の大学の数学の教授であったが、退職後も精力的に科学の啓蒙活動が続けておられる。そんな彼がミステリー小説「PYTHAGORAS' REVENGE A Mathematical Mystery」を出版し、日本語でも翻訳されたので、読んでみて欲しいとのメッセージであった。数理的な視点から技術や社会を捉え、数理的なセンスでそれらの革新を図れる能力を育成したいとして、「教養科目」を通した大学教育、「まちなか大学」を通した市民教育に特別な思いを抱いていた私にとっては、天からの贈り物のように感じたのであった。

舞台は20世紀末期の英国、米国、カナダ、イタリアに亘っており、数学者、古典歴史学者、コンピュータ科学者・技術者、古書ディーラーが絡み合いながら展開されるとともに、一方で紀元前6世紀のギリシャ、イタリア南部で繰り広げられたピュタゴラスとその弟子達の活動が挟み込まれていく。事件は、古書ディーラーが十数枚の羊皮紙文書を古典歴史学者に持ち込むところから始まる。そこには、（氏名が明記されてはいないが）“偉大な哲学者にして数学者”であるピュタゴラスの死と初期ピュタゴラス学派と呼ばれる身近な弟子達を目撃譚らしき事柄が記されていた。しかもその原文書の最後の部分が何者かによって切り取られていたのであった。事件は、この残りの文書そしてピュタゴラス自身の書いた文書の探索と記述内容の解釈に関わって様々な国際的な人物がそれぞれの立場から活動してゆく中で展開されてゆく。

その折々に、ピュタゴラス（学派）の「この世はすべて数によって秩序だった不変の形で支配されている」という哲学と、現代におけるその対極としての「数学におけるランダムさの本質的な位置付け」を基本的な文脈として配しながら、読者が関心を持てそうな数学的な主題を挟み込んでいくという構成がとられている。そして事件は、現代におけるピュタゴラスの蘇えり者とその否定者としての偉大な数学者の登場で大きな展開を見せることになるのである。私自身の「物事

の本質を数理的な枠組みでとらえてゆき、これによって人間の知性・感性そして行動に対しても、行動工学者としてアプローチしてゆきたい」という思いとの接点が随所に感じられたのである。

本書の中で取り上げられている哲学的・数学的なテーマとしては以下のようなものがある。

- ・15ゲームパズルの初期配置による可解性の判定
- ・哲学としての「テトラティクス（4つの要素からなるもの）」「宇宙の音楽的秩序による支配」なる概念
- ・「ピュタゴラスの定理」における実利的知の歴史と「証明」の意味
- ・本来の乱数はコンピュータで発生できるのか。そして純粋数学の分野におけるランダムさが果たす役割

本書を振り返ってみると、明示的法則性の支配とランダムさの支配が交錯する世界というものへの洞察が提起されているように思われるが、実は私自身が取り組んできたfuzzy思考が、この対極的洞察に対して第3極として意味のあることを確認させてくれることになった。本書の著者であるサンガッリ氏自身も“The Importance of Being Fuzzy”を著しており、そちらの方もあらためて読み返してみたいと思っている。

執筆者紹介

中村 和男

前副学長および前経営情報系教授。専門領域は、人間システム工学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『ピュタゴラスの復讐：数学ミステリー』 アルトゥーロ・サンガッリ著 富永星
訳 日本評論社 2010年 2,310円

ブックガイド目次へ

『生命とは何かー物理的にみた生細胞ー』

E. シュレディンガー著、岡小天、鎮目恭夫訳／岩波書店

「生命とは何か」と聞かれたら、あなたはどうか答えるでしょうか。

小学生なら「人間、犬、猫、・・・」と生き物の名前を言い始めるかもしれません。科学をかじったことがある人は「代謝を行うもの、自己複製を行うもの」、哲学が好きな人なら「自分の意思（自我）を持つもの」と答えるかもしれません。たしかに、この問いの答えは誰もが自分の中にイメージを持っていそうです。でも有史以来、どんなに偉い科学者も哲学者も皆が納得するかたちで「生命」を定義できた人はいません。

本書は、「シュレディンガー方程式」、「シュレディンガーの猫」などで有名なオーストリアの理論物理学者エルヴィン・シュレディンガーがダブリン高等学術研究所で行った公開連続講座の講演をまとめたものです。彼はこの本の中で、物理学の観点から生命（生物）というものについて様々な示唆に富む考察を行なっています。例えば、古典的な統計物理学で生物を説明することの限界（『生物体は「負のエントロピー」を食べて生きている』とも言っています）、また、当時はまだ解明されていなかった遺伝物質の描像を量子論の概念などを用いて説明しています。特に遺伝物質（遺伝子）については、シュレディンガー自身「非周期性固体」と呼んでいます。これは今でいうDNA（デオキシリボ核酸）に該当するものです。彼のこれら新しいアプローチは、分子生物学という新しい学術領域が創出されるきっかけになりました。実際、DNAの二重らせん構造を発見したワトソン、クリック両名ともが、若き日にシュレディンガーのこの本を読み感化されたというのは有名な話です。

でも、なぜ“量子力学の開祖”として名をはせていた理論物理学者が、「生命」という必ずしも自分の専門でない分野の問題に挑んだのでしょうか。その答えは彼自身が述べています。彼は、科学が進歩し十分な知識が獲得されているにも関わらず、その進歩ゆえ、ただひとりの人間では全体を俯瞰できなくなっている科学の矛盾に直面し、誰かがそれら事実や理論を総合する仕事をしなくてはならない。そのためには『たとえその事実や理論の若干については、又聞きで不完全にしか知らなくても、また物笑いの種になる危険を犯しても、そうするより他には道がない』と考えたのです。

この本の中に、最初の問い「生命とは何か」の答えは書いていないかもしれませんが。しかし、目の前に広がる、広大でまっさらな知的フィールドに、自分が持っている知識・持っていない知識をしっかりと理解し、素人だと笑われることも恐れず、勇気をもって切り込んでいく科学者の姿（探求者の姿）は60年以上経った今でもまったく色褪せることはありません。

執筆者紹介

塚部 暢之

本学学務部国際課長。技術士（原子力・放射線部門）。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『生命とは何か：物理的にみた生細胞』 E.シュレーディンガー著 岡小天、鎮目恭夫訳 岩波書店（岩波文庫） 2008年 630円

[ブックガイド目次へ](#)

『神は数学者か？ 万能な数学について』

マリオ・リヴィオ著、千葉敏生訳／早川書房

数学関係の新刊書のリストを眺めていて刺激的な書名に誘われ購入した。著者のM.リヴィオは、ハッブル宇宙望遠鏡科学研究所の主任天体物理学者とのことで、数学に関する類書もいくつか出している。出版社の傾向から想像して、荒唐無稽な議論を展開するトンデモ本のたぐいではないかと疑心暗鬼で読み始めたのだが、あにはからんや“数学とは何か”を真面目に真正面から探求しているまったく堅い本であった。

主題を扉と第1章から引用する。「数学は、ヒトの脳が作り出した文化的な産物であるはずなのに、これまで実に正しく自然現象を説明し、実に精密に物事の動きを予測してきた。また、流行り廃りのある科学理論一般にくらべ、数学の成果は紀元前の昔から一貫しており、科学上のある難題が生まれる100年以上も前にそれを解く「ツール」が、そのつもりもない数学者によって用意されていた、といった例も少なくない。あたかも万能の存在であるかのように、なぜ数学はこんなに一貫していて、こんなに現実の役に立つのか。つまるところ、数学は発明なのか、発見なのか？」

数学と科学の発展のいろいろな場面で、両者の関係がどのように考えられていたかを、数学者、物理学者、哲学者の発言等を引用しつつ、この根源的な主題についての議論が進められる。本書の議論展開を短くまとめるのは不可能であるし、最終章の内容をここに書くのは、ミステリーの結末を明かしてしまうようなもので、ブックガイドとしては絶対にすべきではないだろう。そこで、引用されている言葉のいくつかを気まぐれに紹介して本書の推薦文とします。

「宇宙は数学の言葉で書かれており、その文字は三角形、円、そのほかの幾何学的図形であって、これらの手段がなければ、人間の力ではそれを一字一句たりとも理解できない」(G.ガリレオ)

「数学は、経験とは無関係な思考の産物なのに、なぜ物理的实在の対象物にこれほどうまく適合するのか？」(A.アインシュタイン)

「幾何学は物理学の最古の一分野といえるだろう。幾何学がなければ、私は相対性理論を築くことはできなかった」(A.アインシュタイン)

「宇宙はまるで純粋数学者が設計したかのようだ」(J.ジーンズ)

「私は、数の概念は時空の概念や直感とはまったく独立したものだにとらえている。数というものは人間の頭脳による自由な創造物なのである」(R.デデキント)

「数学者は膨大な数の幾何学体系を築き上げてきた。一次元、二次元、三次元、そして任意の次元のユークリッド幾何学や非ユークリッド幾何学といった具合に。いずれも完全であり、同じくらい妥当である。これらは数学者の観察した現実を具現化したものであり、この現実は怪しげでとらえづらい物理的实在よりもはるかに濃密で厳格だ」(G.H.ハーディ)

入試や必修科目で数学の勉強を強制されるのはまったく我慢ならないと感じている学生諸君に、本書を是非読んでほしい。もっとも、本書をいくら精読しても数学ができるようになって、合格したり単位が取れたりするわけではない。また、数学を応用する立場の人には、本書全編を通じて興味深く語られる数学と科学の関わりの歴史を味わうことにより、どんな数学が将来思いもかけず応用されるかのヒントが得られるかも知れない。

本棚を探したら、著者M.リヴィオの前著『なぜこの方程式は解けないか?』(2007年／早川書房)と『黄金比はすべてを美しくするか』(2005年／早川書房、2012年／文庫版)が出てきた。まだペラペラとページをめくって斜め読みしただけだが、この2冊も“数学とは何か”をそれぞれ違った方向から探求したもののようで興味深い。近日中にこの2冊もきちんと読みたいと思う。

前回『ブックガイド』(2009年4月発行)で『数学の花束』(中村滋著／岩波書店)を推薦し、その第2章で解説されている「素数に限りがない」の簡単な新証明を、よく知られたユークリッド『原論』による最古の証明と共に、それぞれを2行で紹介した。ところが、その後もっと簡単な証明があることを知ったので、最後にこれを書いておく。この証明は、背理法も数学的帰納法も使わずにたった1行で済む。

「 $n!+1$ の素因数は n より大きいから、どんな n よりも大きい素数が存在する」そんなわけで、前回そこに提示した予言を「十数年後には高校の数学の教科書にこの証明が載っているであろう」と修正させていただきます。

執筆者紹介

小林 昇治

教育開発系教授。専門領域は、複素解析とその応用。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『神は数学者か? : 万能な数学について』 マリオ・リヴィオ著 千葉敏生訳 早川書房 2011年 2,415円

『なぜこの方程式は解けないか? : 天才数学者が見出した「シンメトリー」の秘密』 マリオ・リヴィオ著 斉藤隆央訳 早川書房 2007年 2,310円

『黄金比はすべてを美しくするか? : 最も謎めいた「比率」をめぐる数学物語』 マリオ・リヴィオ著 斉藤隆央訳 早川書房 (ハヤカワ文庫) 2012年 882円

[ブックガイド目次へ](#)

『プログラミングコンテスト チャレンジブック 第2版』

秋葉拓哉、岩田陽一、北川宣稔著／マイナビ

誰が言ったか、競ってこそ華という言葉がある。私が初めて耳にしたのは、学生時代の麻雀の一局で誰かに煽られたときだったと思う。

競争が世の中の問題全てを解決するとは到底思えない。ただ、上達にちょっと辛抱の要る芸事を盛り上げて行くには、プレイヤーから見ると何か手近な目標が是非欲しいところであり、「競って勝てばカッコいい」というのは手近な目標の最たるものだろう。読者の中にも、これからいろいろな競技活動にのめりこんで大学の単位がやばい感じになる人も少なからず居るのではないだろうか。立場上あまり大きい声では言えないのだが、ある競技にのめり込むというのは若いうちに是非したほうが良い経験である（でも、身を持ち崩さず、単位はなんとか取って下さい 笑）。そのようなわけで、元々競技であるスポーツやボードゲーム、あるいは多くの観客を引き寄せる芸術の分野のように昔から競技が行われてきた分野ばかりでなく、実用技術や学問の世界でも技術向上を目指した競技会が花盛りである。世界の高校生が参加する数学や理科のオリンピックは有名であるし、なんといっても本学はロボットコンテストの雄である。プログラミング、つまりコンピュータに命令を与えて自分の思いどおりの仕事をさせる技術、も例外ではない。

そもそもプログラミングは飯の種となる実用技術である。もう少し高尚・真面目に表現すると、世の中のありとあらゆる問題解決の局面で必須の大切な技術である。あなたの仕事にも必要だから真剣に勉強しなければいけない。こんな説教されずとも、作ったプログラムが動く瞬間は誰にとっても喜びであり、入り口の少々のとっつきにくさを克服した人は、皆面白がってプログラミングにのめり込む（と周囲を見て思う）。ただ、今から30年程前のマイコン普及期には必要に迫られて自分用の小さいツールをプログラミングするという手近な課題がゴロゴロしていたのに比べるとソフトウェアの環境が整備されて来て、「今までにないツールを手作りしよう」という課題が若いアマチュアにとって高級になり過ぎてきていると思う。となると、青春に刺激を与える手近な目標は「競ってこそ華」ということになるのか。

このような雰囲気です、ここ10年位の間に、プログラミングに関する競技会がどんどん増えてきている。ACM-ICPC（Association for Computing Machinery＝世

界最大の情報学に関する学会が主催するInternational Collegiate Programming Contest = 国際大学対抗のプログラミング団体戦）は2004年から毎年行われている。Google Code Jamは2003年から毎年開催で、オンラインで誰でも参加できる。頻繁にオンラインで行われているものとしてTopCoderが有名である。これら3つの競技は、比較的短い時間内に（たとえば80分）数学的に厳密に定義された問題の、数多くの入力例の全てに対して正確な出力を出したとき（またはそのようなプログラムを提出したとき）初めて点がもらえる、そして正解提出に対しては提出までの時間に応じて点をつけるという、とてもわかりやすいルールになっている。競技会の中にはもっと長丁場のもの、あるいはデザインの良さを競うといった少し自由度のあるものも用意されているが、一番人気はこうした計算手法と実装の速さ正確さを競う「アルゴリズム競技会」である。TopCoderの「SRM アルゴリズム競技会」には世界各国の若きつわものどもが夜な夜な出沒している。出場者の大多数は学生である。べつに夜に行われる競技でもないのだが、時差の関係で「日本では」土日の夜中になったり週の真ん中の午前10時くらいになったりが多い。これを書いている数時間後日曜AM2:00に今月2回目の競技会があるのだが、出ようかどうか……

SRM533に迷った末出場、結果はボロ負けだった。3レベルの得点が設定された問題があるうち、平均人の約2倍の時間をかけて松竹梅の「梅」を解けたのみだった。「竹」問題は開いた時点で残り20分、アルゴリズムつまり計算の手順はすぐにわかったのだが実装完了時残り5分でコンパイル、結局くだらない間違いが除けなかった。実は本稿の執筆のため疲れて80分に対して10分寝坊したのが痛かった（酷い負け惜しみ……）。このような私だが、本学でアルゴリズムの授業を担当しているにもかかわらず、競技プログラミングには2009年までほとんど無関心だった。2010年になって、本学のある学生氏に突き動かされる形でつわものを募り、ACM-ICPC出場チームの形ばかりのコーチになった。このチームは急造にもかかわらず健闘して7月のACM-ICPCの国内オンライン予選を突破した。長岡技大初出場にしての快挙である。12月には東京一ツ橋の国立情報学研究所で行われたアジア大会に出場。3名からなる各大学のチームが10問の問題に取り組む。問題は

予選と一味違う難しさで、コーチよりは上等な我がチームも苦戦して2問を解いたのみ。その時の首位は……なんと10問正解！あまりのレベルの高さにびっくり。しかも、10問目は終了1 - 2分前に提出で逆転優勝というドラマ付きだった。

ようやく、標題の本を紹介できるところまで来た。競技中、コーチ達はチーム選手と接触できないように隔離されるが、その間にACM-ICPCを盛り上げていくための運営に関するシンポジウムを行う。コーチは教員でも学生でもいい。強豪大学は若いチームOB学生がコーチにつくことが多い。強豪大学は何チームも予選通過しているが、そのような大学の学生コーチが登壇して、そのトークの中で「このたび本を出版したのでご覧ください」と宣伝していた。それが、標題の本の初版「プログラミングコンテストチャレンジブック」である。この大会の後に、我々がチームを母体として本学のプログラミングサークルが発足した。元出場者の複数メンバーが大変にこの本を誉めていたが、私は大変な怠け者でパラ見をしたのみだった。最近になって、「第2版でるそうですよ、買いですね」という催促めいた？サークルの同報メールが流れて来た。一方、またしても、ブックガイドの一角をお借りできるとの知らせを頂いた。これは予定調和である。この本を読まないことはあり得ない。

実は、この本を真に理解して紹介しようと思ったら、集中して勉強しても3か月はかかってしまう。それだけ充実している。2012年1月27日第2版発行のタイムリー性のため、読みこみが浅かったり部分的だったりする状態での紹介をお許し頂きたい。本書は、国際大会上位レベルにある学生コーチ3名が、過去に行われた競技会の問題を精選して、それらに対する「完膚なきまでの完全解答」をつけていくというユニークな形態の本である。サブタイトルに「問題解決のアルゴリズム活用力とコーディングテクニックを鍛える」とあるように、計算手順の解説とそれを実現する完全動作のプログラムとが両方とも提供されている。単なるコンテスト頻出問題の攻略本ではなく、各問題を使われるアルゴリズムに応じて順序良く並べている。前から順に準備編、初級編、中級編、上級編と分かれている。たとえば、「基礎からスタート——初級編」の最初の節の「すべての基本“全探索”」を見ると、再帰関数、スタック、キュー、そして、深さ優先探索、幅優先探索と

いった基本概念の説明が豊富な図解と、実際のプログラムコードでなされている。「このやり方でうまく行く」という説明は通常のアルゴリズムの教科書ほど形式的・厳密でないようにも思えるが、十分に説得的である。あるコラムの中で著者は「プログラミングコンテストでは、しばしば問題に対して予想を立て証明（に近いこと）をすることがあります。（中略）一般的に成り立つような法則でも、いくつかのコーナーケースと呼ばれる状況では成り立たない場合があります。（中略）法則を思いついても油断して解けた気にならずに、成り立たない場合がないか十分考えましょう。」と述べている。プログラムの正しさを確保することに苦勞し尽くした人の発言だと思う。そして、省略のない完全動作するプログラムコードが提示されているので読者はプログラムをデバッガの上で止めながら動作観察できる。中級編まで行くと、大学の1学期の講義で扱えるアルゴリズムはほとんど出尽くす。それも問題と解説、完全解答の繰り返しで。上級編ともなると、自分が少しは詳しいと内心思っている分野の話題がかなり詳しく説明されていて、若干の焦りを覚える程である。中国剰余定理、メビウス反転公式などが活用されている。初版から見ると、計算幾何、枝刈り探索、分割統治法、文字列アルゴリズムが増補されているとのこと。プログラムのコーディングはC++言語でされている。C++について全てを理解している必要はないが、主要なSTLは道具として使える程度のリテラシーは必要である。そのため、本当の初心者にはちょっとこの本はきついかもしれない。

本書の特徴は、アルゴリズムとその実装について、若い3人の著者が自ら問題を解いた経験に基づいて、「これでもか!」というほどに力いっぱい書きこんでいる点にあると思った。こういう人達と夜な夜な戦っているのかと思うと、あまりの勝ち目のなさに溜め息が出てしまう。特にスピードに関しては、若い人には絶対にはかなわない。ただ、本書は、競技を切り離したとしても、アルゴリズムと実装を例題に基づいて解説した「奇書」であり、これを粘り強く1年程かけて完全に修得すれば、実用プログラムの手足というよりも核心部分を実現することについて、相当の実力がつくと思う。場合によっては、ゆっくり考えたほうが、著者たちが発見しなかった新しいなにかを見つける可能性も出てくるのかも知れない。

このようなわけで、道を究めたいと願っているプログラミング中級以上の方には誰にでもお勧めできる。そもそも技術向上のための競技だったわけで、十分時間を費やして同等以上の境地に達すればそれで良いではないか。競わずとも実は手に入る。

ボロ負けしたからって、全然悔しくなんかないんだからねっ！

執筆者紹介

武井 由智

電気系准教授。専門領域は、計算量理論とその応用、確率的アルゴリズム、デジタル信号処理。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『プログラミングコンテストチャレンジブック 第2版』 秋葉拓哉、岩田陽一、北川宜稔 著 マイナビ 2012年 3,444円

[ブックガイド目次へ](#)

『数学読本』

松坂和夫著／岩波書店

高等学校時に十分学んでいない分野がある場合、大学入学後何かと不便を強いられる。何が不足か自覚している場合は、目的に沿って、教科書を使うのが最も手っとり早い。しかし教科書と見ただけで毛嫌ひする向きにお勧めしよう、というのが趣旨である。

かといって、気楽に読める本ではない。じっくり時間をかけて、時には演習を行う姿勢がなければ十分な理解に達することは難しい。大体、手っとり早い学習法などというばかげたものを想定するくらい、バカなことはないのだ。Euclidは「幾何学に王道なし」とPtolemaios王に答えたという。2000年来、変わらぬ真実だ。

初版は1989年。全部で6冊、A 4版、各巻200ページくらいだから、相当な分量のように見えるが、高校のテキスト数学1, 2, 3, A, B, CはB 5版、各冊150ページから200ページくらいだから、合わせても同じかやや多い程度。中身もほぼ教科書で取り上げている事項に平行しているので、あまり大差はない。計算機関係及び統計に相当する部分はない。大学数学への橋渡し、とどこかで宣伝文句があったか。講義風、対話調を装っているところが、タイトルの読本の由来、と著者は言う。通常、テキストでは、無駄はできるだけ省く、必要最小限の記述を要請されているから、読み物にはならない。そのところを、マンツーマンで対話をしながら先に進めるよう、工夫したところが著者の意図であるようだ。

松坂先生の本は、私も大学在学時に、岩波書店の「集合・位相入門」をはじめとして、いくつか馴れ親しんでいる。私にとっては、どれも読みやすい本であった。薄々、不足分を感じている方にはうってつけの素材と思う。

著者はあまり苦勞もせず、すぐにも理解できそうな風を装ってはいるが、実は、十分な理解を得るためには、かなりの時間を要すると思う。著者は時間の許す限り、読者が演習問題につきあうことを勧める、などとやさしく述べておられるが、教師の立場で言えば、十分理解するには演習問題の量は不足する。しかし、多くの読者

は、数学が好きではないので、いやいやながらさせられていることを考慮し、自分の将来にとって、何が必要なことなのか、じっくり考えれば、好きに思えぬことでも、つきあう術を身につけねば、とお考えの向きには、この本は、強制してはいないので、読みやすいとおもう。即ち、…ねばならない。との用語は、証明中には見いだせても、皆さんと対話するような場面では、決して出てこない。という、堅い数学の本では、…すべきである、覚えておかねばならない、…などという用語が頻出すると思う方もおられるかもしれないが、実は、私は数学の本では、殆んど見た記憶がない。…だから、このようにわかるのだ、としか書いていない。専門家が目にする論文では、場合によっては不親切と思われようと、読者は相当な予備知識を持っていると想定し、編集者は、既に知られ承認された事実の説明は簡潔に、と注文をつけているので、初心者向けには記述してないから、これくらいは知っているはず、というのが暗黙の了解である。論文末の文献一覧はそれを補う目的でついているので、何も、読んだぞ、との知識をひけらかすためではない。

数学の本というと、多くの皆さんは受験のため、あるいは、…のためやむを得ず、やっているのだ、という意識が先走りするから、そのように思い込む方が多数だと日ごろ感じているから申し上げるが、多くの数学者の言を耳にした限り、嫌いなら無理に勧めませんよ、というにきまっている。自分で知りたいから、時間をかけるのだというのだ。Euclidの言う通り、ものぐさには向かない学問である。しかし、誰も妨げることはない自由な分野である。お好きなら、いくらでも。というように。

この本は読書の勧め、ではない。学習の勧め、である。気に入ったら、森の奥まで踏み込んでよし、いやなら尻込みして引き返すもよし、誰も評価などしない。己独自のひそかな楽しみを見出したとしても一向に構わないのだ。

無門慧開に無門関という禅書がある。巻頭の頌を掲げておこう。

「大道無門 千差有路 透得此関 乾坤独歩」

執筆者紹介

高橋 秀雄

教育開発系准教授。専門領域は、数学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『数学読本 全6巻』 松坂和夫著 岩波書店 1989-1990年 2,520-3,465円

[ブックガイド目次へ](#)

『天才数学者たちが挑んだ最大の難問 フェルマーの最終定理が解けるまで』
アミール・D・アクゼル著、吉永良正訳／早川書房

この主題の本は、既にブックガイドに紹介されているかもしれません。もしかしたら、同じ本が紹介されているかも。それ程メジャーな主題と言えましょう。もちろん、フェルマーの最終定理と言われる予想がいかにして解かれたかを語るドラマです。著者は、「相対論がもたらした時空の奇妙な幾何学」と同じ、アミール・D・アクゼルです。その本と比べると、どちらかといえばこの本の方が著者の専門に近いようです。ですので、この著者の力量はこちらの方が出やすいかと思って読んでみました。ちなみに、この本の方が3年早く執筆されているようです。

数学全分野の歩みを強力に推し進めてきたこの最終定理は、言い表せばとても簡単なものです。しかし、証明しようとすればとても難解で、そのギャップに皆が夢中となってきました。しかも、美しく単純なばかりでなく、フェルマーは本の余白に「私はこのことの真に驚くべき証明を発見したが、それを記すには余白が小さすぎる」と書いていたそうです。出来過ぎな話です。もともとフェルマーがアマチュア数学者だったから、というわけではないでしょうが、プロの数学者からアマチュアまで心奪われることになってしまった。スタートレック（アメリカのSFテレビ番組、数百年未来の宇宙が舞台）でも、エンタープライズDの船長が証明を考えていたらしく、「挑戦しがいがあるし、客観的な視点が身につく。」というようなことを言っています。この番組の制作者は、数百年後も解けてないだろうと思ったのでしょうか。これはワイルズにより最終定理が証明された年の5年前の番組でした。著者も同じように思っていたようで、到達できないもののシンボルであったと言っています。

著者は、数学者らしく、この定理が語られるまでの経緯を古代から遡って解説することから物語を始めています。紀元前2000年にまで遡っています。この定理のおおもとの形は土地の分割などつながる部分があるため、歴史が長い＝身近であると言えるのでしょう。その後、最終定理の証明に必要な数多くの証明を実施してきた数学者の生涯と、その証明の概要がほぼ時系列で述べられており、物語の導入で登場していたアンドリュー・ワイルズが再登場して最終的な証明へと続いています。最後は、フェルマーが考えてもいなかったであろう方法で、数学界の知恵を動員して成されたこの仕事は、すべての関わった人間の成果であると

示唆して終えています。

本書は、数学の話としては簡単すぎて理解に達しないし、気軽に読むには数学の専門用語がそのまま使われているところがあるなど、若干不完全燃焼的な解説書です。しかし、この本は解説書として読むべきではなく、人間の物語として読むべきなのだと途中で気付きます。子沢山なオイラーの超人ぶり、天才ガウス、革命家ガロアの理不尽な決闘死、そして志村－谷山を襲う陰謀とも思える物語など、多くのドラマが語られています。そうした人間くさい物語の中で、数学が醸成され、ついにはフェルマーの最終定理の証明にまで行き着いた、ということなのでしょう。この偉大な問題の解決が示すのは、あるときは時の要請から、あるときは知的好奇心から、そうして成される多数の仕事が組み合わせると、如何に大きな力を得るのか、ということなのです。

執筆者紹介

熊倉 俊郎

環境・建設系准教授。専門領域は、雪氷学、気象学、気候学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『天才数学者たちが挑んだ最大の難問：フェルマーの最終定理が解けるまで』 アミール・D.アクセル著 吉永良正訳 早川書房（ハヤカワ文庫） 2003年 630円

ブックガイド目次へ

『ベテラン整備士が明かす意外な事実 ジャンボ旅客機 99 の謎』

エラワン・ウイパー著、ウイチャイ・ワンナワック訳／二見書房

『続 ベテラン整備士が明かす意外な事実 ジャンボ旅客機 99 の謎』

エラワン・ウイパー著、ウイチャイ・ワンナワック訳／二見書房

この本を挙げたのは、次の2つの理由によります。

- ・ジャンボ機に限らず、飛行機の裏側、空港や、整備士、客室乗務員など、我々が普段知らない世界を垣間見ることが出来る。（純粋に娯楽的な要素）
- ・論理的な説明を行っているものの、その説明のみでは理解できない箇所が多数ある。（悪い見本としての要素）

まず、純粋に娯楽的な要素としての、この本の面白さを幾つか紹介しましょう。私は飛行機に乗る際、席が取れる限り窓際に乗り、上空からの景色を楽しむのが好きですが、窓際の席が主翼の上だったりするとがっかりしてしまいます。しかしその場合でも、離着陸時に主翼の前側と後ろ側の可動部分（フラップという）が下がり、主翼が大きく変形しているのを見ることが出来ます。これは、離着陸時の低速でも揚力を高めることが出来るように主翼の形状を変えているもので、本文に図解入りで紹介されています。上空を飛行中でも、機体を安定させるために、主翼の後ろ側の可動部分（これもたぶんフラップの一部？）が忙しく動いています。

他にも、翼に関しては、機体によっては主翼の先端（大きさ1メートル四方ぐらい？）が真上に折れ曲がっているのを見たことがある方もおありでしょう。これについても、本文でその理由が記述されています。そのほか、離着陸時に機内の照明が暗くなる理由とか、英語が上手くないと座れない席があるとか、題名のとおり意外な事実が次々と明かされていきます。

この本を読むとき、矢口 史靖監督・脚本の映画「Happy フライト」（2008年11月公開）を同時にご覧になると、さらに面白さが増します。矢口監督はこの本を参考にしながら脚本を書いたのではないかと思えるほど、本書で取り上げられた内容が映画の中で頻繁に出て来るんです。共通して出てくる話題の例を挙げると、

- ・毎日飛行機に乗ったとしても、墜落事故にあう確率は438年に1回
- ・機長と副操縦士では食事は別メニュー

-
- ・飛行中に雷が落ちても、飛行には問題ない
 - ・整備士が、整備が終わって工具が1本見つからなくても、全員で一晩がかりでも探し出す
 - ・パイロットがかぶる帽子が、出発前の機体の外部点検の際に役立つ
- など。帽子が外部点検の際に役立つ意外な理由は、是非本書をお読みいただくか、Happyフライトをご覧になって確かめてください。

次に、良くない見本としてこの本を取り上げます。

まず、続編96ページから本文を引用します。

着陸時、機体の重量の90%は主脚にかかり、機体が前進するエネルギーのほとんどを主脚が吸収する。

残りの重量は前脚にかかり、残りのエネルギーを前脚が吸収する。だからジャンボ機の主脚は4本もあり、タイヤは合わせて16本もついている。

それだけでは不十分なので、設計上の工夫がしてある。それが車輪＝脚のつけかただ。車輪が垂直になっていると、機首を上げた姿勢で着地するときの機体の前進のエネルギーを吸収しきれず、機体がつんのめって機首が下がる。ブレーキをかけても、定められた着陸距離をオーバーランする危険がある。

前脚は1本だけで車輪が2本、地上滑走中の方向を決める役割を受け持っているが、主脚とともに機体の安定を保つような角度に傾けて取り付けられている。つまり、着地したとき前脚は主脚とともに機体が安定した姿勢で滑走し停止するのを助けている。（以下省略）

ジャンボ機の主脚の形状について知識がある人はともかく、そうでない人は、私も含めて、どこが何と垂直になっていないのか分からず、前進のエネルギーをどのように吸収すると言っているのか理解できません。ちなみに本文には図は載っていません。機体がつんのめって機首が下がるというのだから、おろらく、主脚側が「バウンド」してしまうような着地を起こりにくくする工夫がなされて

いるのでしょうか。

上手く説明されていない理由は、著者および翻訳者がタイ人だから日本語の論理的な説明力に問題があるというのではなく、知らない人に説明するときの配慮に欠けるのだと思います。当然、我々もうっかりして同様のミスを犯すことはあります。論文などを書くときには十分に注意しなければなりません。この本の場合は、軽い気持ちで読んで貰えばよいので、これでもよいのですが、論理的な説明不足の箇所は本文に他にも多数あります。皆さんも本を手にとって探してみてください。

私が疑問に思った箇所を、最後にもう一点挙げて終わりにします。

主翼先端のライトが赤と緑である理由（前編101～102ページ）

進行方向に向かって右側の主翼の先端には緑のライト、左側の主翼の先端には赤いライトが点滅している。ナビゲーションライトと呼ぶそうだが、本文を読むと、ナビゲーションライトに関して、次のようにも取れる説明がなされている。

夜間、前方を飛ぶ旅客機が見えた際、赤のライトが見えたら、それは「危険」を意味し、何らかの回避動作が必要だが、青のライトが見えたら、それは「安全」を意味し、そのまま飛行してよい。

私は旅客機のナビゲーションライトに関して何の予備知識ありませんが、これは恐らく、以下のように述べるのが正しいのではないのでしょうか。

夜間、前方を飛ぶ旅客機が見えた際、見える方向と、見えるライトの色（赤、緑、あるいは両方）によって、どのような回避動作をすべきか、あるいはしなくてよいルールがある。

皆さんはどのように思われますか。

執筆者紹介

鈴木 泉

経営情報系助教。専門領域は、知能情報学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ジャンボ旅客機99の謎：ベテラン整備士が明かす意外な事実』 エラワン・ウイパー著 ウイチャイ・ワンナワック訳 二見書房 2005年 630円

『続 ジャンボ旅客機99の謎：ベテラン整備士が明かす意外な事実』 エラワン・ウイパー著 ウイチャイ・ワンナワック訳 二見書房 2005年 630円

『ハッピーフライト [DVD]』 矢口史靖監督 東宝 2009年 3,990円

[ブックガイド目次へ](#)

『ハイデガー＝存在神秘の哲学』

古東哲明著／講談社現代新書

「哲学」という言葉を聞いてみなさんはどのようなイメージを持つでしょうか。人間はどう生きるべきかなどと「人生観」として捉える人もいれば、自分の仕事を首尾一貫して行うための「理念」として捉える人もいるでしょう。しかし学問としての「哲学」(philosophy)とは、少し意味が違います。哲学とは「知」(sophia)を「愛すること」(philos)が原義とされています。では「知を愛する」とは何を意味しているのでしょうか。それは社会や自然の構造を正しく「知る」ことを愛好する態度を意味しており、「知る」ことによって「真理」への道が開けます。したがってみなさんが本学で工学や技術を学ぶことも、「哲学的」ということができます。

しかしこのような意味とは異なる「哲学」を探究した哲学者がいます。それがマルティン・ハイデガー (Martin Heidegger) というドイツの哲学者です。彼は「存在する」ことの不思議さに着目します。たとえば「なぜ物があるのか?」と考えてみてください。茶碗を考えてみましょう。色が青い、形は丸いなどと存在様式を分析することができても、「茶碗がある」こと自体の意味はわかりません。哲学者や科学者が築いてきた学問体系とは、存在を前提とした存在理論にすぎないのです。しかしハイデガーはあえて、「在る」ということのも不思議さを解明しようとしします。これは西洋哲学史を根底から塗り替えるような、大きな挑戦です。ハイデガーが1927年に出版した『存在と時間』はまさにエポックメイキングな書でした。

以下ハイデガーの考えの要点をまとめてみます。まず「存在する」ことのも不思議さを問えるのは人間(=「現存在」と名付けられる)だけである。だが人間は普段日常生活に浸かってしまっているため、存在への問いを発することはない。しかし「不安」に襲われた時はじめて、存在のも不思議さに直面する。ここからハイデガーは人間(現存在)の分析に移ります。人間とは何か。人間とは「時間」である。「時間」といっても時計で計られるような数値化された時間ではなく、一瞬一瞬に生まれては消える刻一刻の「時」を意味している、というのが大まかな筋立てです。以上ハイデガーの哲学を粗描しました。

さて『存在と時間』の原著を直接読むことをお勧めしたいのですが、やはり哲

学書は難しいと思います。本書では難解な訳語もわかりやすい日本語に置き換えられ、大変読みやすく述べられています。哲学はみなさんの専門領域に直接関係しないかもしれませんが、「物事を突き詰めて考える」という哲学的姿勢は将来必ず役に立ちます。私自身は本書を読んで共感できる部分もあれば、少し違和感を覚える箇所もありました。自分自身で考えることもまた哲学です。お時間のある折に、ぜひご一読ください。

執筆者紹介

田中 潤一

教育開発系准教授。専門領域は、哲学・教育学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ハイデガー＝存在神秘の哲学』古東哲明著 講談社（講談社現代新書） 2002年 777円

『存在と時間 1・2・3』ハイデガー著 原佑、渡邊二郎訳 中央公論新社（中公クラシックス） 2003年 各1,680円

[ブックガイド目次へ](#)

『倫理とは何か 猫のアインジヒトの挑戦』

永井均著／筑摩書房

本書のタイトル“倫理とは何か”とはすなわち“倫理とは何か？”という疑問文に対する回答です。工科系の大学では技術者倫理を教えることが義務付けられています。この場合は“技術者倫理とはこういうものであり、そのことをしっかり身につけて下さい”ということであり、昔風の言葉では“修身”のようなものと捉えられているようです。しかし、“倫理とは何か？”と問うことは“倫理は私と何の関係があるのか？”とか“倫理、何するものぞ？”と問うことであり、倫理の源泉への遡及や挑戦と解釈できます。そしてその問いの解決するところに倫理規定というものを守る意義があると私は思っています。

この本は、倫理の源泉、すなわち、なぜ倫理というものが立ち現れたかを哲学的に考察するものです。古来、哲学者は自分の思想を他者に伝授するために著作か対話という形態をとるようです。この本も対話形式となっており、登場人物は、先生、男子学生、女子学生、猫（アインジヒト）の3人と一匹です。猫を登場させたのは、人間の倫理を彼岸から（すなわち、人間の外側から）平等な立場で眺めるためです。そして先生が著者で、2名の学生に一般大衆を仮託しているイメージで、まず先生がこの2名の学生に講義をし、猫のアインジヒトがその内容を批評しつつも、結局その補足説明を行なっていくという展開で進んでいきます。そして倫理について哲学的な考察を加えていきますが、哲学では思考可能な世界をすべて（できるだけ？）対象とした考察を行なうため、どうしても行ったり来たりすることになります。その中では著者は読者がここで躓くに違いないということを想定しています。そして登場人物と猫の会話によってその躓きの回収にあたるわけです。だから、読者個々の躓きとは違ってあくまでも著者の想定した躓きと回収の繰り返しをフォローするということになります。このためどうしても読者は、著者の論理展開の細かい急カーブで振り落とされてしまいます。永井氏の別の著作（ニーチェ、ウィトゲンシュタインもの）のように著者のことばをそのまま書いたほうがよかったんじゃないかなと少し思います。そういう意味でこの本の内容をわかりやすく伝えようとする戦略について私は失敗と判定します（このことに成功している本を私は知りません）。この失敗は著者がやろうとしていることが魅力的であればあるほど、面白ければ面白いほど、際立ちます。

この本の面白さは、我々が常にこうだと信じて疑わない様々なこと（あまりにも当たり前なので信じるというレベルでさえないこと、例えば“良いことをなすべきだ”ということとか）を“そうとは限らないかも知れない”と疑うことを可能にしてくれるところです。繰り返しになりますが、そのことが、タイトル“倫理とは何か”にあらわれています。“倫理とは何か？”という疑問文に対する答えが本書のタイトル“倫理とは何か”なのです。この本が前提としている“倫理とは何か？”という疑問を持つことは、すなわち“倫理的である”と、それに反対の“倫理的でない”という対立の様相を一段上の立場から見下ろすことを可能にします。そして「倫理とは何か？」という問いは、「人間は倫理規定を順守しなければならない」と固く信じている人への挑戦ということになります。

著者は自分の持っている哲学的な疑問を読者に強制せざるを得なかったという主旨のことを冒頭で述べています。そしてこの本は、そのような種類の問いが内発的であり、すなわち、はじめからこのような問いが自分の内部に存在する人を対象にして執筆したと言っています。既に日頃からうすうす「なにか変だ？」と思っている人に、その疑問を確信させる本だということです。何も変だと思っていない人がこの本を読んで「そうか！ そうなのか！」となることはあまりないということのようです。そういう意味で批判に対してオープンになっている（どのようにも批判できる）とも言えます。ではそのような問いに対する答えはどうか。この本はその問いに対する著者の作成した答案ということになります。

倫理の問題は、古代ギリシャから現代まで連綿と続く問題なので、本書もプラトン、アリストテレス、ホッブズ、ヒューム、ルソー、カント、ヘーゲル、ベンサム、ミル、ニーチェと哲学のオールスターキャストとなります（私が抜けているぞ、という声が地下から聞こえそうですが）。これら先哲は皆、問いに対する答案を書いたわけですが、どれもこれもみな間違いということらしい（哲学では師匠筋に対しても“間違っている”と言っても問題ないらしく、工科系とは違うなと思いましたが）。だから、著者の永井均氏も“あなたの考えは間違いだ”と言われることに大きな抵抗はないはずです。

先に述べたような事情もあり、この本は読み取るのはやはり大変です。私は

2011年の2月から読みだして半年後の8月ぐらいまでかかりました（その途中で東日本大震災が発生）。著者、永井均氏の著作はどれも哲学的な問いが既に自分の内側にある人にとっては面白いです。しかし、内容をフォローするのは本当に大変でした。特に私は、接続詞でしばしば停止しました。順接の接続詞“だから”と書かれると“えっ どうして？”で停止します。

この原稿では、本書がとりあつかっている具体的な問いの内容に言及しませんでした。本書を受けて私が立てた問いを次に提示したいと思います。我が国日本は民主主義の国家ですね。どうして民主主義でなくてはならないのでしょうか？非民主的な国家を挙げて“あんな国じゃいやだろう？”ということはできます。しかし、日本人は生まれた時から民主主義の国にいるのだから既に色メガネをかけて見ているのかも知れません。民主主義が正しいと信じている人にとっての脅威は非民主的な国家ではなく、民主主義とは何かを色メガネなしで問う人です。哲学者というのはこういう問いを立てることによって、迫害されても、不幸になっても真実を知ること愛する人ということです（これは著者と同業の中島義道氏の説）。つまり、ほとんどの人に当てはまらないということですね。

最後に本書の中の記憶に留めたい著者のことばを挙げます。“啓蒙主義とは自分の内なる理性以外のいかなる権威も認めないことである（引用がちょっと不正確です）”。もしそうなら我々日本人は啓蒙的でいられるでしょうか。

執筆者紹介

細山田徳三

環境・建設系教授。専門領域は、水工学、流体力学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『倫理とは何か：猫のアインジヒトの挑戦』 永井均著 筑摩書房（ちくま学芸文庫） 2011年 1,155円

ブックガイド目次へ

『経済倫理学のすすめ～「感情」から「勘定へ」～』

竹内靖雄著／中公新書

我々は家庭や学校で、あるいは公共広告で、世のため人のためになる行動（利他主義）を取りなさいと奨励されてきた。ではもし、社会のほとんどの人が利他主義になったら何が起こるか考えてみたことはあるだろうか？

今回紹介する本ではこんな考え方をする。世の中で困っている人、助けてほしい人というのは一定割合存在する。一方、助けたい人が大量にいると、「供給」が「需要」を大幅に上回る。そうすると誰かを助けたくても何もできない人が続出して、（仕方なく）自分のことしか面倒を見ることができなくなる（＝利己主義）。つまり、利他主義の人が増えれば増えるほど利己主義にならざるを得ない人が増えるのである。

この本は倫理学の本であるが、今紹介したような経済的な観点（上の例では需要と供給）から書かれているところが他の本と大きく違う。倫理学と言うと小学校の道徳の時間に勉強したような内容をイメージするだろうが、この本は「人はどうあるべきか」を指南するような内容ではなく、経済的な観点（勘定）で倫理的問題（感情）を捉えてみようという本である。

残念ながら、工学系の勉強・研究をしていると各専門分野の技術的な話が中心になって、一部の分野を除いて倫理のことはあまり意識することがない。もしかしたら、小学校の道徳の時間以来意識したことがないという学生もいるかもしれない。ただ、工学を志すかどうかに関係なく人間として倫理・道徳のことはいつでも考える場面は数多くある。例えば、以下のような質問にあなたはへと答えるだろうか？

問：殺人者を死刑にするのでなく、加害者に無限補償の責任を課すほうがよいのではないか？

問：過剰な受験競争をなくすため、大学入試合格者を抽選にしたらどうか？あるいは、企業での採用活動を抽選に義務づけたらどうか？

問：賄賂は贈賄側も収賄側も得をしており、被害者もないのになぜ犯罪なのか？

問：自殺するのはその人の自由ではないか？

問：貧困国への人道的援助は、むしろ有害なのではないか？

これらはいずれもこの本の中にある質問である。それぞれについて解説があるが、明確な答えが書かれているわけではない。答えはそれぞれが自分で考えるべき問題である。YesでもNoでも構わない。大切なのは、なぜそう思ったかである。私は、学生時代に例えばこのような本にもぜひ出会ってほしいと願っている。きっと人間の器が一段深くなると思う。

執筆者紹介

山本 和英

電気系准教授。専門領域は、自然言語処理、テキストマイニング。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『経済倫理学のすすめ：「感情」から「勘定」へ』 竹内靖雄著 中央公論社（中公新書） 1989年 品切

ブックガイド目次へ

『新釈 現代文』

高田瑞穂著／筑摩書房

「新釈 現代文」高田瑞穂著、この本を知っている人は昭和20年代か30年代生まれの方だと思います。知っている人にとっては、10代の終わりごろに一生懸命読み込んだ、しかしその後長い間読み返していない、思い出深い書ではないでしょうか。なぜなら、この本は大学受験の参考書だからです。国語の現代文の読解の方法論を説いた有名な参考書で、緑の表紙がついたハードカバーの薄手の本でした。初版は1959年とのことで、私が手にした1980年ごろにはすでに古典的名著と呼ばれる存在になっていました。実は確かに読んだのですが、当時の私には難しすぎて内容を咀嚼できず、一読して目から鱗が落ちる、ということはありませんでした。

さて今回本書を紹介するのは、本書が2009年に文庫本で復刊されたからです。受験参考書という特殊な書でありながら、しかも50年を経て復刊されるとは異例のことだと思います。本書の帯には「伝説の参考書、待望の復刊！」とあります。書店で偶然見つけて、半分は話のネタに、半分はもう一度読み返してみたいという気持ちから買い求めました。しかし、30年ぶりに読んでみたら、やはり難しかった。「私も仕事柄ずいぶんと文章の読み書きを重ねてきたので、今ならこの本の内容がすいすいと入ってくるのではないか」という期待は簡単に崩れました。負け惜しみではありませんが、今の高校生、大学生が読んでもきつと難しいと感じると思います。昔の受験生は、大学受験という目的が限定された状況下においても、高尚な学問を修めていたことを確信すると同時に、謙虚に勉強することが今もって私に必要であることを再認識しました。

私のように国語の苦手な受験生にとって、現代文は、普段から日本語の文章は読んでいるはずなのに、入試問題となるとやたら難しく感じ、かといって勉強の仕方もわからないという困ったものでした。本書は長い間多くの受験生の定番であった数少ない現代文の参考書です。そこには、入試現代文の読解の方法として著者が言うところの「たった一つのこと」が追及されています。それは、論理の展開を追って正確に追跡して論旨を把握することです。今になって思うと、当然ながらこれは入試現代文に限ったことではなく、論文やレポートなど人間の知的活動に関する公的表現についていえることでしょうし、文章を書く際にも留意しなければならないことでしょう。復刻版の解説によると、「さらに本書は『人間主

義・合理主義・人格主義』を柱とする近代思想の啓蒙書でもある」とのことです。もともと、そこまでの深い内容は、恥ずかしながら私は受験生時代も今もよく理解していません。しかし、本書が復刊されたのは、昔の読者が受験生時代を懐かしむためだけではなく、また単に受験参考書としてでもなく、あらためて現代に読まれる価値があるからだと理解しています。今の受験生や大学生にも読んでもらい、ぜひ感想を伺いたいと思います。

執筆者紹介

下村 匠

環境・建設系准教授。専門領域は、コンクリート材料、コンクリート構造。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『新釈現代文』 高田瑞穂著 筑摩書房 2009年 1,155円

[ブックガイド目次へ](#)

『「正義」を考える 生きづらさと向き合う社会学』

大澤真幸著／NHK 出版新書

サンデルのハーバード白熱教室というのが昨年ぐらいに流行りました。それにあわせて日本内外のいくつかの有力大学でも白熱教室が開かれたように思います。あるいはハーバードより前からそのようなことをやっていたという大学もあるかも知れませんが、この流行が誰かによって扇動されたものかも知れないという穿った見方もありますが、ひとまずこのような議論をやりたいという気持ちが一般市民に少しはあった、ということなのでしょう。大学の講義で学生さんが何も質問しない昨今の状況と対比してやや理解できないところもあるのですが…。本書「「正義」を考える」ですが、社会のあり方を決定する正義の法則・理論をサンデルの論点に近い路線に沿って検討していきます。このような議論は社会のあり様と人間のあり様を細々と検討するのでその手法は哲学的とならざるを得ません。哲学という鋭利な電気メスで社会と人間の間を解剖していくという進め方になっています。

本書の内容ですが、現代を生きる我々の難点（我々が進む道の難所という意味）は、まずは「物語」の欠如と位置づけます。私は「物語」とは以下のような意味だと解釈しました。私が子供の頃（1970年代）、世界の東西冷戦の只中で日本海をはさんですぐ北側には世界最大の社会主義国ソビエト連邦がありました。やや大げさですが“日本がソビエトのような社会主義に陥らないように、しっかり勉強し、体力をつけ、国力を向上させ、国際競争力をつけ、日本の国際的な地位を向上させ、ふるさとを愛し、隣人に寛容で、強きをくじき弱きを助け、妻を愛し、30歳過ぎぐらいに父親となり、子供をやさしくさとし、時々酔っ払って同僚に迷惑をかけるけれど、大過なく日常業務をこなし、人並み程度の出世と稼ぎがあり、少しの部下は育て、……少しの年金を頂戴しながら、やがて惜しまれながら亡くなる”というようなことをぼんやりと意識していたように思います。“そんなことは考えなかった”という人もいるかも知れません。もちろん人はそれぞれ固有の事情の中で生きているので、その「物語」も固有のものではありますが、さりとて石川五右衛門のような大泥棒とかヒトラーのような独裁者になることを思い描いて日々研鑽に励む人はいないでしょう。広く社会に受け入れられるような何かを思い描いたのではないのでしょうか。ドリカムに「未来予想図」という歌がありますが、そ

んな感じです。

しかし、現代における難点である「物語」の欠如とは今の若い人達がこのような「物語」を昔ほど描けなくなったということです。自分が進んでいく放物線の軌道をはっきりと思い描くことができない。「物語」という言葉は、社会哲学の研究者が使う言葉のようで、森岡正博とか東浩紀の著作にもしばしば見られます。地球環境問題とか大災害に対する防災対策というようなことは、東西冷戦という「大きな物語」が終結した後、「物語」が見えなくなった現代においてかろうじて見出された、世界を前進させる「物語」と位置づけられます。

本書ではその後、このような難点をどのように切り抜けていくか考えていくわけですが、古典的な正義の理論（功利主義、リベタリアニズム（自由至上主義）、リベラリズム（自由主義）、コミュニタリアニズム（共同体主義）、コミュニタリアニズムの助っ人アリストテレス）を行きつ戻りつ検討し、結局、全部に“ダメだし”となります。さらに当然の成り行きだとは思いますが、資本主義・民主主義・国家・宗教も検討の対象となり、どれも芳しい結果とはなりません。民主主義（これに疑問を呈する人は殆どいない）と16世紀ごろのヨーロッパの絶対王政との親和性までも見出してしまいうぐらいです。

サンデルも言っているようですが、コミュニタリアニズム（共同体主義）が当面の解決策の案となっているようです。ここ数年、市場経済というエンジンの飛行機に乗っていれば一安心だとする新自由主義が揺らぎだしています。大災害や世界経済の不穏も手伝って、我々はすぐに言いますね。「（防災のため）地域の共同体の力を発揮しよう」とか「共同体の絆が重要」だとかです。しかし、著者は現代の難点を共同体（コミュニティ）によって克服することは時代遅れだと断じています。先にも見たように共同体を支える「物語」が既に脆弱になっているからです。著者は、むしろこの共同体に含まれない人たち、共同体からはみ出さざるを得ず、そのために傷を負った人たちこそが普遍的な絆・連帯の担い手となると説きます。共同体というのは、先に考察したように機能しなくなった「物語」が背景にあることによって成立しているグループと言えます。共同体の一つの小さな例である町内会は防犯・防災・青少年の健全な育成・安心して子育てをする

場（すなわち物語）のためにあります。その共同体から村八分になった人たちは、言わば“所払い”、すなわち宇宙空間に放り出されたような意味での普遍性があるのではないか。キリスト教・イスラム教で破門を受けた者、江戸払い（追放を命ぜられたもの）、魔女として排除された者、職場をクビになった者、学校でいじめにあっている者…、著者はこのような立場にある者を“共同体の中で回収できないもの（副題の生きづらさに対応）を持っている者”と大きく位置づけます。そしてこのような生きづらさを抱えた人たちが、逆に現代の難点に悩む我々現代人のブレイクスルーになりうるのではないかと結論します。

以上がこの本の大まかな内容です。このブックガイドは本書の紹介をすれば足りるのでこの本を読んで私独自の考えを披瀝することは控えます（それができるほど考えが熟していないのです）。2011. 3.11の東日本大震災以降、“我々は一致団結して〇〇でなければならない”という言説が日本を席卷する中であって、この本によって“そうでなくてもよいかも知れない”ということを考える余地がある、ということがわかり、私はすっきりしました。東日本大震災が発生する少し前に出版された本なのに、です。東日本大震災の後にこの大災害を受けての著者の論考を発展させた著作として『社会は絶えず夢を見ている』（朝日出版社）があり、これもあわせてご一読されることをお勧めしたいと思います。こちらも相当面白いです。

執筆者紹介

細山田徳三

環境・建設系教授。専門領域は、水工学、流体力学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『「正義」を考える：生きづらさと向き合う社会学』大澤真幸著 NHK出版
(NHK出版新書) 2011年 861円

『社会は絶えず夢を見ている』大澤真幸著 朝日出版社 2011年 1,890円

ブックガイド目次へ

『幸福論』

アラン著、串田孫一、中村雄二郎訳／白水社（イデー選書）

昨年3月11日の東日本大震災では地震と津波で2万人を越える人命が失われ、先祖伝来の貴重な家田畑が流された。今まで営々と築きあげてきた生活基盤と人生の希望を一瞬の間に失った被災地の人々の人生観は大きく変わり、人生にとって何が大事か、また「幸福」とは何かと自らに問い始められた。そんな折、NHKテレビ番組「100分で名著」で、世界三大幸福論の一つアランの「幸福論」が取上げられた。アランは本名Emil August Chertier (1868-1951) といい、パリのリセー・アンリ4世などで哲学高校教師を勤めながら、「N・R・F」誌に合計5000編に及ぶ小エッセー「語録 (propos)」を投稿した。アラン独自の幸福論は、人間味に溢れ、優等生ではない普通の街の人でも実践可能にして、爽やかで飽きがこないものであった。そしてアランは平和主義者であったにも関わらず、自らの思想を極限状況において試すために、普仏戦争に志願従軍した経験から、心が体の影響を受けて容易に変化する事を痛感して、「実際には、幸福であったり不幸であったりする理由はたいしたことではない。一切は我々の肉体とその働きにかかっている (1908.02.22「神経衰弱」)」として、現在の心身医学の原理を先取りしていた。さらにアランは時代が変わっても、人間は情念 (passion) の虜になったり、偏見に囚われたり、欲望に突き動かされることによって、自ら不幸を作り出しているとして、それらから自由になる事で「幸福＝健康」を誰でも手に入れられると主張した。その考えはまさに釈尊が2500年前に「人間の苦しみ (= 苦) には原因 (= 集) があり、それを絶てば (= 滅)、現状は変わる (= 道)」と唱えられた「四諦中道八正道」と同じ思想であった。「悲しみとは病気に過ぎず、いろいろ理屈や理由を考えたりしないで、病気として我慢しなければならぬ。そうすれば気にさわる言葉の行列は四散してしまう。「祈り」というものが目指したのはそれであった (1911.02.06「ふさぎの虫」)。「幸福とは肉体を持つ人の心の中に、幸せになりたいと願う強い意思によって作り出されるものである」という真実は、被災者の方々の心の復興に役立つと思われる。

さらにアランは形而上学的な「幸福論」を論じるに留まらず、自分自身の経験から得た珠玉の箴言を生み出しており、それは将来ある若い学生諸君の、人生の様々な局面で「幸福な人生」を獲得するのに役立つと信じる。名著といわれるラッ

セルの「幸福論」、ヒルティの「幸福論」とともにアランの「幸福論」をも、青春の秋の夜に一読されんことをお勧めする次第である。

アラン著「幸福論」串田孫一・中村雄二郎訳、白水社イデー選書1991からの抜き書き

- *「自分の外部に言い訳を探す人達は決して満足するということがないが、これに反して自分の過失に真っ向から立ち向かって「俺は全く馬鹿だった」と言う人達はそうした経験を消化して強くまた快活である。1922.11.07（ヘラクレス）」
- *「想像力の病気にはつける薬はない。不幸な人間にはどんな好ましい出来事が微笑みかけても無駄なのだ。そして幸福というものの中には普通、人が考えるよりも意思の力が働いている。1913.08.18（悲しいマリー）」
- *「子供にかえった年寄りや廃人のようになったアル中患者の友達に会うのはつらいものだ。なぜつらいのかというと、彼等に今のままでも生きていてもらいたいと同時に、今のままでは生きていてもらいたくないからである。1910.12.13（精神の病い）」
- *「老人とは老朽に悩む若者のことではない。死人とは死んでいる生者のことではない。それゆえ死に襲われるのは生者のみであり、不幸の重荷を心に感じるのは幸福な人達のみである。1910.12.13（精神の病い）」
- *「生活が苦しければ苦しいほど、よく苦痛に耐え、よく楽しみを享受するものだ、とさえ言いうるだろう。単にこれから起こるかもしれない不幸まで予見する暇がないからだ。予見は必要によって押さえられている。ロビンソン・クルーソーは、自分の家を建てたときになって始めて祖国を懐かしみ始めたのである。1910.05.23（他人の不幸）」
- *「しかし私の考えでは、幸福の秘訣のひとつは自分自身の不機嫌に対して無関心でいることだと思う。相手にしないでいれば、不機嫌などというのは、犬が犬小屋に帰って行くように、動物的な生命の中に落ち込んでしまうものだ。1913.08.31（ストイシズム）」
- *「悪く言われたり悪く思われたりすることのない人間などありはしない。よく言

われたりよく思われたりする事のない人間もありはしない。そして人間の本性というものは、人の気分を害するようなことなど、少しも恐れないようにできている。他人の気分を直接に支配するのは、自分自身の気分を支配するよりずっと楽なのだ。そして話をしている当の相手の気分を注意深く取り扱う者は、そうすることで自分自身の気分に対する医者になる。会話においては舞踏と同様、誰もが他人の鏡だからだ。1922.04.08（親切）」

*「人は幸福を探し始めるや否や、これを見いださぬ運命に陥れられる。幸福とは褒美を求めなかった人達のところに来る褒美なのだ。1911.03.18（勝利）」

執筆者紹介

福本 一郎

生物系教授。専門領域は、医用生体工学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『幸福論』 アラン著 串田孫一、中村雄二郎訳 白水社（イデー選書） 1990年 2,415円

『幸福論（第1・2・3部）』 ヒルティ著 草間平作訳 岩波書店（岩波文庫） 1961年 819-903円

『幸福論』 ラッセル著 安藤貞雄訳 岩波書店（岩波文庫） 1991年 819円

ブックガイド目次へ

『津波てんでんこ ―近代日本の津波史―』

山下文男著／新日本出版社

私が三陸を訪れたのは、3・11から半年近く経った8月上旬のことである。峠を越えて下っていくと、あるところから下はいきなり何も無い。大震災の発災直後に道路を埋め尽くした瓦礫は既に撤去され、家の基礎は草むして、人の営みがあったことすら感じない無機質な風景が広がっている。鉄筋コンクリートの建物が幾つか残っている。その4階にまで、瓦礫が引っ掛かっている。あの高さまで津波が押し寄せたとは信じられない。高台に逃げればよいという。山が迫る女川町や南三陸町はまだ良い。陸前高田市は、三陸の湘南と呼ばれる平野が開けた地形だ。海沿いにいた人達が直ぐ逃げられる場所は見当たらない。鉄筋や鉄骨造りでも、並みの高さでは駄目。亡くなった方が多いのもむべなるかなと思った。



チリ地震津波の高さを示す
看板が虚しく傾いている。
南三陸町防災庁舎前にて

そんな陸前高田市の中で一人の犠牲者も出さなかった海沿いの集落がある。チリ地震津波でも浸水し、それを教訓に毎年地区で避難訓練をしていた。訓練だから決まった避難所に避難したが、誰もがそれでは助からないと知っていて、自宅のそばにそれぞれ逃げるべき高台を決めていたのだという。発災後、それぞれ決めた場所に逃げた。それでも駄目だった。迫り来る津波を逃れて、斜面をよじ登った。足の悪いおばあちゃんは、這って登ったと答えた。まさかのために、斜面を整備していたのかも知れないと思った。津波の高さは想定外だったが、想定した最初の避難と、想定外への対処で生き延びることが出来た。ところが、この集落より山手の集落で犠牲者が出ている。チリ地震津波もここまで来なかったから今回も大丈夫だろう、と思って避難が遅れた。災害は常に想定

外、その場で想定外にどう対処するかが生死を分ける。

テレビで根こそぎ津波で流されたのを見ると、海岸沿い全てがそうだと思ってしまいが、少し違う。石巻から女川町に至る道路の途中に、海岸沿いに家が無傷

で建っていて驚いた。万石浦と呼ばれる辺りである。湾の入り口が狭く、津波の侵入を防いだらしい。この地域は、今は地盤沈下が酷い。助かった家々が床下浸水を繰り返している。解決困難な災害が進行中で言葉も無い。海に近いところで建物が残っている光景は、気仙沼や石巻でも観た。海拔何mまでは津波には危険、と一概に言えないのが難しいと現地で気がつく。地形や津波の波形、震源との位置関係等々、様々な要因が絡むのだろう。

帰長して幾つか津波関係の本を読んだ。その中でもお薦めは「津波てんでんこ」である。著者の山下さん自身が、明治三陸津波で被災した集落に生まれ、昭和三陸津波の被災者でもある。明治、昭和、チリ地震の3回の三陸大津波の写真は、船が流され、亡骸があり、家がバラバラになった木材、家の礎石だけが残った様子、東日本大震災と何も変わらない。海沿いの集落の人は逃げたが、それより奥の集落の人が大丈夫だろうと思って逃げ遅れたのも今回の震災と変わらない。既視感を覚える。明治の時は地震の揺れが小さかったために避難を考えず被害を大きくしたが、昭和の時は海の様子を見て避難を呼びかけた村では死者が少なかったと書かれている。やはり、現代の気象庁の津波警報は避難のためには重要である。東日本大震災で、津波警報の高さの当初予測の誤りを指摘する声が多数聞かれるが、警報が無かったら、もっと多くの人が命を落としたであろう。

今回の震災後に注意すべきは、三陸は津波が多い＝三陸しか津波は起こらない、と考えてしまうことである。山下さんは、そのことにも強く警鐘を鳴らしている。関東大震災では三浦半島や伊豆半島、先の大戦末期の東南海地震では三重県、戦後間もなくの昭和南海地震では和歌山県や高知県が同じような大津波で甚大な被害を受けている。最近では北海道南西沖地震の奥尻島や、その前の日本海中部地震での秋田での被害と、日本海側も津波に無縁では無い。決して三陸だけのことで無い。在学中も卒業後も、海で遊んだり、海に近いところに住む時は、とにかく大きな揺れを感じたら、津波警報のみに頼らず、上司の指示を待つことなく、自分の感覚を信じて、高台に避難して欲しい。避難までの過程はどうでもよい。命あって先の人生が開ける。

山下さんは、陸前高田市の病院で、首まで津波につかりながら、カーテンにし

がみついて奇跡的に助かった。残念ながら、昨年（2011年）12月に亡くなった。二度目の被災を経て、何を訴えたかったか、今や聞くすべは無い。これだけの犠牲者を出して、長らく津波の恐ろしさを訴え続けてきた氏にとっては、さぞかし無念であったろう。ご冥福をお祈りしたい。氏の想いは、大震災前に出版されたこの書に語り尽くされている様に思う。是非とも、被害の傷跡の残っているうちに三陸を訪れて欲しい。その上で、本書を読むことをお勧めしたい。

執筆者紹介

木村 悟隆

生物系准教授。専門領域は、高分子物性、天然由来分子の液晶形成挙動、高分子の固体NMR。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『津波てんでんこ：近代日本の津波史』 山下文男著 新日本出版社 2008年
1,680円

ブックガイド目次へ

『水の透視画法』

辺見庸著／共同通信社

この本は絵画技法の本ではない。共同通信社が加盟紙に配信する一本が2千字程度のコラムを集めたものだ。身辺雑事から始まり、現代の諸問題、哲学的考察などにつなげていくパターンの凝縮していてかつ読みやすい話が続く。

著者の共同通信記者時代については同社外信部に勤務していた友人からいくつかのエピソードを聞いた（本人には未確認）。赴任先の北京から送られてくる原稿はデスクが筆を入れる余地はない「完全原稿」がほとんどだったとか、会社の飲み会で同席していた上司の編集局長がトイレに行っていた隙に、自分のおしっこをビールジョッキに注ぎ、それを戻ってきた上司に飲ませて反応を観察したとかいうものだ。

本書には「破滅の予兆」が満ちている。コラム「予感と結末」には予感だけでなく、3.11に直面し、ことばの無力さを思い知らされたことが記されている。

突然、見たこともない大地震と大津波が生まれ故郷（註1）をおそった。地軸が揺らめき、水がそばだち、そこかしこに火柱が立った。多くの友人、知人を失った。原発禍を含め、こんなぞら恐ろしい光景は眼にしたことがないはずなのに、しかし、私は正直ほのかな既視感を覚えなかった。それは幾世代も前の夢の記憶が、はからずもからだのおくの涸れ井戸からじわりと滲みだてきたような、にわかには語りえない悲しくも無力な感覚であった。

（中略）

ことばは巨大なできごとにおいていかれ、できごとの外形や現象の一端を稚拙に表しえても、本質の深みに迫ることはできないであろう。そのことは、災害につけ戦争につけ、ことばというものがただに工学的事実や技術表現の道具となりさがり、人間の底なしの内面への執着と関心をながく失ってきたことと、たぶん、かかわりがある。

既視感については、9.11の米同時多発テロの際も同様な指摘を聞いたことがある。スイスの精神医学者カール・ユングの主張する「集合的無意識」かそれともハリウッド映画の記憶だろうか。原発については、1986年のチェルノブイリ原発

事故の記憶もあり、いつか途方もない大惨事が起きるのではないかとかすかな予感めいたものを抱いていた人は少なくなかったのではなかろうか。

3.11の大地震・大津波・原発禍の現実に関係者のみならず一般市民の、空想を遥かに凌駕したものであり、それこそがことばの無力を思い知らせる原因だったと言えるだろう。

そして日本文学は3.11という圧倒的な現実を前に昨年は事実上、“沈黙”していたのではないか。高橋源一郎の『恋する原発』（講談社）は「不謹慎」で「挑発的である」と一部で話題となったが、構成に難があることは否めない（本稿では詳述しないので、興味のある方は文芸誌『群像』にも掲載されているので図書館で読んでください）。

また、辺見は「マネー資本主義の暴走」が引き起こしたリーマン・ショック（2008年）後の世界経済の状況と日本社会の現実を目の当たりにして「世界恐慌」は間近いとの主張を展開する。3.11に加えてもう一つの「破滅の兆し」を感じ取っているようだ。

コラム「幻夢をかすめゆく通り魔 夢野久作の歌といま」で、夢野の『猟奇歌』に触れながら、「資本」の支配する世界への批判を展開する。

この世界では資本という「嘘」が、道義や公正、誠実といった「実」の価値をせせら笑い、泥足で踏みにじっている。そのような倒錯的世界にまっとうな情理など育つわけがないだろう。なかんずく、実需がないのにただ金もうけのためにのみ各国の実体経済を食いあらし、結果、億万の貧者と破産者を生んでいる投機ファンドの暴力。それこそが世界規模の通り魔ではないのか。つるつるのサイバースペース（仮想空間）に過ぎない嘘のモニター画面が、これも資本のしわざだが、人間の实像をしめだし、内面をも占拠してしまっている。実と虚が逆転してしまった世界では、正気と狂気の位相ももはや見分けがたい。秋葉原事件とはそうしたなかで起きるべくして起きた人間身体の“発作”ではなかったか。

昨年、ニューヨークで始まった、「ウォール街を占拠せよ（Occupy the Wall Street）」と主張する抗議行動が発端となり、「格差社会」に抗議する同様な抗議活動が全世界に広まり、今でもくすぶっている。「1%の富裕層が99%の貧困層を支配している」などのスローガンは正確さには欠けるかもしれないが、リーマン・ショック以後の社会の空気を反映している。米国の銀行や投資会社は、サブプライムローン（低所得者向け高金利住宅融資）を組み込んだ金融商品の販売で巨額の利益を上げた。米大手投資会社（現在は銀行）ゴールドマン・サックスの社員の平均年収はリーマン・ショックの前には約7千万円にも達していたなどのレポートもある。そして細かい説明は省くが、住宅バブルの破裂で同金融商品は事実上の「紙くず」と化し、リーマン・ショックを引き金とする世界金融危機に発展していった。ローンが払えず、銀行に差し押さえられた住宅の「片づけ請負人」のエピソードは例えば、米小説家ポール・オースター（Paul Auster）の近著「サンセットパーク（Sunset Park）」などで活写されている

欧州でもマネー資本主義が跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）している。債務（借金）危機がユーロ圏に続き、不況の深刻化、緊縮財政政策の強化による失業や倒産の増大、生活苦の深刻化など暗いニュースがギリシャ、ポルトガル、スペイン、イタリアなど南欧諸国からほぼ連日のように報じられている。

辺見は資本の支配する世界を厳しく批判するが「社会主義」や「共産主義」、「社会主義中国」を称揚しているわけではない。2008年の北京オリンピックの際、辺見は中国を再訪。そのとき書いたコラム「東風は西風を圧倒したか」の中で、『乏しきを憂えず、均（ひと）しからざるを憂う』といった中国古来からの価値観とおよそ反対の、あくことのない物質的欲望」をオリンピック・スタジアム「鳥の巣」や北京の金融街に感じたという。そのうえで、「北京から汗のにおいが消え、東京やニューヨークと大差ない商業的つくり笑いがあふれている。索漠とした空虚感も。」と手厳しい。

辺見は共同通信を退職後、連続して大病を患い、右の手足が不自由となり、リハビリ中であることを本書で明かしている。しかし、彼の体調が「破滅の予感」に結びついているとは到底思えない。そして、「情報技術の革新によって経済・社

会システムが地球規模でめまぐるしく変化している今は、産業革命期をはるかにこえる人間環境の大動乱期」(註2)であると位置付けたうえで、その全局面を冷徹に俯瞰している慧眼(けいがん)の思想家や哲学者は少ないようだと思く。

そうした中で、辺見はことばの力を信じ、現実の本質に迫ろうともがく。

註1) 宮城県石巻市。

註2) 本書のコラム「おとしめあう世界一動乱と詩集について」より

執筆者紹介

村上 直久

経営情報系准教授。専門領域は、国際関係論、メディア英語論。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『水の透視画法』 辺見庸著 共同通信社 2011年 1,680円

『恋する原発』 高橋源一郎著 講談社 群像2011年11月号掲載 2011年 品切

ブックガイド目次へ

『論語』

加地伸行訳注／講談社

私の手元には、いつも一冊の本がある。いわゆる座右の書というやつだ。学生の指導や研究で悩んだ時には、べらべらと読む。すると心が自然と落ち着く。それは誰でも知っている『論語』だ。

何度かこのブックガイドに取り上げようと思ったが、学生さんが興味を持つとは思えなかったので取り上げるのをためらっていた。すぐ役に立ち、楽しめる本ではない。しかし、君たちの人生において大きな力となることは間違いない。君たちは今後、激しい競争に直面することだろう。他人から理不尽な言動や扱いを受けるかもしれない。何もかもうまくいかず、失意のどん底を味わうかもしれない。本書は、そんな時の行動指針や生きる糧になるだろう。このブックガイドを読むような学生さんのなかには、既に読んでいる人が多いかもしれないが。手元に常に置いて欲しい一冊だ。

昨今の日本経済は非常に厳しい。上向く気配が感じられない。効率化のために、競争原理がどの分野にもすごい勢いで導入されている。大学もしかり。生き残りのために必死だ。しかし、競争原理の導入により、「自分の行動を損か得かで判断する人が増えている」ように感じ、私は非常に懸念している。

学生の間では、「あの講義は単位が取りづらいから取らない」「その講義を取ると成績に響き、奨学金免除に不利だから取らない」などの話しが聞こえてくる。そこには、自分が何をしたいか、どう生きたいかが感じられない。企業社会では、「損失隠しや、その告発者の解任」「会社資金の私的流用」など、会社のトップとして当然備えていなければならない道徳観や倫理観が欠如した事件が後を絶たない。研究の世界でも、名声を得ようと先を争って著名な雑誌に論文を掲載しようと、「論文の捏造」が後を絶たない。

著名な実業家で『論語』を愛読する人は多い。明治の事業家「渋沢 栄一」、ワタミ社長「渡邊 美樹」、京セラ・KDDIの創業者で現在日本航空（JAL）の再建を手がけている「稲森 和夫」などである。稲森さんの著書の一つに『心を高める、経営を伸ばす』（PHP文庫）がある。本書には、『論語』に影響を受けた、彼の経営哲学を表す言葉がある。「動機善なりや、私心なかりしか」である。「動機が善であり、実行過程が善であれば、結果を問う必要がない、必ず成功する」。しかし、「結果

を出すために人の道を外れた行為をすれば、それはいつしか自分に返ってくる」ということである。

最後に『論語』の言葉をいくつか挙げておきます。興味があれば、本書でその意味を調べてみてください。

「子曰く、君子は偽に喻り、小人は利に喻る」

「子曰く、巧言令色、鮮なし仁」

「子曰く、人にして不仁ならば、礼を如何せん。人にして不仁ならば、樂を如何せん」

「子曰く、君子は周して比せず。小人は比して周せず」

「子曰く、位無きを思えず。立つ所以を思う。己を知る莫きを思えず。知る可きを為さんことを求む」

執筆者紹介

高橋 祥司

環境・建設系准教授。専門領域は、分子生物学、応用生物化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『論語 増補版』 加地伸行全訳注 講談社（講談社学術文庫） 2009年 1,313円

[ブックガイド目次へ](#)

『言志四録』

佐藤一斎著、川上正光訳／講談社

『言志四録』とは、江戸時代後期の儒学者佐藤一斎（1772－1859）がまとめた4巻の書物、『言志録』『言志後録』『言志晩録』『言志耄録』を指す。原著は漢文で書かれているが、本学初代学長である川上正光先生によって現代語訳され、注釈を付されたものが、今回お勧めの一書である。

江戸時代、幕府の学問所として江戸に昌平校が置かれていた。現在のJRお茶の水駅の北側にあり、今ではその地に湯島聖堂があって漢詩・漢文や中国古典を学ぶ殿堂として親しまれている。毎月一回、ここで開かれる論語の素読会に筆者も出席している。当時は学問といっても儒学が中心で、論語をはじめとする中国古典が教科の中心だった。佐藤一斎はこの昌平坂学問所で塾長となり、後には総長となった人物である。その弟子3千人と言われ、幕末維新に活躍した多くの人物が彼から直接、間接の影響を受けた。

4巻のうち、最初の書『言志録』は佐藤53歳のときに、最後の『言志耄録』は82歳のときに書かれたもの。いずれも幕府学問所での日々の講義の中で気づいたことを書き溜めたものであり、人生に指針を与える示唆に満ちた言葉にあふれている。論語などの古典に取材したものもあれば、佐藤独自の着想に基づくものもある。4巻全体は1133条からなっているが、西郷隆盛はこの中から100条余りを抜き書きしたものを冊子にしていとも懐中に入れていたという。

この中から有名なせりふを紹介しておこう。『少くして学べば壮にして為すあり、壮にして学べば老いて衰えず、老いて学べば死して朽ちず』という言葉。2001年の衆議院本会議で、学びの社会の構築という視点が重要ではないか、という野党議員の質問に応じて、当時の小泉純一郎総理大臣が、好きな言葉としてこの言葉を紹介した。原文は

「少而学。則壮而有為。壮而学。則老而不衰。老而学。則老而不朽。」

川上先生はこの言葉を次のように現代語訳している。

「少年の時学んでおけば、壮年になってそれが役に立ち、何事か為すことができる。壮年の時学んでおけば、老年になっても気力の衰えることがない。老年になっても学んでいれば、見識も高くなり、より多く社会に貢献できるから死んでもその名の朽ちることはない。」（言志晩録の60条、80頁）

実に平易な表現である。しかし、川上先生の現代語訳本は単なる現代語訳ではなく、随所に川上先生独自の追加がある。この条についても沢山のオマケがついている。まずは佐藤一斎がこの条を書くにあたっての出典についてのオマケ。

「ところで、朱子の編著になる『近思録』為学類に、『学ばざれば、すなわち老いて衰う』とある。或いはこれを一斎先生が見て、本文を作られたのではないかと思われる。」

川上先生の現代語訳に先立ち、戦前に「修養大講座」というシリーズの一書として「言志四録」の解説書が出版されているが（平凡社、昭和15年刊）、そちらを見てもこの出典についての解説は無い。現代語訳にあたり、川上先生が広く古典類を参照されていたことが分る。

この条にはお茶目な解説も付け加えられている。先の引用に続けて川上先生は次のように書いている。

「頭を使っている人は長生きであるともいわれる。だから、本文の第三句は、老いて学んでも、（役に立つ学び方と役に立たない学び方があるから）名は残らないかも知れない。しかし、健康にはよいわけだから、『老いて学べば、^{いのちなが}寿し』といった方が無難であるようにも思われる。これは一斎先生には内証の内証にしておいて下さい。（もっとも一斎先生は長生きもされ、名を残してもおられるが。）」

また、「少、壮、老とは何歳をいうのか」と質問されたときに、「それらは年齢というよりも、＜気持ち＞と考えたらどうだろう」と答えた挿話をはさみ、今度は米国の実業家サミュエル・ウルマンの“*Youth*”と題する英文詩を引用している。

Youth is not a time of life, it is a state of mind.

It is a temper of the will, a quality of the imagination,

*a vigor of the emotions, a predominance of courage over timidity,
of the appetite for adventure over love of ease.*

“若さ”とは人生の一時をいうのではない。

それは心の状態を言うのだ。

^{たくま}逞しい意思、優れた想像力、

^も炎ゆる情熱、^{きょうだ}怯懦を乗り越える勇猛心、

あにいづ
安逸を振り切って冒険に立ち向かう意欲、

こういう心の状態を“若さ”というのだ。

このように、川上先生の注釈は古今東西を駆けめぐる。

* * * *

最後に川上先生について補足しておこう。川上正光先生は1912年栃木県生まれ。1935年に東工大の電子工学科を卒業し、東芝勤務を経て、東工大で教員生活を始めた。川上先生の書かれた教科書『電子回路』は当時エレクトロニクスを学ぶ学生にとっての代表的な教科書だったそう。東工大の学長時代に本学の基本構想をまとめ、本学開学と同時に初代の学長となられた。本学のモットーであるVOSも、本学の古いロゴマークも、そして「技学」という言葉も、すべて川上先生の創案になるものである。

川上先生は、専門の電子技術以外の主題について多くの本を書かれた。中でも『工学と独創』、『日本に大学らしい大学はあるのか：日本文化の興隆は大学教授の創造力の向上から』、『脳のはたらきと独創』、『科学と独創：日本人の独創力啓発のために』、『独創の精神』などは、大学論、教育論、独創性などに関する川上先生の見解が書かれており、あわせて一読を勧めたい。なお、『工学と独創』の一部である『エンジニア心得帖』は筆者の技術者倫理の授業でもしばしば紹介させていただいている。

川上先生は、入学式や卒業式でも、用意した原稿から離れて突如黒板に向かって古今の名句を書かれたりしたそう。そうした広い見識の上にたって本学の基礎が築かれたわけで、私はそのことを誇りに思う。本学に学ぶ皆さんにも、是非、川上正光先生の一語に触れていただきたいと思います。



執筆者紹介

三上 喜貴 (p. 54)

原子力システム安全系／システム安全系／経営情報系教授。専門領域は、技術論、技術者論、安全マネジメント。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『言志四録 1 言志録』 佐藤一斎著 川上正光全訳注 講談社（講談社学術文庫）
1978年 1,050円

『言志四録 2 言志後録』 佐藤一斎著 川上正光全訳注 講談社（講談社学術文庫）
1979年 1,050円

『言志四録 3 言志晩録』 佐藤一斎著 川上正光全訳注 講談社（講談社学術文庫）
1980年 1,155円

『言志四録 4 言志耄録』 佐藤一斎著 川上正光全訳注 講談社（講談社学術文庫）
1981年 1,103円

『工学と独創』 川上正光著 共立出版 1977年 品切

『日本に大学らしい大学はあるのか：日本文化の興隆は大学教授の創造力の向上から』 川上正光著 共立出版 1989年 品切

『脳のはたらきと独創』 川上正光著、本間三郎編 朝倉書店 1980年 品切

『科学と独創：日本人の独創力啓発のために』 川上正光著、本間三郎編 朝倉書店 1979年 品切

『独創の精神』 川上正光著 共立出版 1978年 品切

ブックガイド目次へ

『理趣経』

松長有慶著／中央公論新社

この執筆依頼を受けた後、「ブックガイド」が実は学外からも読める様になっていると判って、正直困ってしまいました。なぜなら、私が感銘を受けた本は、学生時代に読み漁った松長有慶氏をはじめとする諸氏が執筆される経典や宗教の解説書だったからです。私自身は、随筆を含む文学小説や実写映画は苦手というより大嫌いな部類に入ります。それは、あまりに理想的な世界であるため、「そんなことあり得ない」と思うからです。小・中・高等学校と、一番嫌いな宿題は「読書感想文」でした。毎度、夏冬の宿題時には「読書感想文」を巡って大喧嘩をしていました。文学小説を読むよう勧める母とそれを完全に拒否する娘。今思い返しても不思議な光景ですが、良く考えてみると我が家の書棚には殆ど本がなく、あったとしても六法全書やその類のもの、あるいは歴史解説書ばかりだった様な気がします。基本的に本は図書館で借り、唯一増え続けた蔵書は「楽譜」だけかもしれません。マンガすらない状態でした。なので、普通の本を買おうなんて思いもしませんでした。

その私が唯一はまったのが、仏教そのものや経典の解説がなされた書物群でした。私が大学2年生の頃です。当時の私は様々な事情があって、若者が一度は出会う精神状態に陥っていました。そんな時に会ったのが経典の解説書でした。それまで経典と言えば祖父の法事の際に読経していた観音経しか知らなかった私は、松長有慶氏の「密教」という本を皮切りに、数十冊の解説書を漁りました。殆どを本宅においてきたため、今手元には松長氏の「理趣経」しかなく、他の本と併せて細かい話をしようとすると難しいのですが、確か初めて読んだのが講談社新書から出版された「般若心経を読む」ではなかったかと思います。

それらの書物にしたためられている、記憶に残っている要素がいくつかありますが、その中でも特に心に残っているのは生きていくための“智慧”を身に着けること、そして“私たちは生かされている”という認識です。“智慧”の理解は大変難しいですが、辞書によれば「物事をありのままに把握し、真理を見極める認識力」とあります。“生かされている”という認識は、人生において傲慢になることなく常に謙虚に、ということでしょう。

当時は、漠然と「そうなんだ」と思いつつ、ある事象との出会いを境に立ち直り、

現在に至ります。そして、1年程前、学内でのふとした会話で、何故か私は理趣経、という単語を再度発しました。めづらしいこともあるものだと思います、今回の執筆依頼を受けて改めて松長氏の「理趣経」（中央公論新社版）を開いてみました。普通は冊子で読むものですが、なぜかこの版は電子書籍でも販売しています。世の中便利になりました。

経典、というと何だか怪しいのですが、この本は全部で7章から構成されています。第1章に理趣経とはどういう経典か、という解説がなされています。高々数十ページですが、第1章を読むだけでも大変興味深いものとなっています。はじめに述べられていることは「思想と実践の一体」。学ぶことと行動することは一体で、これがなければ何も始まらないそうです。次に「秘密」の本来の意味。順序を踏まずに学ぶと、理解不足となり、時として最悪な結果を招きます。故に、段階を踏んで伝えることは重要であると説かれています。少し飛んで、「慈悲」という愛の形。自らを減する形で相手をいつくしむ。そこには自己都合のない純粹な“愛”が必要と説かれています。実はここまでで、経典題目の解説でしかない、というのが驚きですが、読者としては何かいいものを聞かせて頂いた気持ちになります。そして欲と生命の関係。生きていく以上、欲を悪い方に使うのではなく良い方に積極的に使おうということのようです。そのプロセスで必要となるのは、恐らく“智慧”や“生かされている”という考え方でしょうが、それらをわきまえた上での欲はなんだかよさそうです。

ざっとこれらのことをまとめて、松長氏はこの経典の意味する所をきれいにまとめ上げています。彼の本に記載された文章をそのまま引用しますと、「人間の持っている最も根源となるバイタリティそのものを、押さえつけるのではなく、生かして、正しい道を教えることによって間違いのない方向で引っ張っていかう」というのがこの経典の意味する所でしょう、と第1章を締めくくっています。

ここまで書いて、私はふと振り返りました。私たちは普段、工学の中に身を置き、あるいは教員として教育の中に身を置く形で生活をしています。思想と実践の一体や秘密、慈悲といった考えはまさに“学び”や教育に対する心構えそのものです。欲と生命の関係、これは、ある意味、工学（だけではありませんが）に通じる所

もあるでしょう。1998年に出されたある文書の中で工学とは、「・・・公共の安全、健康、福祉のために有用な事物や快適な環境を構築することを目的とする学問」と定義されています。皆が幸せになれる様なものを生み出すことを“欲”だとするならば、それを実現するのは欲の積極的利用でしょう。そして、工学に従事する以上、本来の“智慧”、すなわち“真理を見極める認識力”も必要になってきます。さらには、工学は人の幸せを願うものであると同時に“なんでも実現できる道具”として扱われてしまいがちです。そうはならない様、おごらず、常に謙虚な心でいることも大切でしょう。以上を振り返りますと、経典そのものの中にも技術や教育に従事する者の心構えが何と多く書かれているのだろう、と、本に出会って十数年経過の後、改めて感動しました。

こう考えると、一見怪しそうに見える経典解説書であっても、「良い（ここが大事です）」解説書であれば立派な読書だな、と思いました。かつ、この経典は本来であれば大変難しいものらしく、とても凡人である我々には理解できないものの筈なのです。それをここまで判りやすく解説された著者も素晴らしいと思いました。まさに、「思想と実践の一体」を重ねられた方なればこそその所業だろうと思います。その意味でもなかなか良いものではなかろうかと思いました。生きることの疲れたら少しだけ開いてみるのもいいかもしれません。

執筆者紹介

中平 勝子

経営情報系助教。専門領域は、教育工学、情報学基礎。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『理趣経』 松長有慶著 中央公論新社（中公文庫ワイド版） 2004年 品切

ブックガイド目次へ

『裸でも生きる－25歳女性起業家の号泣戦記』

山口絵里子著／講談社

「大学を辞めてこの道に進みたい」と、私の部屋を学生が訪ねてくることがある。彼ら彼女らの目は本気だ。日々の仕事や家族サービスに忙殺されている私には輝いてさえ見える。やりたい事をとことん貫いて成功して欲しいと思う。でも、子がいる私は親の気持ちにもなる。「後悔するぞ」「夢だけでは食べていけないぞ」「人生そんなに甘くないぞ」という言葉が喉まで出かかる。私が君たちと同じ年頃に親から言われた言葉だ。

やりたい事をやらずに後悔している人はたくさんいるだろう。私も多くの後悔を持っている。その一方で、果敢に挑戦しても報われず、失意のどん底に落ちた人もたくさんいるだろう。人生において成功と失敗の違いは何だろうか？

そんな事を出張中にふと思いながら、新幹線の中でiPhoneで情熱大陸というテレビ番組を見ていた。そんな時「山口絵里子」という今まで聞いたことのなかった名前が目に飛び込んできた。そう、本書の著者である。彼女は25歳の時に、世界の最貧国の一つであるバングラデシュに単身乗り込み、特産である麻の一種「ジュート」を使ったバッグで、「発展途上国から世界に通用するブランドをつくる」という強い思いを胸に抱き会社を一人で立ち上げた。本書は、その時の泣き笑いのエピソードをつづったものである。何度もつまずき、何度も人に裏切られながら涙するも、自分の思いをかなえるために常に前を向く姿勢には心打たれ、すがすがしささえ感じる。

彼女が会社を立ち上げたきっかけは、「現地を知らない先進国の人々が、机上で開発計画を決めている」「今の援助の仕方では途上国は自立でない」など、先進国の途上国支援のやり方に疑問を感じたからだ。小さい時から国際問題に興味があったと思いきや、「小学生の時はいじめられっ子だった」「中学生の時は金髪で、万引きや喫煙で警察のお世話になっていた」らしい。社会企業家として働く現在の姿からは想像しがたい。

彼女の生き方からは、たとえどんな困難や孤独が待ち受けようとも、自分の気持ちに正直に生き、自身の責任において決断する姿勢がひしひしと伝わってくる。彼女は本書でこう述べている。「バングラデシュのみんなに比べて山ほど選択肢が広がっている私の人生の中、自分が彼らにできることはなんだろう。それは、ま

ず自分自身が信じる道を生きることだった。他人にどう言われようが、他人にどう評価されようが、たとえ裸になっても自分が信じた道を歩く」。人生の成功とは、何度挫折したとしても起き上がり、自分自身が決めた道を自分自身の責任で最後まで歩き続けることなのかもしれない。

だから、「大学を辞めてこの道に進みたい」と言ってきた学生には、チャレンジすることを勧める。しかし、「自分が入りたいと思って大学に入ったのでしょうか。それならやり抜くことが大事なのではないの」と語っている。今やるべき事を真摯に出来ない人間が成功できるとは到底思えないからだ。

執筆者紹介

高橋 祥司

環境・建設系准教授。専門領域は、分子生物学、応用生物化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『裸でも生きる：25歳女性起業家の号泣戦記』 山口絵理子著 講談社 2007年 1,470円

『裸でも生きる 2：私は歩き続ける』 山口絵理子著 講談社 2009年 1,400円

ブックガイド目次へ

『仕事と日本人』

武田晴人著／筑摩書房

『肉食の思想—ヨーロッパ精神の再発見』

鯖田豊之著／中央公論新社

今の時代海外の工場で管理職として働く、又は上司が外国人となることも当たり前のことになりました。その際、特に注意して欲しい事があります。それぞれの国や地域によって「仕事」「働く」の意味が違う点です。古代ギリシャ人やローマ人は、手足を使って働くことは奴隷の仕事と考え、市民は国のあるべき姿を考え方向づけることが仕事であると考えていました。いわばガレー船の漕ぎ手と船長のような関係です。この流れがあって一般に欧米での労働の感覚は、「上流階級が嫌な事をやらせるために、一方労働者階級が生活の糧を得るために労働者が契約に基づいて労働力を提供し、対価としての賃金を受け取る」関係からスタートします。

これは、あくまでも欧米型の労働価値観であり、日本の伝統的思考とは大きく異なります。なぜそんな違いが出るのでしょうか？そもそもヨーロッパは基本的に放牧を中心とする生活、即ち勝手に生えてくる草を家畜に与え、ほとんど耕さず肥料も与えず草取りもしない三圃制を用いた農業では「個」の勝手な行動が許容できます。それに対して、東アジアは稲作が中心で、高湿度でどんどん草が生え、放置すれば収量が極端に落ち、隣の田圃に迷惑を与え、水を同時に引いてこないと集落全体の収量にも影響が出る農業であり、ヨーロッパ人に言わせれば（手間をかけているという意味で）園芸という評価なのです。遺伝子組み換えが農作業を楽にするとすれば、日本ほど抵抗なく受け入れられる背景であるのかもしれませんが。

人間生活の根幹である農業においてすら、「働く」、「協働作業」、「仕事」ひいては文化が異なるのは当然の帰結なのです。そういった下地から明治維新以降日本は急速に工業化を進めたのですが、農民から工業従事者へ転換する上で、高緯度地域での稲作農業の下地が優位に働いたことは容易に想像できるでしょう。その一方で、1日単位で働く農業から分・秒単位で調整を取る必要がある工業に合わせるために時間に関する考え方も大きく変化しました。

このように歴史的な変遷を経て現在があり、今我々が当たり前と思っている時

間、労働倫理が出来上がっているのです。相手文化の背景を知らないで日本を押し付けることは、彼らにとって植民地主義者の再来になってしまいます。この本は、なぜ日本人の感覚が通用しないかを知るきっかけになると思います。

執筆者紹介

綿引 宣道

経営情報系准教授。専門領域は、経営学、経営社会学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『肉食の思想：ヨーロッパ精神の再発見』 鯖田豊之著 中央公論新社（中公新書）
1966年 735円
『仕事と日本人』 武田晴人著 筑摩書房（ちくま新書） 2008年 903円

[ブックガイド目次へ](#)

『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』
岩崎夏海著／ダイヤモンド社

著者はAKB48のプロデュースに関わったこともある放送作家。この本は、普段はマンガしか読まない人でも楽しんで読めるよう、易しい言葉で書かれている。私もこの本が巷では200万部も売れていると聞き早速読んでみたが、一晩で読み切ってしまった。漫画化もされ、アニメ化・映画化もされたので、映像を見た後にこの本を読むのも良いかも知れない。ストーリーはタイトルの通り、ある高校2年生が急に野球部に入部しマネージャーとなり、弱い野球部を約1年で甲子園に行かせてしまうというミラクルストーリーなのだが、ミラクルを起こす源泉が「マネジメント」というP.F.ドラッカーの著書であるところが面白い。下敷きとなっている大著「マネジメント」は経営学のバイブルとも評され、組織運営や会社経営を学ぼうとする人から愛されている本であるが、もしドラのヒロインは、『野球部のマネージャーをするにはマネジメントを勉強したらいいい』と「勘違い」したことがきっかけで、「マネジメント」のエッセンシャル版を購入してしまうのである。ヒロインは勘違いにすぐ気付いたが、折角買った本だからと読み進めていくうちに、自分たちが抱えている問題を解決する答えが「マネジメント」に散りばめられていることに気づくのである。そして「困ったらこの本に戻る」ことを自分たちの行動の原点にして、野球部の中の様々な問題を解決していくのである。ストーリーとしては野球部を舞台にしているが、実は著者自身が、自身の問題解決を「マネジメント」から得た体験がベースとなっていることに気づく。登場人物の何人かのモデルは、AKB48のメンバーとのことである。著者自身の芸能界での経験を、舞台を野球部に移し書き上げたものではないだろうか。

私がこの本を薦めるのは、AKB48に関係があることやベストセラーであるから等ではない。10代20代の皆さんに「自身をプロデュースする」という感覚を持って欲しいからである。青春ストーリー仕立てのこの本は、分かりやすく「自分をプロデュースする」「自分をマネージメントする」ということを教えてくれる。AKBメンバーは秋元康氏を「先生」と呼ぶそうである。想像ではあるが、秋元氏はAKBメンバーの日常生活にまで細かな指導をしたりはしていないだろう。逆に、メンバーをどのように「マネジメント」していけば伸びるだろうかという事を真剣に考えているに違いない。このガイドブックの読者は芸能人を見て「私にも良

いプロデューサーがついていてくれたらな」と羨ましく思ったことがあるかもしれない。しかし皆には、最高のプロデューサーがついているじゃないか。それは「自分」である。もしドラには、自分がどう動けば回りがどう変えられるという“マネジメント”を実行していく過程が“説教臭くなく”書かれている。芸能界を高校野球部に置き換えたように、このストーリーを学生生活に置き換えて考えてみてはどうだろう。「将来こうありたい」という自分を、「もう一人の自分がマネジメントしていく」という感覚で捉えていけば、自分の弱さに負けそうになった時に、力となってくれるのではないか。読みきり本ではあるが、繰り返し読んでも、問題に突き当たった時に読み返すのも良い。更に関心が深まれば、ドラッカーのマネジメントを読んで見るのも良いのではないだろうか。

執筆者紹介

木村 宗弘

電気系准教授。専門領域は、液晶ディスプレイに関する物性評価や新しい駆動法の開発。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』
岩崎夏海著 ダイアモンド社 2009年 1,680円

『マネジメント：務め、責任、実践 新訳版4巻セット』ピーター・ドラッカー
著 有賀裕子訳 日経BP社 2008年 10,080円

ブックガイド目次へ

『ハーバードビジネススクールが教えてくれたこと、
教えてくれなかったことー起業した卒業生3人の10年間』

Bill Murphy Jr. 著、藤原朝子訳／阪急コミュニケーションズ

『君たちには明日はない』

垣根涼介著／新潮社

本学は大学ランキングでも上位をしめる就職率であるが、それでも就職活動は厳しさを増していると学生から聞く。「厚生労働、文部科学両省が今年、17日まとめた今春卒業予定の大学生の就職内定率（昨年12月1日時点）は、71.9%。調査を開始した1996年以降で最悪だった前年（68.8%）は上回ったが、過去2番目の低水準と厳しい就職戦線が続いている。」という記事もみかける。

そこで、昨年秋から図書館では就職活動を支援するために就職関係とTOEIC関係の図書を揃え「就活・TOEICコーナー」を設けた。就職関係図書としては、エントリーシートの書き方、面接、服装、メイクの仕方、企業研究等々、各種取り揃えたが、新刊を配架するとすぐに、学生利用者はコーナーに足を止め手に取り、借りていく。図書館ではこれまでいくつかのコーナーを設けたことがあるが、こんなに好評であったコーナーはなかった。それだけ就職が深刻さを増しているのだろう。

よく貸出しされるのは、昨年末はエントリーシート、今年に入り面接関係の図書となってきた。就職活動の動きに沿った実用書が人気である。しかし、即、就職活動に役立つものだけではなく、図書館にはさまざまな企業関係書がある。就職活動は大変ではあるが、大学卒業後、今後何十年も働くのであるから、実用書だけを利用するのではなく、読む本の幅を広げ、少し「働く」ということを見つめてもよいのではないだろうか。

次に紹介する2つの図書は極端な例であるかもしれないが、海外ビジネスの世界、長く働けばこんなことにも遭遇する可能性もあるという内容である。実務訓練で企業での勤務を経験しているので、自分の将来の働き方はある程度、描けるのではないと思われる。しかし、何十年も働くとなると波の無い人生はない。極端な例に見えても、実は身近な話かもしれない。大学を飛び立つ前に、「働く」ということの尺度的なものを広げてみてはどうだろうか。

『ハーバードビジネススクールが教えてくれたこと、教えてくれなかったことー起業した卒業生3人の10年間』

ハーバードビジネススクール（HBS）を卒業した3人の起業家の10年を追いつつ、起業のポイントやHBSの講義内容や教授陣のコメント等を随所に入れ、起業で成功するためのルールが熱く語られている。

起業のノウハウ本としても読めるし、有名なHBSがどのような講義をしているのか分かる本でもあり、アメリカのビジネス社会を垣間見ることもできる。アメリカでは日本のように永年勤続などありえないのか、転職は頻繁であり、起業した会社も成長させて売り払う、企業の買収は日常茶飯事。3人の起業家に焦点をあてているが、背景のアメリカのビジネス世界がよく見え、目まぐるしい世界である。確かに身近な外資系企業の買収の話は聞かないこともないが、彼らの感覚として、企業を買う、売るは当たり前行為として身につけているのである。

世界が狭くなり、企業のグローバル化が進む中、企業風土が異なるさまざまな国の人々と肩を並べて働くことが、今後ますます増えるだろう。一見、自分とは遠い世界と見える他国のビジネス世界が身近になり、感覚として身につくのも時間の問題かもしれない。

『君たちには明日はない』

ずばりリストラ小説である。企業のリストラを請け負う会社に勤める主人公が委託した企業側の意向を受けて、リストラ対象者と面談を重ねながら、辞職に導く過程を描いたものである。主人公はリストラ対象者の履歴を入念に調べ淡々と面談を進め、「これを機会に、新たに外の世界にチャレンジされるのも一考かとおもわれますが、いかがでしょうか？」と実質的なクビを言い渡す。

先ほどのアメリカビジネス社会とは対照的に日本のビジネス社会では長期にわたって同じ企業で働く。長い期間働き、会社へ貢献してきたと思っていても、ある日突然、クビ切りのプロフェッショナル集団にぱっさと切り落とされる。

リストラ対象者と主人公との駆け引きや、恋も含まれており、リストラという重いテーマながら、軽快さもあり、深刻にはならない。何だか前向きに生きて行

こうという気にさえなる。

これから社会に出るための就活をしている学生の皆さんには「君たちには明日はない」なんて、とんでもないタイトルではあるが、働くという過程の中には、仕事に就くという行為もあれば、仕事を辞めるという行為もある。全てを含めて働くことを見つめ、今後何十年も続く働く人生の模索を開始しても良いのではないだろうか。

執筆者紹介

山田 秀子

学術情報課情報サービス係長 担当事務はシステム、館内整備。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ハーバードビジネススクールが教えてくれたこと、教えてくれなかったこと：起業した卒業生3人の10年間』ビル・マーフィー・ジュニア著 藤原朝子訳
阪急コミュニケーションズ 2011年 1,995円

『君たちに明日はない』垣根涼介著 新潮社（新潮文庫） 2007年 662円

[ブックガイド目次へ](#)

『スティーブ・ジョブズ(上・下)』

ウォルター・アイザックソン著／講談社

星型刻みのビス。見事なカーブで切り出された無垢な板を思わせるが、わずかに金色がかった艶消しの金属を、滑らかな手触りのガラスではさんでいる。人間の文法なら逆に金属がガラスを保護するはず。もしかして地球外来？

僕はiPhoneに保護フィルムは貼らない。表面に使われるガラスは選びぬかれた素材で、弱く傷つき易いフィルムはその美点を覆ってしまうことになる。ケースも付けない。1ミリ薄くするのにどれだけのコストがかかっているだろう。

本書は、ジョブズの生前から本人の希望で書き進められ、彼の死後すぐに出版された伝記である。彼は原稿を読んでおらず内容に一切注文を付けなかったようだ。アップルファンには既知の話が多いらしいが、僕には興味深い話ばかりだ。

ジョブズは「世界を変えた人」と言われる。ちょっと大げさだ。確かにマックは素敵だしピクサーのアニメはどれも面白いが、それで世界が変わるわけない、と思っていた。しかし、改めて僕自身の生活の中で彼から影響を受けたモノの数の多さに驚く。そして、製品を手にしてなんとなく感じる、美しさ、心地よさ、ワクワク感は、実は彼が非常に強い、強すぎるほど強い意図をもって、まさにそのようにデザインしたからそうなったのだ。

この本を楽しく読むにはコツがある。ジョブズは人として問題大ありなのだ。例えば、自分の会社では、自分の思う通りに動かない部下を、汚い言葉でこき下ろして首にしたり、人のアイデアをつまらんと切り捨てておきながら、数日後には自分のアイデアとしてしまう。自分を、自己模倣をせず常に変革を行うアーティストと規定していて、普通の人間はアホと切り捨てる。そして親しい人にさえ、「共感欠損症候群」とか「自己愛性人格障害」とか言われるほど時として冷酷になる。数々の彼の不徳のエピソードごとに被害に会った人に同情するとしんどい。面白すぎる作り話と思うか、それはそれとして、と受け流すことにしよう。それに、自分がその手の人物に遭遇したとしても、大抵「ジョブズに比べれば十倍マシ」と慰めることができるようになる、という効用もある。

そんなキャラクターにもかかわらず、彼への賞賛の声は、彼の死後も絶えることはない。彼の作ったものは、パソコン、映画プロダクション、iPod、iPhone、iPod touch、iPad、iTunesストア、appストア、アップルストア、iCloudなど。ど

れ一つとっても誰にも真似のできない仕事である。例えば、「パソコンを作る」とは、単に製品の制作ではなく、そういうものの存在や概念自体を人々に知らしめることである。彼の有名な言葉に、人々が何を欲しているかはそれを見せてあげるまではわからない、というのがある。人の欲求の定義さえしてしまうのだ。

他にも沢山の言葉を残しているが、気に入ったのは…大学に入学する時、一緒に行きたがった親を突き放してさよならも言わずに家を出る、その時を回想しての言葉だ。「親がいると知られなくなかった。無賃乗車で放浪する孤児がたまたまそこに来たというイメージにしたかったんだ。ふるさともなく、天涯孤独な孤児が。」

ジョブズは、美的なセンスとそれを追い求め続ける力、アイデアを発想する能力、それを実現するために世の中を動かす力、全てにおいて卓越していて、自分とは比べようがないが、好みの点では意外と共感できる部分も多かった。例えば、デザインはバウハウス系（彼の場合、製品の形をシンプルにするために人殺しさえしそうなほど苛烈に行動するのだが）、音楽はディランやビートルズ、ジョーン・バエズ（彼はバエズを恋人にしちゃうのだが）、CDは自分の好きな曲だけ選んで聞く（彼はiTunesストアを立ち上げて、音楽業界を新しいステージに突入させてしまうのだが）。

エジソンが電球を発明したような古典的な意味での発明ではないが、私たちは、スティーブ・ジョブズを通して、インターフェースを発見し、デザインを発見し、コンピューターを発見し、商品というものを発見した。今となっては発見する前の自分を思い出せないような形で。

翻訳は良い。しかし、原書の電子版は、米Amazonで10ドル足らずだった。全文検索や英英の辞書がついている上、パソコンやモバイル系のデバイスで、クラウドにあるしおりを共有して読める。

執筆者紹介

原 信一郎

教育開発系准教授。専門領域は、代数の位相幾何学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『スティーブ・ジョブズ 1・2』 ウォルター・アイザックソン著 井口耕二訳
講談社 2011年 各1,995円

[ブックガイド目次へ](#)

『練習しないで、字がうまくなる!』

阿久津直記著／サンマーク出版

陽子の周りを電子が回っているのは地球の周りを月が回っているのと関係が無いように血液型と人の性格は何の関係も無いし、字はそれを書いた人の人柄とは何の関係も無い。というわけで、字は情報伝達のための単なる記号であると割りきってしまったが故に、私の書く字は大変な事になってしまった。読めはするのだがクセさえ無く、どこから来てどこへ行くかわからない過去と未来を同時に失ってしまったかのような字。不幸なことに、下手であっても字の美しさを感じる能力はある程度あるもので、自分の字を見ると時として戦慄が走る。

私は毎年大勢に数学を教えているのだが、不得手な事を勉強する学生さんの苦勞を理解するために、時々新しいことに挑戦することになっている。今回は練習しなくてもペン字がうまくなる本である。表紙に「手よりも頭を使いなさい。大切なのは、意識の持ち方・考え方」とある。

冒頭で、「練習しても、字はうまにならない」と突き放される。書道家のように命がけで字を書きまくるなら別だが、普通の人は字がうまくなるほど練習するだけの時間を持っていない。練習しない分、頭を使って書くべきなのだ。更に「日常生活で必要とされているのは、読みやすく、人を不快にさせない程度の字」と、明確に目標設定される。そして、うまい字を書くための具体的な話が、例えば、ペンは0.5ミリの顔料ゲルインキのボールペンが最適で、その根拠も非常に詳しく書いてあり、頭ごなしに決まりごとを押し付けることがない。そして、うまい字を書くためのペンの動きが、ルール化して説明がなされる。

この本は、あちこちに「字は丁寧に書きましょう」のような当たり前に思える言葉が書かれているのだが、なぜ丁寧に書かねばならないのかという理由や、丁寧に書くということの具体的な方法が詳しく説明されるので、その言葉が新たな輝きを帯びることになる。最も印象的なのは、「字は図形です」である。著者は書の専門家であるから、字はそれを書く人の精神が現れるとかなんとか言いそうなものなのだが、うまい字が書けるようになる必要はない、うまく見える字が書ければよい、と主張する。これを数学に当てはめると「数学を理解する必要はない。理解しているように振るまえば十分である。」ということになるだろうが、これは数学教師がまず言わない言葉だろう。

のし袋に名前を書く時は、最初に補助線を鉛筆で入れなさいと言う。補助線有りて書いてもへたなのに無しでうまく書けるわけがない。実際にはいくら字をうまく書きたいと願っていても、補助線を書く人はほとんどいないそうだ。目標がはっきりしていれば、それを達成するために効果的な手段を選び、自分を助けるのは当然なのに。本当に必要とされているのは、目標の達成を真に願うことである。ちなみに、数学でも苦手な人ほど補助線（補助線の意味が違うが）や計算の過程を書かない傾向がある。人は案外自分の幸福を望んでいないのかもしれない。

うまい字を書くには、ゆっくり時間をかけて書け、と言う。これも当たり前のようだが、もともとうまくて才能のあるプロでさえゆっくり書いているのに、せっかちに書いてうまく書けるわけがない、という指摘はもっともだ。数学でも、学生さんは「 $\times$ が分かりません」と簡単に言うが、実は学生さんが分からない部分は本質的に難しい場合が多く、専門家でさえかつてそれを理解するのに非常に大きなパワーをかけた所だったりする。それをちょっと考えただけで分からないとか数学は苦手だとか面白くないとか言うなんざ百万年早いわっ、（口）ノゴルー！（演出の都合上、若干乱暴な言葉を用いています）というわけなのである。

本書を読んで字がうまくなる人は大勢いるはずである。私はと言うと…実はそれほどうまくなりたいと思ってない自分を発見しただけ…だったりして。

執筆者紹介

原 信一郎

教育開発系准教授。専門領域は、代数的位相幾何学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『練習しないで、字がうまくなる！』阿久津直記著 サンマーク出版 2011年
1,470円

ブックガイド目次へ

“Kaltxi” — ナヴィ語への招待

『アバター』

ジェームズ・キャメロン監督

ツァヒク「スカイピープルに教えても頭がいっぱいで何も入れようとしなない」

ジェイク「大丈夫。俺の頭は空っぽだ」

映画を見る楽しみは映像表現だけではない。言葉もその一つである。映画『アバター』に登場する惑星パンドラに住むナヴィはナヴィ語を話す。このナヴィ語が人間に習得可能な言語であることは映画の冒頭のほうで、新しく赴任したアバター・ドライバーのノームが長年ナヴィの研究を続けているグレース博士とナヴィ語で会話をしたことからわかる。このことが教えてくれるのは、発音に必要な身体に関して人間とナヴィは共通点を持ち、人間の言語と共通する文法体系をナヴィ語も持っているということである。更にナヴィは社会性を有する集団を構成しているということも、ノームのナヴィ語に対してグレースが「表現が硬いけど」と言ったことからわかる。つまり、ナヴィ語は文脈や相手に応じて使い分けをしなければならないということが示唆されるのである。

ナヴィ語が人間の言語と共通点を持つと書いたが、これは当り前の話で、実はジェームズ・キャメロン監督に依頼された言語学者のポール・フロマーが人類の様々な言語を基にしてコミュニケーション可能な音韻、形態、統語システムを有する言語として創作したからである (<http://www.learnnavi.org/>)。フロマーは人類の様々な言語——言語の多様性と普遍性についてはマーク・C・ベーカー著『言語のレシピー多様性にひそむ普遍性をもとめて』[岩波現代文庫]——に存在する要素、すなわち、音を構成する要素、語を作る手段、文を構成する語と語の関係を表す手段などをハイブリッド化した人工言語を創造した。

ナヴィ同士が話すナヴィ語の会話を聞いていると日本語にはない特徴的な発音が聞こえてくる。その一つとして放口音 (ejective) が挙げられる。この発音はナヴァホ語——太平洋戦争時硫黄島戦などナヴァホ語が日本軍に対する暗号として用いられたことはサイモン・シン著『暗号解説』[新潮文庫]に詳しい——などのアメリカ先住民族の言語やハウサ語などのアフリカの言語で用いられる(楽器の演奏を口で模して行うヒューマン・ビートボックスにも類似した音の作り方がある)。例えば、「こんにちは」を意味する表題の“Kaltxi”の“tx”であれば“t”の

発音の構えのまま止めた息を爆発的に放出することで発せられる音である。

文法面において日本語との共通点は、日本語と同じように助詞に当たる言葉が名詞につき、語順が自由に変えられる点が挙げられる。一方相違点は、日本語とは異なり、英語と同様に動作を行ったり感じたりする主体を言語的に明示する点である。このことは、ナヴィ語の“oe-ri txal tisraw si”（わたしは - 背中 - 痛み - する）が日本語の「背中が痛い」に相当することからもわかる。ナヴィ語では痛みを感じる主体である話し手が表現対象として客観的に捉えられ言語的に明示されるのに対して、日本語では主体である「わたしは」を明示しない表現が好まれる（事態の主体の言語化・非言語化に関する詳細な議論に関しては廣瀬・長谷川著『日本語から見た日本人－主体性の言語学』[開拓社]。言語学に基づき日本語が英語などの言語と比較され、従来の日本人論が批判的に検証されている）。

言語研究者の立場からいうと、『アバター』が映画史上画期的なのは、3Dなどの映像表現技術にあるのではなく、ナヴィの言語と文化の創造にある。物好きというのはいるもので、ナヴィ語の学習者がいる（アメリカのドラマシリーズ『Glee』シーズン2にナヴィ語で話す場面がある）。辞書と文法と音韻が整備されたサイト（<http://www.learnnavi.org/>）も立ち上がり、ユーチューブでも様々な動画がアップロードされている。19世紀終わりに世界平和を目的にザメンホフによって創造された人工言語エスペラント語とは異なる出自を持つ森の民の言語ナヴィ語がネット空間や現実世界において今後どのような発展を遂げていくかは興味深いところである。

執筆者紹介

加納 満

教育開発系准教授。専門領域は、言語学・日本語教育。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『アバター [DVD]』 ジェームズ・キャメロン監督 20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン 2009年 3,490円

『言語のレシピ：多様性にひそむ普遍性をもとめて』 マーク・C. ベイカー著 郡
司隆男訳 岩波書店（岩波現代文庫） 2010年 1,491円
『暗号解説 上・下』 サイモン・シン著 青木薫訳 新潮社（新潮文庫） 2007年
620, 660円
『日本語から見た日本人：主体性の言語学』 廣瀬幸生、長谷川葉子著 開拓社
2010年 1,890円

[ブックガイド目次へ](#)

『街場の教育論』

内田樹著／ミシマ社

著者の内田樹（うちだたつ）先生は、長らく神戸女学院大学で教鞭を執られ、昨年度退職された「日本の正しいインテリ・リベラルおじさん（自称）」です。そしてその実は、思想家、武道家、翻訳家と多彩な才能をお持ちの方です。

私がウチダ先生を知るきっかけになったのは、関西地区限定で発行されています雑誌「ミーツ・リージョナル」での連載コラムでした。この雑誌をご存知の方おられますか？三年程前まで長岡駅前にあった大阪出身の店主が経営していたアジア料理店では、毎月この雑誌を購読していて、たまたま手に取ったのが最初です。コテコテの大阪ネタだったり、京都の最新クラブJAZZシーンのレポートだったり、面白記事満載なのですが、特にこのコラムでは、政治、経済、教育、映画から漫画に至るまで多彩なテーマを取り上げ、独自の語り口で諸問題に対する議論がテンポ良く展開されていました。かなり込み入った問題がテーマとして取り上げられていることもあるのですが、これまでに体験したことのないスルスルと読めてしまう独特の文体が心地よく、すぐにファンになりました。毎月最新号が出るのを楽しみにして、そのアジア料理店に行くと読み入るようになりました。

ここでご紹介する『街場の教育論』は、ウチダ先生が2007年度の大学院の講義の内容を原稿に起こしたものに、加筆した内容になっているとのことです。「はじめに」でこの本は教員に向けて書いたとありますが、講義で取り上げた内容だったわけですから、本学の大学院・学部学生の皆さんにとっても十分楽しめるものになっていると思います。

これまでにウチダ先生の著書『ためらいの倫理学』と『おじさんの思考』を読んできましたが、実はどの本も同じことを言っています。というか、ご本人もブログでそう言っていました。すなわち、社会のフルメンバーたる【成熟した大人】になれという強烈なメッセージが響いてくる、という事です。『街場の教育論』では、もちろん教育問題に特化した内容も述べられていますが、ご多分に漏れず、言いたいことは【大人になれ】ということなんだなあ、と強く感じました。

私はウチダ先生の「当たり前のこと」を「当たり前」に述べている姿勢に、なんだかとても安心感を覚えます。【成熟した大人】になるために、良く勉強しなさい、とか親や親戚を大事にしなさい、とか、周りの人に優しくしなさい、とか。ここまでハッキリと言ってくれる人、あまりいませんよね。なんだか当たり前すぎて口に出すとチョット恥ずかしいし。でも良く考えてみてください。皆さんの周囲でそんなことを聞くこと、ありますか？テレビ、ラジオ、インターネットなどの情報媒体でそのような「あたりまえ」のことを、あの手この手、切り口を変えて述べてくれる人って居ます？

生きていく上で当たり前のことを大上段に構えて語る。そういえばこれって宗教ですね。お坊さんの説法ってこんな感じですよ。キリスト教でも「隣人を愛せよ」なんて言ってるし。実は神戸女学院はキリスト教の教えを建学精神の基盤として持っているから、ウチダ先生の論法が宗教的なのは当たり前なんですね。この本でも最後の方に宗教と教育についてかなり詳しく論じられています。

この本は「教育論」ですから、そもそも学校とはどのような場所なのか？大学で学ぶべきことの本質とは何か？といった根本的な問いから始められています。また、師を持つことの重要性、近代における教育問題（学力低下、いじめ）の構造、等について独特の議論が展開されていきます。なるほどね、こんな考え方もあるのね、と目から鱗です。

皆さん「何のために大学で講義受けてるのかな？」なんて思う事ありません？その答え、日本を代表するインテリ・リベラルおじさんからのメッセージとしてこの本に書いてありますよ。

執筆者紹介

黒木雄一郎

電気系助教。専門領域は、材料工学。

『書名』	著者名	翻訳者名	出版社または文庫・シリーズ名	出版年	税込価格
『街場の教育論』	内田樹著		ミシマ社	2008年	1,680円

[ブックガイド目次へ](#)

『古事記』

岩波書店

学校の歴史の教科書には、我が国で最古の歴史書として紹介されています。712年に太朝臣安萬侶（オホノアソミヤスマロ）によって元明天皇に献上されました。今年は編纂1300年に当たります。古事記という名称は歴史の教科書の中で目にした人も多いのですが、中身についてはたいていの人は読んだことがないと答えます。確かに読んでいないかもしれませんが、読んでいとも言えるのです。天の岩戸、因幡の白兎、海幸彦・山幸彦、八岐大蛇（ヤマタノオロチ）、これらはみな古事記の中に収蔵されている神話なのです。ただし、これらの神話を個別に読んでいたとしても古事記を読んだことに気づかないのは、神話の間に存在する時間軸を理解していないからです。古事記はさまざまな神話や伝説を時間軸にしたがって整理した書物の集大成なのです。

古事記は神武天皇から始まる天皇の系統を説明しています。右側にかなり傾いた内容ですから、それは最初にお知らせしておきますし、それを納得してから読んでください。しかしながら、読み出すと大変興味深い世界が頭の中に広がっていきます。常に新しいものを世の中に提案していかなければならない、科学技術の世界で生きている、あるいは生きていこうという者にとって、何かしらの感性を与えてくれます。無から有をどのように生み出すのか、それをどう捉えるのか、1300年にわたって継続しながら伝えられてきたということは、それなりに理由があるわけです。つまり、この国の民族の多くが受け入れることのできる考え方、それが古事記に描かれているのです。

もともと何もなかった宇宙に天と地が分かれて出現します。そして天上界の高天原（タカマガハラ）に現れた天之御中主神（アマノミナカヌシノカミ）ら三柱の神は独神で目には見えませんでした。独神とは、男女の区別のない神という意味です。男女を作るとその男女はどこから生まれたのかという議論に発展するので、最初の神は独神なのです。その後、だいぶ後になって伊邪那岐命（イザナキノミコト）と伊邪那美命（イザナミノミコト）の男女神が現れます。男女神は人間の姿をしています。

古事記の世界にはたくさんの神々、すなわち八百万の神々が描かれています。我が国の民族が持つ特徴的な考え方です。一方、キリスト教、イスラム教、ユダ

や教などは一神教として知られています。この考え方の違いは双方の社会システムの違いに少なからず影響を与えています。例えば、古事記の中の神々は合議制でものごとを進めていきますし、ある神に困りごとのあるときには位の高い神々に相談に行くのです。こうすることによって、大きないざこざを予め避けようとする日本人の知恵を見ることができます。

伊邪那岐命と伊邪那美命の二神は、天上の天つ神の合議により、この国土を固定し、整備せよと命を受けます。そして天と地の間にかかる天の浮橋に立って矛を海につけてコオロコオロとかき鳴らして、それを引き上げる時に矛の先から滴る潮が積もって固まり島となります。こうやって大八嶋国（オオヤシマノクニ、日本列島）が出来上がります。何もない宇宙空間に時空の歪みによってエネルギーが局在し、それが質量を創生するという現代の科学に通じる所があるのが面白い場面です。無から有を創生するのに、いつの時代も同じことを考えるのでしょうか。また何かを始める時には、必ず神々の合議があるというのも面白い場面です。

独神が現れてから、古事記の中では神（島、山、動物に宿るものも含め）、そして人間を増やさなくてはなりません。いきなり相当な数をそろえないと712年の当時に存在した島、山、動物、人間すべてがそろっているという理由が説明できません。神が死ななければよいのですが、古事記の中では神は死ぬことになっています。例えば伊邪那美命は火神を生んでそれが原因で死にます。ですから、古事記の中では何でもありで、産めよ増やせよをありとあらゆる手段を使ってやります。これくらいしないと、すぐに人口は減少に転じるという戒めが書かれているといっても過言ではありません。天上の天つ神に対して地上には国つ神が現れます。この国つ神の神々は、男女で出会えばすぐに子作りをします。美人を見つけた際に「私はあなたと交わろうと思うがどうか？」と問い、女神は「大変嬉しい話だと思います」と答えて、すぐに事が始まるのです。この程度はまだ現実的で、近親相姦あり、穢れを清めるために洗って神が生まれるという話まで出てきます。

有名な天照大御神（アマテラスオオミカミ）は、伊邪那岐命が死んだ伊邪那美命を追って訪問した黄泉の国から戻り、黄泉の国で染み付いた左の目の穢れを水

で洗ったときに生まれました。鼻を洗ったときに生まれたのが暴れん坊で有名な建速須佐之男命（タケハヤスサノオノミコト）です。そして、この二神が高天原で天の岩戸伝説を繰り広げるのです。

出雲の大神である大国主命（オオクニヌシノミコト）はみんなにいじめられながら、なんとか出世していくという、現代人の好きな波乱万丈物語の原点の主人公であると言えます。大国主命はとてもお人よしで、兄弟神にいいように使われていたのですが、因幡の白兎を助けることにより兄弟を出し抜いて美人で有名な八上比売（ヤカミヒメ）と結婚しました。ところがそれに嫉妬した兄弟神に何度も殺されるのですが、そのたびに別の神に助けられて生き返ります。兄弟神から逃れるために建速須佐之男命の国に行きますが、そこで建速須佐之男命の娘と恋に落ち、はたまた建速須佐之男命にいじめられます。

このように、さまざまな神話が組み合わさって構成されているのが古事記です。このあともいくつかの神話を経て、いよいよ神武天皇の誕生となります。物語として読んでよし、我が国の民族の考え方を探るのもよし、はたまた無と有の哲学を考察するのもよし、これほどさまざまな面をもつ書物はありません。なお、古事記の原文を読み解くのは専門家でもたいへんなので、例えば角川書店の古事記など、解説付きの本を読んでみてはいかがでしょうか。

執筆者紹介

斎藤 秀俊

副学長、物質材料系教授。専門領域は、機能材料工学、水難救助学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『古事記：現代語訳付き』 中村啓信訳注 角川学芸出版（角川文庫） 2009年
1,180円

ブックガイド目次へ

『天平の薨』

井上靖著／新潮社

『氷輪』

永井路子著／新潮社

『曼陀羅の人』

陳舜臣著／たちばな出版

『雲と風と 伝教大師 最澄の生涯』

永井路子著／中央公論社

『空海の風景』

司馬遼太郎著／中央公論社

『空海』

佐藤純弥監督／東映

日本人は「無宗教」だ、という言説を見かけることがあるがこれは誤りだと思う。基本的には日本は仏教（お寺さん）と神道（神社さん）のハイブリッドのような宗教環境にあり、目をつり上げて宗教活動、布教活動することは余りないが（カルト宗教以外は）、ケースバイケースでそれぞれの宗教儀式（お宮参りとか法事とか）に参加することで、心の平安を得ている、という辺りではないだろうか。日頃宗教に関心は無くとも、自分の家の宗教は何なのか、知っておくのも大人として何かの際に必要なになるだろう（因みに筆者の家は神道。神棚はあるが仏壇はない）。

この稿で取り上げる本は、8世紀の鑑真和上招聘から真言宗、天台宗が定着する9世紀までの日本仏教の確立期を扱った小説（または史伝）である。

・『天平の薨』

話は天平四年（西暦732年：奈良時代前半）から始まる。6世紀に伝来した仏教は朝廷の保護により全国に広まっていたが、僧が守るべき戒律を定めた「戒」を受けける僧、戒和上が未だ存在していなかった。日本仏教の完成を目指すべく、戒和上招聘を目的として第九次遣唐使に4人の日本僧が留学僧として参加するが、その使命は簡単なものではなかった。無事唐土に到着はしたものの、戒和上として日本に渡ってくれる僧は簡単には見つからない。在唐10年、ようやく高名な学僧鑑真が、日本へ行こう、と言ってくれる。しかし、妨害、難破、皇帝の不許可

などで5回の渡日の試みが失敗し、その間、日本僧の内、帰国を拒む者、他の夢を追う者が現れ、そして一人は唐土に客死する。鑑真和上も5度の渡日失敗の中で失明してしまう。様々な困難の後、一人残った日本僧普照（ふしょう）はついに鑑真和上一行と共に帰国を果たす。

井上靖氏の研ぎ上げられた日本語は簡潔かつ美しい。できればこのような文章を書いてみたいものである。井上靖氏がもう少しご存命だったら、ノーベル文学賞日本人二人目は井上氏だったろう。

・『水輪』

上の作品の終盤辺りでは、鑑真和上は日本に上陸し、和上招聘の目的であった授戒の儀式が行われ、そして唐招提寺が建てられた、と一応のハッピーエンド的に語られるが、「水輪」は和上一行が都に到着した辺り（天平勝宝6年、西暦754年：奈良時代中期）から始まる。

都に到着した一行は朝廷によって大歓迎を受けるが、その後の事態は鑑真らと共に帰国した普照が思い描いていたようには進まない。授戒権を握ることで仏教界を完全に支配下に置くことを目論み、一旦、日本人の戒和上が誕生すれば唐僧達を棚上げ（用済み）扱いにしようとする朝廷、新参の唐僧に改めて戒を授けて貰わないと僧として認められないことに反発する日本の仏教界、さらに朝廷内部での主導権争い、藤原仲麻呂の乱、道鏡事件。教科書に載らない話と、教科書では関連性抜きで語られる事件が複雑に絡み合い、歴史が進行してゆく。

修学旅行の定番となっている奈良の唐招提寺は、今でこそ立派な伽藍となっているが、鑑真和上の生きていた時代、そこは寺“未満”の唐律招提という私塾に過ぎず、それも失脚した皇族の屋敷跡にその屋敷の古材を利用して建てられた粗末なものでしかなかった事をこの本で知った。そのことを知ると、20年の歳月の果てに日本に戻った普照、5度の失敗にめげずに波濤をこえて来日した和上一行は、空しく感じなかったのだろうか、と思ってしまうが、そう思うのは私が凡人だからなのだろう。唐招提寺の、あまり観光客の行かない一角に、和上達が命がけて伝えた「戒」を授ける戒壇の跡がある。

・『曼陀羅の人』

弘法大師空海、間違いなく日本史上のスーパースターの一人だろう。この作品は空海の生涯の内、遣唐使に留学僧として同行して入唐（西暦804年；平安時代初期）するところから、20年滞在の予定を2年で切り上げて離唐するまでを扱っている。海賊と疑われて上陸できないでいる遣唐大使の窮地を、名文達筆の手紙で救う所から始まり、長安に着けば瞬く間に梵語（サンスクリット語）をマスターするわ、当時長安に集まっていた様々な宗教者と親交を結ぶわ、外連味たっぷりに密教の大阿闍梨（カソリックだとローマ法王みたいなもの）恵果のもとを訪ねれば「我先より汝の来るのを待つや久（来るのずっと待ってたよ）」と言わしめ、僅か三ヶ月足らずで密教を完全にモノにするとすぐに大阿闍梨の位を授けられ、東アジア密教世界のトップに立ってしまう。頗る格好良く、日本人として痛快である。

「水輪」で西域出身の少年僧として登場した如宝（によほう）は後年唐招提寺を完成させた人とされている。『曼陀羅の人』の中の空海の回想で、若き空海が老僧となった如宝と対話する場面がある。ここで鑑真と共に来日した唐僧の名を見ると、旧知の人が苦難の末に平安を得たことを知らされたようで、懐かしく何だかホッとする。

・『雲と風と 伝教大師 最澄の生涯』

弘法大師と並び称される伝教大師最澄。教科書では単純に並列標記されてしまうが、2人の運命は複雑な綴れ織りをなしている。天衣無縫で数々の伝説に彩られた空海に対して最澄はあくまでも真面目である。

琵琶湖のほとりの豪族の子として生まれた最澄は仏門に入る。時代は桓武天皇が国家事業として、新都造営（長岡京と平安京）、蝦夷（東北）征伐、遣唐使派遣を推し進めていた頃にあたる。真面目に12年の山籠もりをした後、桓武天皇の近くに上がった最澄は、悩める帝を救わんと真面目に天台教学の研究を始め、日本国内だけでは限界があると感じると真面目に遣唐使とともに渡唐することを志願する。空海と同じ遣唐使節で渡唐するが、長安には行かず真面目に天台山に直

行して大急ぎで教典を集め日本へ帰る。帰れば古い仏教界と真面目に論争し、そして自分が唐で偶然のように拾ってきた密教が不完全なモノだと知ると、後から戻った空海に真面目に弟子入りしようとする。

華やかな空海に比較して最澄は真面目で地味なように思えるが、彼の建てた延暦寺はその後、法然、日蓮などの日本仏教の指導者を多く輩出している。天才空海に対して最澄は真面目な教育者として優れていたのだろろうと思わせるその後の歴史である。

・『空海の風景』

香川県（空海の生地、讃岐）出身者には必読書だろう。空海の生まれから入定まで、当時の社会情勢、歴史のうねり、最澄との絡みも含めて膨大な資料を基に分厚く描いている、所謂「司馬文学」である。『曼陀羅の人』に比較すると、やや空海と距離を取っているようで、少し突き放しているような感じもうける。空海と最澄の間で交わされた論争や、密教とは何か、についての司馬氏の解釈も興味深い。それでは問題の理趣経、それから大日経と法華経も読んでみようか、という気になる。

高野山（真言宗の総本山）では、空海は入滅（死）したのではなく今でも奥の院の廟所の中で定（じょう；生と死の間の定常状態？）にあるのだとされているらしい。現在でも、毎日の食事と衣服を整える特別な役割の僧侶が存在しているそうである。

奈良時代は何々の乱とかが頻発し、都が結構血なまぐさいけれど、平安時代に入るとあまりそういうことがなくなる（武士の登場までは）。真言宗、天台宗などが成立し、古代日本が成熟してきたということなのだろう。理工系の人間は、「宗教」、と聞くと、迷信だ、と否定するのがかっこよさそうに見えるが、元来、宗教と科学とは別次元のものだと思う。歴史的には宗教の持つエネルギーは否定のしようがない。

・おまけ『弘法大師御入定1150年御遠忌記念映画 空海』

高野山の全面協力で作られた、弘法大師の生涯を描いた映画。空海役は北大路欣也氏、最澄役は加藤剛氏、ほか大物俳優多数。当時の歴史をかなり忠実にトレースしているので、観てから読んでも、読んでから観てもなかなか感慨が深い。

執筆者紹介

内田 希

物質・材料系准教授。専門領域は、無機化学、計算機化学、熱化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『天平の甍』井上靖著 新潮社（新潮文庫） 1987年 420円

『氷輪 上・下』永井路子著 中央公論社（中公文庫） 1984年 720, 760円

『曼陀羅の人：空海求法伝 上・下』陳舜臣著 たちばな出版 2003年 品切

『雲と風と：伝教大師最澄の生涯』永井路子著 中央公論社（中公文庫） 1990年 900円

『空海の風景 上・下』司馬遼太郎著 中央公論社（中公文庫） 1994年 720, 780円

『空海 [DVD]』佐藤純弥監督 東映 [製作年 1984] 2008年 4,725円

[ブックガイド目次へ](#)

『新平家物語』

吉川英治著／講談社

小・中・高校と、なぜ歴史の勉強をするのかといえば、受験で良い点を取るためだというのが、この国の現状である。

日本の歴史の受験勉強は、めまいがするくらいの膨大な歴史事象の暗記とイコールである。それは、記憶力と忍耐力を試しているだけで、人間力の成長という観点では、労多くして功少なしといったところではないだろうか。

私が思うに、人間が歴史を学ぶことの意義のひとつは、アイデンティティの確立と愛国心の教育である。自分たちは何者であるのか、どうしてこの地でこういう志向を持って生きているのか、を理解し、未来に向けて何を目標としてどう生きるのかということを定めるためには、自分が生まれ育ったところの歴史をまず理解する必要がある。他方で、すべての国民に自国の歴史を勉強させることで、愛国心を養わせることは、国家戦略上、必要な行為だと思われる。国民が愛国心を持っていることは、国家成立の前提条件ともいえる命題であるからである。

しかし、今の日本の歴史教育では、アイデンティティと愛国心のどちらも養える状況ではなく、完全に失敗していると私は思う。

かたやヨーロッパ諸国では、自国の歴史の授業と言え、かつては大航海時代以降のわずかに数百年だけを勉強するものであり、最近では、第二次世界大戦以降の歴史だけを勉強する国もある。現在から徐々に過去にさかのぼりながら歴史を学ぶという授業スタイルが採用されているところもある。そうすることで、若い人々にアイデンティティと愛国心を植え付けるのである。日本の歴史教育は、戦略上の観点から、他の国と比較して、非常に遅れているのである。あるとき私は一念発起して、日本の歴史を勉強しなそうと決意した。歴史事象の記憶ではなく、その背景にある精神論的なものを学ぼうと思った。日本人固有の武士道的なものの考え方のルーツを知りたいと思い、何がよいか調べているうちに、最初に武士の世を造った、平清盛という人に興味が湧いた。そこで、吉川英治の新平家物語をなんとなく読み始めた。新平家物語は、文庫本で16巻、約6000頁という大作である。平清盛の出生から、平家滅亡までを描いた長編作品である。難しい状況に追い込まれたときの、清盛の苦悩やバランスの取り方は、複雑化した社会の中で答えを見いだしにくい我々にとって、参考になるところが多い。今の時代、勧善

懲悪的なものよりも、人間の二面性を赤裸々に綴った本作のようなもののほうが、得るものが大きいと思う。特に組織のリーダーには、清盛的な資質が求められるのだが、最近は若い人に限らず、その辺のことが理解されていないようにも感じる。特に日本のリーダーたるべき、政治家の方々と、清盛的な資質が欠落している人が多い。

なお、私は東日本大震災以降、あまり本を読む余裕がなくなって、「屋島の戦い」のところで長期休憩している。なんとか今年中には読破したいと思っている。

執筆者紹介

田中 泰司

環境・建設系助教。専門領域は、コンクリート工学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『新・平家物語 全16巻』 吉川英治著 講談社（吉川英治歴史時代文庫） 1989
年 各777円

ブックガイド目次へ

『ふぉん・しいほるとの娘』

吉村昭著／新潮社

私と年代の近い方だと、30年以上前に、テレビの朝ドラマ（TBS系1970年）で「オランダおいね」という番組があったのを覚えているのではないのでしょうか。私自身、ドラマのストーリーは全く覚えていないのですが、主演女優は、美貌の女優丘みつ子でした。吉村昭氏の『長英逃亡』の後に、1800年代の日本の状況についてもっと知りたいと思い、手にしたのがこの本で、そして思い出したのが先の朝ドラの題名でした。

吉村氏は、主に歴史小説を多く執筆していますが、当然とは言え、事実を丹念に集め、当時の世相を鋭く描く作家として知られています。私も、若い頃は司馬遼太郎の明るい世界に強く影響を受けましたが、ある年代を過ぎたころからは、同じ題材を扱っていても、司馬遼太郎の『坂の上の雲』における日本海海戦よりは、吉村昭の『海の史劇』に戦いの虚しさを感じ、『ポーツマスの旗』の外交官の必死の努力と報われぬ悲哀に想いを共有できるようになりました。

前置きが長くなりましたが、1823年にオランダから日本にやってきた医師シーボルト（正式名はフィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルトで、ドイツ人）の娘として1827年に生まれたのが主人公のイネ（楠本イネ）です。数奇な出自のため、幾多の苦労を背負いながら、日本人として初の女医となり、宮内庁御用掛にも任命された後、1903年、享年76歳で天命を全うするまでの人生を描いたものです。

時は、江戸幕府も最後の下り坂を転げ落ちる直前で、1829年シーボルト事件（シーボルトが日本の地図を国外に持ち出そうとした事件）、1837年大塩平八郎の乱、1839年蕃社の獄（渡辺崋山、高野長英）、アヘン戦争（1840～2年）、1841年天保の改革、1853年ペリー来航、1858年安政の大獄、1860年桜田門外の変、1867年大政奉還、1868年明治維新、と世は将に激動の時代でした。

シーボルトはオランダ国からいろいろな使命を背負わされて長崎の出島に来ます。欧州の優れた医術を身につけていたことは、当時の日本にとって非常に有益で、鳴滝に塾を作り、多くの弟子を育てたことはあまりに有名です。しかし、日本国の詳細な地図を持ち出そうとしたことで、国外追放になりました。イネが2歳のときです。イネの母は芸妓でしたが、当時の長崎は日本で唯一国外に開かれた場

所でもあって、比較的自由の雰囲気があったようです。とは言っても、見るからに日本人とは違った容貌で目立っていて、幼い頃から、自分は一人で生きていかなければならないという意識が強かったようです。

13歳の時に、自立のため、長崎から伊予宇和島の二宮敬作というシーボルトの弟子だった医師の下に旅立ちます。船と徒歩しか手段のない時代の一人旅に、単に“健気”という以上に、自分の置かれている厳しい境遇を受け止め、生き抜くという意志の強さに感動させられました。そこで5年を過ごした後、産科の専門を極めるため、岡山の石井宗謙の下に行きます。彼もシーボルトの弟子で、イネの指導をよくしたのですが、齢とともに際立つ容姿を備えたイネに、師としての理性を失い、過ちを犯します。25歳になっていたイネですが、人間に絶望し、生きることにも絶望し、うつろなまま母のいる長崎に戻ります。しかし、子のために生きることを決意し、また、産科の技術が世間から求められたことも幸いして、再び医学の道に挑戦します。村田蔵六（後の大村益次郎）にオランダ語を教わったりもしています。

ペリーの来航以来、欧米各国から日本に開国の圧力がかかる中で、イネが32歳の時に、父のシーボルトが再びオランダの特使として30年振りに来日します。昔の弟子が鳴滝塾に集まりますが、30年間欧州で政治の世界で生きてきたシーボルトには、新たな医学の知識はなく、弟子はおろか、娘のイネにまで愛想を尽かされる結果となり、1年半で帰って行くこととなりました。

幕末から明治の動乱期にも、産科の技術で伊予の伊達藩主（宗城）や福沢諭吉とも知り合い、46歳の折には宮内庁御用掛にまで採用されるのですが、開国した明治初期の学術、技術の進歩は著しく、産院を開業しているだけのイネには、それらの流れに付いて行くことはできず、50歳の折に、再び故郷の長崎に戻ります。

望んでできた子ではなかったとは言え、その子が支えとなり、さらに3人の孫にも恵まれ、日本で最初の女医という称号を残して76年の人生を終えました。

私の筆力では吉村昭氏の名を汚すことを恐れます。是非、皆さんの目で読み、心で感じてもらえればと思います。

執筆者紹介

丸山 久一

環境・建設系教授、専門領域はコンクリート工学、耐震工学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ふぉん・しいほるとの娘 上・下巻』 吉村昭著 新潮社（新潮文庫） 2009年
935,987円

[ブックガイド目次へ](#)

『室町時代の一皇族の生涯「看聞日記」の世界』

横井清著／講談社

前回、「中世の秋」を紹介したので、今回は日本のものということで、余り知られていないかもしれない（だから選んだ）が、関連するものとして取り上げてみた。

「看聞日記」は、室町時代前期の一皇族の応永23年（1416）から文安5年（1448）まで、足利義満没後、將軍義持から義政就任後幾ばくかの間、30有余年に及ぶ日記である。原本「看聞日記」の著者、伏見宮貞成親王は、南北朝統一後の北朝側の皇族で、崇光天皇の孫、後花園天皇の父である。京都近郊の伏見の里で過ごした日々の記述が淡々と続く。饒舌にして波乱と珍奇に富む、と著者は紹介している。

原本の日記（続群書類従 捕逸にある）の存在は半世紀近くも前に知っていたのだが、漢文で書かれており、当然のことだが、あまり興味もわかぬ行事の記録も多く、原本を読む気にもなれず、誰かが書いた紹介本が出るのを期待していたところ、暫く気付かなかったが、ある日ふと目にとまり手にしてみた。

以前、本学におられた杉山先生が、中東で従事した当時の経験から、考古学者なんて墓掘りですよ、と自嘲しておられた。シュリーマンがトルコやギリシャで発掘していたころは、宝飾品目当てであったろう。盗掘の盗人と大差なかったかもしれない。が、近頃は、ゴミ捨て場と便所が考古学の対象と聞く。DNA鑑定が発達したからだ。養老孟司さんも古い人骨には違和感はないのかもしれない。対象が地味になったのだ。だから、派手な活劇がなくても良いだろうとの魂胆である。

ドナルド・キーン氏がこれも大分前、朝日新聞に、日本人の日記の紹介を連載したことがあったので、その中に含まれているかもしれないと思って、調べてみたのだが含まれてはいない。序文で貴族の漢文の日記が余り取り上げられていないと本人も認めており、明月記を取り上げたところで、こぼしていた。漢文ではあるし、注釈書もないと。史学者はそれで十分だろうが、素人は読みにくい、と。あまり興味もわかぬ事実の記録などは端折ってくれたらよい、と述べている。氏

は文学者なので、個人感情が吐露されたところに、時を越えて共感できるところを探っているが、史学者は、無味乾燥な、とキーン氏が称する当時の慣習を読み取るために用いる。

同じようなものに藤原定家の明月記がある。良く知られた「世上乱逆追討耳に満つと雖も之を注さず、紅旗征戎吾が事にあらず」の記述を、私も昔初めてこの部分を目にしたとき、キーン氏と同じ過ちをした。これも漢文でキーン氏ならずとも読み通すにはつらい。堀田善衛氏が「明月記私抄 正統」（ちくま学芸文庫）を書いている。文学に興味ある方にはこちらの方が有名だろう。だから、目立たぬ方を紹介してみた。ドナルド・キーン氏の連載は「百代の过客」（朝日選書259、講談社学術文庫）として残る。こちらのタイトルは、氏が取り上げた日記、紀行文の中でも芭蕉の「奥の細道」の書き出し、「月日は百代の过客にして、」から取ったもので、更にこれは李白の「夫、天地者万物之逆旅、光陰者百代之过客、而浮世夢如、為歎幾何、」からの引用であったことを思い出した。（私がこの語に接したのは年代順であった）プルースト著「失われた時を求めて」の「紅茶に浸したマドレーヌ・・・」、というふうに興味をそそられたら、お手にされては如何か、という次第。

人は時には、騒がしい現代の日常を離れて、旅をしたいと思うことがあるに違いない。身体を移動せずに、実行しようというとき、書物が役に立つ。見知らぬ風景に、目を見張ることはないのだが、違和感こそ道のつれづれ、毒にも薬にもならないが気分転換にはなる。

「看聞日記」の世界は、著者により、良く読み続けられるものに仕立て直されている、と感心したことを覚えている。何か役に立つのか？と言われても、多分役には立たない。何が面白いのか、と問われても小説や物語ではないので、これも人による、と答えるしかない。「異界の旅」を辿る気がしたら、紐解いて見るのも一興。振り返ってみて、この本に登場する人物たちは、我々と隔絶しているのか？

ソフォクレス「オイディプス」では、意識されてなかったことがあらわになっ

たとき悲劇が生じ、シェイクスピア「マクベス」でも予期せぬうちに悲惨な状況に追い込まれていくではないか。我々もいつか舞台に立たされてしまうかもしれない。ひょっとすると解死人を演じる羽目に陥らないとも限らない。時立てば、後に我々も奇怪な風習に染まった怪物と見なされるだろう、と想像をたくましくするところに読書は成立すると。

執筆者紹介

高橋 秀雄

教育開発系准教授。専門領域は、数学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『室町時代の一皇族の生涯：『看聞日記』の世界』横井清著 講談社（講談社学術文庫） 2002年 1,470円

『定家明月記私抄』堀田善衛著 筑摩書房（ちくま学芸文庫） 1996年 945円

『定家明月記私抄 続篇』堀田善衛著 筑摩書房（ちくま学芸文庫） 1996年 1,155円

『百代の過客：日記にみる日本人』ドナルド・キーン著 金関寿夫訳 講談社（講談社学術文庫） 2011年 1,785円

ブックガイド目次へ

『上杉鷹山』

童門冬二著／学陽書房

長岡で偉人と言え、山本五十六氏を挙げる方が多いのではないかと思います。では、この山本氏に影響を与えた人物を御存知だろうか。もちろんあれだけの人物なので、多数の方と関わり、影響を受けたものと思うし、長岡であれば河井継之助氏の名前を挙げる方も多いのではないかと思います。私としては上杉鷹山公の名を挙げたい。

上杉鷹山は、現在の山形県、出羽国米沢藩の上杉家第9代藩主である。上杉謙信を藩祖とし、景勝を初代藩主とする米沢藩は、豊臣秀吉から直江兼統に与えられた封地である。しかしながら関ヶ原の戦いで破れ、禄高を縮小され、上杉家には米沢藩30万石のみが与えられることになる。その後は、忠臣蔵で有名な吉良上野介の放蕩の借金を背負わされるなどにより、これ以上ないほど財政が逼迫し江戸幕府に版籍奉還を申し出る寸前に至っている。この上杉家を立て直すために、17才の若さで婿養子として藩主に招かれたのが鷹山で、質素儉約を旨とし、産業振興を奨励し、古いしきたりと戦いながら、藩民の意識を変えることに成功した改革のリーダーであり経営者である。そして次々代の藩主斉定の代に蔵元への借金を返済し、明治維新まで上杉家を存続させる礎となっている。

私が上杉鷹山を知ったのはバブル崩壊後に書店に並んでいたハウツー物の文庫本であったと記憶している。当時は、経済的に困窮した時にだけ、こういった人物に焦点を当てるのではなく、日頃から手本にするべき偉人なのではないかという感想を抱いたのであるが、不思議と教科書には取り上げられていない人物のようである。鷹山の名を知らなくとも、「為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり」という名言を聞いたことはあるものと思う。また、ジョン・F・ケネディが大統領就任時に「尊敬する日本人は？」と問われて「ウエスギ ヨウザン」と答えたと言われている。こういった言葉や評価の背景を知る意味で、価値の高い作品と捉えている。紹介する本は鷹山の生涯を描いた物語であり、気軽に読むことができるので、ぜひとも目を通していただければと考えている。

執筆者紹介

白清 学

電気系助教。専門領域は、計算機システム・ネットワーク。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『小説上杉鷹山 上・下』 童門冬二著 学陽書房（人物文庫） 1995年 各693円

[ブックガイド目次へ](#)

『旅に出よう―世界にはいろんな生き方があふれてる』

近藤雄生著／岩波書店

タイトルは極めてシンプル、しかも岩波ジュニア新書である。「もう大学生なのに！」と思う人もいるかもしれない。でも、まずは手にとってほしい。そしてひとたび「はじめに」を読んだら、ぐいぐい引き込まれていき、一気に読んでしまうだろう。そして数時間後に読み終えた時には、なぜか充実感に浸っている自分がいることに気づく。それぐらい何かを感じさせてくれる本である。

本書は、大学院卒業後に妻と共に5年あまりに渡って世界各地を回った著者が、その旅で出会った人々の中で特に印象に残った人たちの生き様を著者の五感を通して語ったものである。旅本は、とにかく「俺ってすごいだろ」といった自慢漂う武勇伝か、あるいは「内向きの若者たちよ、外に目を向けよ！」と説教めいた話になりがちだが、本書はそのどちらでもない。著者が見た風景、聞いた音や声、嗅覚でとらえたもの、手に触れた物や生き物、口にした食べ物について生き生きと、そしてある意味淡々と伝えてくれている。

本書は9つのエピソード、つまり9人の主人公が登場するが、各ストーリーの背景には宗教、歴史、戦争、文化、家族、環境、国家など私たちを取り巻くありとあらゆる諸問題が横たわっている。著者はそれを客観的に我々読者に伝えつつ、それらのストーリーを自分の中で受け止め、自分自身の考え方、生き方に改めて向き合った上で、その思いを再び私たちに語っている。

私は基本的に、人は何歳になっても何でもできると思っている。でも、「その時」にしておいたほうがいいこともあるのは確かだ。しかし残念なことに「その時」を見極められずに、後になって「ああ、あの時にしておけばよかった」と思うこともある。その一つが、「長旅に出ること」だと思う。とはいえ、実際に長期間の旅をするのは簡単ではない。時間、お金、体力、知力、気力、勇気、周囲の理解などなど様々な条件が整わないとできないことだ。でもこの本を読めば、著者の追体験ができる。本の良さはそこにある。著者の描写を頭に描き著者の言葉を反芻し、「私ならどうするかな」と頭を悩ましたり、「俺はそう思わないな」と反論してみたり、「そっか、そういうことだったのか」と発見にわくわくしたりそんなことを可能にしてくれる。

学生時代に出会っておくとよいもの。「一生付き合える友人（あるいは伴侶）」、「卒業後にもときどき会いたくなる教員」（教員としてはうれしい限り）、そして自分のバイブルとなるような「本」。人間関係が苦手だと思っている人も本が相手なら気軽に付き合えるし、それに本は半永久的にそばにいてくれる。食欲に自分の「バイブル」を探してほしい。

この本を読み終えた誰かが、すぐに休学手続きをして旅に出てしまったら、私は少し責任を感じつつも、密かに拍手をしてしまうかもしれない。ちなみに、著者は工学部出身である。

執筆者紹介

リー飯塚尚子

教育開発系准教授。専門領域は工学系日本語教育。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『旅に出よう：世界にはいろんな生き方があふれてる』 近藤雄生著 岩波書店
(岩波ジュニア新書) 2010年 861円

[ブックガイド目次へ](#)

『地球生活記 世界ぐると家めぐり』

小松義夫著／福音館書店

『此処彼処』

川上弘美著／日本経済新聞社

『辺境・近境』

村上春樹著／新潮社

『街道をゆく』

司馬遼太郎著／朝日新聞社

人はなぜ旅に出たくなるのでしょうか。

人を旅へかりたてるものは何でしょう。特定の場所へのあこがれ、日常とは違う何か、そんなものを求めているのでしょうか。

自分自身が旅をすることと、旅についての著作を読むことはまったく別の行為であるにもかかわらず、読み終わると、もしくは読んでいる最中にもまるで自分も一緒にその土地をめぐったような気持ちになる本があります。そんな本に出合えたときは本当にうれしい。あくまでも個人的な体感なので、おもしろくないよ、と言われてしまうかもしれないけれど、以下に紹介するのは私の旅心をかきたて旅の充足感を与えてくれた本です。

『地球生活記 世界ぐると家めぐり』 小松義夫 福音館書店

アフリカ、ヨーロッパ、アジア、オセアニア、アメリカと、五大陸の家屋とそこに暮らす人々の写真集です。想像を絶する家ばかりで、建築に興味のある人にもない人にも一見の価値があります。石、土、木、竹、草など素材はその土地特有のもの、建っている場所も砂漠、川や海の上、地下など様々。

ページを繰るごとに、こんな家が本当にあるのか、こんなところによくぞ住んで、という驚きの連続です。それら世界各地の写真をみた後では、見慣れているはずの日本の首都圏の過密ぶりの写真も、これだけ沢山の人がほんとに住んでいるのか、というなんだか非現実的なものに見えてくるから不思議です。

『此処彼処』 川上弘美 日本経済新聞社

バックパックやスーツケースを持って遠いところに行くだけが旅行ではない、この本を読むとそう思います。家のすぐ近くの玉川上水沿いの雑木林でも、仕事

の途中で通りかかった地下鉄大手町駅の雑踏でも、インドリを見に行ったマダガスカルでも、遠くても近くてもその場所で感じた気持ちのゆらぎが同等のものとして描かれているからです。

川上弘美さんの文章を読んでいると、平易で客観的な言い回しの中に、ときおり日常を飛び越えた何か違うものがひょいと顔をのぞかせる瞬間があります。この本はじつは旅について書かれたものというよりは、場所についてのエッセイなのですが、文章の独特な力によって、普段の生活の中に潜む「旅」が軽やかに浮かび上がってくるのを感じます。

『辺境・近境』 村上春樹 新潮社

村上春樹氏の紀行エッセイの中でも、「旅をする」ということに強く意識を向けて書かれている作品のように思えます。瀬戸内海の無人島の一泊、3日間食べ続けた讃岐うどん、震災のあとの故郷神戸を歩く旅、メキシコの歌謡曲あふれるバス、車でのアメリカ横断、そしてノモンハンの戦車や草原の狼。読んでいると、自分自身は透明になって、旅をしている作者の上空から、または作者のすぐ隣で、それぞれの土地を見ているようです。

また本書に挿入されている写真は文章とのバランスが抜群です。それらの写真は本篇とは別に「写真篇」として1冊にまとめられており、文章とはまた違う旅の一面を味わうことができました。

『街道をゆく』 司馬遼太郎 朝日新聞社

昭和46年から週刊朝日に25年間連載されたもので、単行本では全43巻になる大著です。司馬遼太郎氏は国内各地だけでなく、オランダ、アイルランド、台湾、ニューヨークなどの海外も訪れ、日本人及び日本についての思索を縦横無尽にめぐらせています。

今回、ブックガイドの原稿を書くにあたって上記の『辺境・近境』を読み返していたら、ノモンハンのくだりで、『街道をゆく』第5巻の『モンゴル紀行』を思い出しました。こちらにもノモンハンのことが記されており、久しぶりに再読し

ました。

平成6年の村上氏はノモンハンに行くことができましたが、昭和48年の司馬氏にはモンゴルと中国の国境など、行きたくとも行けない場所だったのではないかと思います。実際に戦車の残骸や落ちていた銃弾などに触れた村上氏のノモンハンと、ウランバートルやゴビ砂漠から歴史的一幕として描いている司馬氏のノモンハンを興味深く読み比べることができました。

『モンゴル紀行』は少年時代から抱いていたモンゴルへの透明な憧れと、学徒出陣でご自身も戦車兵科の下級将校として戦争に関わらざるを得なかった作者の満州への陰鬱な思いが、豊富な歴史知識と深い思索により純度の高い結晶のような文章で構築されている旅行記です。『街道をゆく』はどの巻もたいへん読み応えのある作品ばかりです。関心のある地名があれば、是非一度手にとってみてはいかがでしょうか。

大学生の頃は時間がたっぷりあったのだと気付いたのは社会人になってから、ことに痛感したのは結婚して子どもが生まれてからです。知らない土地に行ってみることや歩き回することは時間と体力のあるときにしかできません。なので、まずは実際に旅に出ることをお勧めします。けれども他の人の視点をとって見知らぬ土地を（または自分の見知った土地であっても）眺めることのできる旅行記を読むことも得がたい経験になるのではないのでしょうか。

この稿を読んでくださったあなたも、どうぞよい旅を！

執筆者紹介

安原 明子

本学学術情報課学術資料係長。担当事務は図書館資料の受入、管理、分類等。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『地球生活記：世界ぐると家めぐり』小松義夫著 福音館書店 1999年 5,250円

『此処彼処』 川上弘美著 新潮社（新潮文庫） 2009年 460円

『辺境・近境』 村上春樹著 新潮社（新潮文庫） 2006年 500円

『街道をゆく 全43巻』 司馬遼太郎著 朝日新聞社（朝日文庫）新装版 2008-2009年 525-987円

『辺境・近境 写真篇』 村上春樹著 新潮社（新潮文庫） 2006年 780円

[ブックガイド目次へ](#)

『県庁おもてなし課』

有川浩著／角川書店

本書の舞台は高知である。実際に高知県にはおもてなし課があるのだが、この小説は架空の話である。県庁の観光部に新しくできた「おもてなし課」に所属する主人公が発案して「観光特使」の制度をつくったことから端を発して話が進む。最初は、型にはまったお役所仕事の連続が、民間人の発想と行動力に感化されて、徐々に変わっていく。観光特使の1人に任命された東京在住の作家、県庁を早期退職して民宿を営みながら観光コンサルタントをする人物、この2人がおもてなし課に化学変化を少しずつおこし、高知県の自然を使った観光企画を目指して、県庁体質に挑んでいくという話である。県庁体質から少しずつ脱して、民間を巻き込んだ企画を進めていくということで、ある意味ではサクセスストーリーである。

私の仕事柄、自治体（都道府県、市町村）の職員と付き合うことが多い。彼らは個人としては非常に優秀で熱心でありながら、組織としては、確かに融通の利かない「お役所」としての性格が前面に出ることが多々ある。この小説は、まさにそういった状況を、著者特有の軽い文体で愉快に展開していく。アルバイトで助手として雇った若い女性との恋愛、主人公が師匠と仰ぐ作家との関係、県庁から放逐されたも同様でありながら県庁に協力する観光コンサルタントとその娘そして作家の関係など、伏線も豊かである。

公務員を目指す人はぜひ、読んで欲しいし、地域興し・活性化、町おこし、などに興味がある人も非常に楽しめる内容である。「お役所は民間と比べてぬるい」「県庁ルールという民間感覚でみると時間の無駄遣い」といった、かなり、型にはまった示し方は、上述のように、個人としての公務員の熱意を逆撫でしそうではあるが。実在する高知県おもてなし課は少ないスタッフで、高知県の観光を真剣にプロデュースしているのだよ。2011年に出版された本で読んだ中では、軽いのりで読めるが内容は深いものを持つ好著であり、若い感性をもつ者が、社会という手垢にまみれた世界にもまれる前に読むと良いと思う。

他にお勧めできる有川浩の本

- ・ 阪急電車 阪急今津線の8つの駅を舞台に乗客が繰り広げる様々なエピソード
- ・ 図書館戦争シリーズ 架空の法律が施行された世界を描くライトノベル

執筆者紹介

中出 文平

環境・建設系教授。専門領域は、都市計画（土地利用計画 地区計画）。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『県庁おもてなし課』有川浩著 角川書店 2011年 1,680円

『阪急電車』有川浩著 幻冬舎（幻冬舎文庫） 2010年 560円

『図書館戦争』有川浩著 角川書店（角川文庫） 2011年 700円

『図書館内乱』有川浩著 角川書店（角川文庫） 2011年 700円

『図書館危機』有川浩著 角川書店（角川文庫） 2011年 700円

『図書館革命』有川浩著 角川書店（角川文庫） 2011年 700円

『別冊図書館戦争 1』有川浩著 角川書店（角川文庫） 2011年 660円

『別冊図書館戦争 2』有川浩著 角川書店（角川文庫） 2011年 660円

[ブックガイド目次へ](#)

『富士山頂』

新田次郎著／文春文庫

『芙蓉の人』

新田次郎著／文春文庫

早い人では中学生で読破しているかもしれない。ここに紹介する新田次郎の作品群は理系少年の心をくすぐるに十分な内容を有している。新田次郎は無線電信講習所本科すなわち現在の電気通信大学を卒業している理系の人だ。現在の気象庁にあたる中央気象台に入庁し、すぐに富士山測候所に配属となった。

私は小学校時代にラジオの気象通報を聞きながら天気図を作ることに目覚め、中学に入学しても毎日夜10時からのNHK第2放送を聴きながら天気図を描くくらい、気象が好きだった。中学校の百葉箱を毎日整備し、気象観測データをまとめて、中学校気象台を自負して、放送室から地域の天気予報まで流していた。それほどの理系少年に理科の先生が薦めてくれたのが、新田次郎著の『富士山頂』と、『芙蓉の人』だった。両方とも、富士山の気象観測を題材とした小説である。『富士山頂』は富士山測候所に気象レーダーを建設するために活躍した人々を描いており、『芙蓉の人』は富士山測候所が設立に至ったきっかけとなった明治時代の夫婦による気象観測を描いている。

まずは、『富士山頂』から読むことを薦める。新田次郎は富士山測候所に勤務してから5年間にわたり通算400日を富士山頂で過ごしている。すなわち、富士山頂を自分の体をもってして体験しているのである。小説の中の細かな描写は、気象庁職員としての専門的な目で観察した結果であり、さらに小説家としての文章表現の結果でもある。その文章中の専門性の高さは、理系少年の心をとらえるばかりでなく、30年以上経った今でも知的好奇心を満足させることができる。

小説の中では、気象庁観測部測器課補佐官 葛木章一が主人公である。この人物、気象庁の職員であり、小説の印税で本俸よりも稼ぐ男であり、まさに新田次郎そのものであるところが面白い。有体に言えば、自伝だ。小説は葛木が大蔵省（現：財務省）で主計官相手に富士山レーダーの必要性について予算折衝するシーンから始まる。主計官が「それでは（富士山レーダーの）工事の具体的方法を5分間で説明してください」と問い、それに対して葛木は「できます。2分でやれというのなら2分でもできるでしょう」と答える。要するに、大型予算をつける

のに相応しいプロジェクトは、説明も単純明快にできるというのである。それまでの全国の観測網では台風の進路を判断するのに1時間かかっていた。台風の進み方によっては、すでに50km先に進んでいる。これでは進路予報とはいえない。富士山に気象レーダーを設置すれば瞬時に台風の位置と動きがわかるのである。レーダーは台風による人的被害を減らす、わが国の台風の砦となる。

中学生の時にこの部分を読み、大人になったら自分のやりたいことを一言で単純明快に人に説明できるようになろうと決意し、いままさにそれを実践している。確かに、大型予算を獲得したり、多くの人の協力を得たりするのに、説明は短ければ短いほどよい。短い一言を聞いて、それを聞いた人の頭の中にどれくらいの連想イメージが湧き出るか、そこがポイントだ。勝手にイメージを膨らませてくれるのであれば、説明は5文字でよい。

この『富士山頂』は昭和42年に発表されている。その後、この小説の解説を題材にした連載が会計検査院の定期誌「会計と監査」に連載された。この連載を残念ながら読んだことがないが、想像するに予算折衝の心構えと国民の血税の正しい使い方を勉強するための教材に使われたのではないだろうか。宇宙からの目である気象衛星が登場するまで、富士山レーダーは台風災害からわが国を守ったのだ。

さて、もう一冊の『芙蓉の人』について触れてみよう。芙蓉とは富士山の古語であり、明治28年に富士山頂にて冬季観測に挑んだ野中到の妻千代子をさす。新田次郎は富士山測候所に勤務するようになってから、野中到本人と親交を深めた。野中到は大学予備門を中退して、富士山観測所の設立を唱えだしたところ、「世界において富士山より高いところにある高層観測所は南米のエル・ミスチー山とフランスのモンブラン山の2山だけである。しかもいずれも夏期しか観測をしていない。もし富士山で冬期の気象観測に成功したら、それこそ世界記録を作ることであり、国威を発揚することである」と訴えている。

現代であれば、こう思っても「動かない政府は何をやっているのだ」と文句ばかり言っている人が多いだけであるが、野中到は自ら富士山に野中観測所を建設するのである。自分でよいと思ったのであれば、自分が動けばよいのである。私

は中学生のときにこのような姿勢にたいへん感動した記憶がある。野中到は、いよいよ富士山で観測を始める前に、日本気象協会の機関紙である気象集誌に「富士山頂気象観測所設立について」という寄稿をしている。

妻の千代子は、夫を見送った後、夫が一人で気象観測をしながら生活するのは無理だと感じ、後を追うように富士山に登る。実は夫に黙って気象学の勉強をして観測機器についての知識を得ていた。妻が役に立たないと思っていた野中到だが、日々を過ごすうち妻の実力に気がついていくのである。高山病で体調が思わしくない野中到の仕事を引き継ぎながら交代で富士山頂にて気象観測を続けたのであった。そして壮絶なクライマックスを迎える。

野中夫妻の挑戦があったからこそ、その後の富士山測候所の建設につながり、わが国の天気予報の精度向上につながった。わが大学のモットーであるVitality Originality ServicesのうちのServicesがこの挑戦にあたるのではないだろうか。高い能力を備えた人は、それを社会のために正当に行使する義務を負うのである。この小説を読んで、そこまで思う人が出てくれるとうれしい。

執筆者紹介

斎藤 秀俊

副学長、物質材料系教授。専門領域は、機能材料工学、水難救助学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『富士山頂』 新田次郎著 文藝春秋（文春文庫） 1974年 490円

『芙蓉の人』 新田次郎著 文藝春秋（文春文庫） 1975年 520円

ブックガイド目次へ

『星を継ぐもの』

ジェイムズ・P・ホーガン著、池央耿訳／東京創元社

SF（サイエンス・フィクション）小説を嗜む諸氏も多いと思うが、「ハードSF」という分野があるのをご存知だろうか？あくまでもフィクションであるから、本当にはあり得ない物語であることは確かなのだが、ストーリーの根幹において科学的な知見や科学的な論理整合性が取れているSFをハードSFと呼んでいる。ファンタジーやスペースオペラも、未来や宇宙を舞台とする点でSFではあるし、壮大だったり爽快だったり夢見心地になったりするが、科学的には矛盾を孕んでいたり荒唐無稽なものが多い。これに対して、ストーリーの展開そのものにも、登場人物の行動にも、科学的態度が貫かれているのがハードSFである。

アーサー・C・クラークの『2001年宇宙の旅』など古くからハードSFは書かれているが、ここで紹介するジェイムズ・P・ホーガンの『星を継ぐもの』は、その中の金字塔と呼んでも過言ではない。

近未来、月面で真紅の宇宙服を着た人間の遺体が発見される。月面基地には行方不明者もおらず、結局、この遺体は身元不明で「チャーリー」と名付けられる。地球に送って放射性同位元素法で調査したところチャーリーはなんと5万年前に死亡していたことがわかる。チャーリーとは何者なのか？どこから来たのか？この謎に天才的原子物理学者ヴィクター・ハント博士が挑む。これが、この小説のプロローグである。

この後、ハント博士や偏屈な生物学者クリスチャン・ダンチェッカー教授らが謎を解き明かして行くわけだが、この過程が科学のマナーに則っている。すなわち、仮説と検証とを繰返すことによって、謎の核心に迫って行くわけである。もちろん、ある時点で立てた仮説が検証してみたら否定されることもある。また、仮説が正しいことが検証されても、そこから新たな謎が生れたりもする。この小説では、それらの過程が曖昧さや黙示を排除して、論理的に明確に書かれている。さらに、登場人物の生活や行動様式の描写にまで、科学性・論理性が貫かれているのである。

私たちは「技術科学大学」の教員や学生であるからして、当然ながら常に科学的な態度で仕事を進めているわけであるが、取組んでいる問題の困難さに気をとられたり、時間に追われたりして、つい科学的態度が疎かになっている事もある。そんなときに、限りなくやっかいな謎を、その態度を徹底して貫くことによって

解明して行くこの小説は、原則を愚直に守ることの重要性を再認識させてくれる。研究に行き詰まった時に、ぜひ読んでみることをお勧めする。ただし、この小説には、『ガニメデの優しい巨人』、『巨人たちの星』、『内なる宇宙』と続編があり（さらに訳本が出ていないが『Mission To Minerva』も続いている）、読み出すと止まらなくなる可能性があるので、注意が必要である。

執筆者紹介

湯川 高志

電気系准教授。専門領域は、知識処理、テキスト処理、並列コンピューティング。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『星を継ぐもの』 ジェイムズ・P.ホーガン著 池央耿訳 東京創元社（創元SF文庫） 1997年 735円

『ガニメデの優しい巨人』 ジェイムズ・P.ホーガン著 池央耿訳 東京創元社（創元SF文庫） 1981年 777円

『巨人たちの星』 ジェイムズ・P.ホーガン著 池央耿訳 東京創元社（創元SF文庫） 1983年 987円

『内なる宇宙 上・下』 ジェイムズ・P.ホーガン著 池央耿訳 東京創元社（創元SF文庫） 1997年 各882円

『Mission to Minerva』 James P. Hogan著 Baen Books 2005年 2,203円

ブックガイド目次へ

『ナイン・ストーリーズ』

J.D.サリンジャー著、野崎孝訳／新潮社

J.D.サリンジャーといえば、『ライ麦畑でつかまえて』が有名ですが（同書は、ジョン・レノンを射殺したマーク・チャップマンの愛読書としても有名）、本書は、そのサリンジャーが自身のお気に入りの短編を文字通り9つまとめて1953年に出版した『NINE STORIES』の翻訳本です。ちなみにサリンジャー本人も、1965年を最後に2010年に他界するまで一切作品を発表せず、外部との接触さえ拒否し続けた伝説の謎の作家であります。

そもそも、この本をどうして読み始めたのかはよく覚えていません。たしか高校3年生のときに近所の行きつけの本屋で手に取ったのが初めだったと思います。それまで“洋物”といえば「古典的」文学作品ばかり読んでいた自分にとって、作中人物と一緒に自分もその場面にいるかのような錯覚を抱かせる彼の独特な描写手法に衝撃を受けたのを覚えています。

その9つの話、『バナナフィッシュにうってつけの日』、『コネティカットのひよこひよこおじさん』、『対エスキモー戦争の前夜』、『笑い男』、『小舟のほとりで』、『エズミに捧ぐ—愛と汚辱のうちに』、『愛らしき口もと目は緑』、『ド・ドーミエ—スミスの青の時代』、『テディ』にはすべて若い人が出てきます。時代こそ1940、1950年代の話ですが、彼の描く若者たちは、子供でも大人でもない当時の自分の中に簡単に入ってきました。以来、私の愛読書です。

この本を、ふと読み返したくなるときがあります。電車やバスに乗ってばーつと車窓を見ている時や旅先で初めて訪れた街をぶらぶらしているときなど、「あの作品のあの場面」というのが急に頭に浮かんできてどうしても読みたくなる、そんなときは迷わずに本屋に向かいます。思い返せば、これまでに4、5冊はこの本を買っていると思います。立ち読みもよくします。

今の情報化された社会では、自分が見たいと思う映像（シーン）はインターネットの動画サービスなどを使えば、好きな時に好きなだけ見られるかもしれません。しかし、本を読むということは自分の頭の中に自分で映像（ヴィジョン）を作り出すこと、それは誰かと簡単に共有できるものではありません。自分の中にだって毎回違う映像が創り出されるわけですから。本でしか得られないものはまだまだあります。

この本は9つの短編作品もそれぞれ独立していて、厚さもそれほどない読みやすい作品です。また、すこし大きな書店にいけば英語版も入手できます（英語も平易で読みやすく、洋書に挑戦するにはちょうどいいです）。是非、一度、手にとって読んでみてください。

執筆者紹介

塚部 暢之

本学学務部国際課長。技術士（原子力・放射線部門）。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ナイン・ストーリーズ』 サリンジャー著 野崎孝訳 新潮社（新潮文庫）
1988年 460円

『Nine stories』 J. D. Salinger著 Little, Brown 1953年 504円

[ブックガイド目次へ](#)

『イン・ザ・プール』

奥田英朗著／文藝春秋社

『空中ブランコ』

奥田英朗著／文藝春秋社

『町長選挙』

奥田英朗著／文藝春秋社

Q：昨今、パニックとかPTSDなどという精神科専門用語がドラマや日常の会話で使われることが多いですね。一口に不安障害と言うそうですが、これは何ですか？

A：不安障害とは文字通り、心の中に不安が溜まり、それが社会生活において障害となる状況をいいます。

Q：障害というからには治らないのでしょうか？

A：いわゆる障害者（障碍者、障がい者）の障害ではなく、disorderという言葉の直訳ですので治るものもあります。

Q：どうすれば治るのですか？

A：薬でも心理・精神療法でも効果がありますが、治療より、なぜそういう障害（病気）が増えてきたのかの背景を考える方が重要と思います。象徴的には社会不安障害（SAD）というものが知られています。文字通り、社会生活上でさまざまな困難に直面した時、それに圧倒され、無意識に自分を守るためある種の言動を取るようになります。それが「普通」のものであれば問題ありませんが、「異常」であれば問題です。具体的には人前に出ると上がってしゃべれなくなるとか、手を常に洗っていないと気が済まないとか、さまざまあります。過呼吸などもパニック障害の特徴ですね。

Q：PTSDは？

A：Post Traumatic Stress Disorderの略です。日本語では心的外傷後ストレス障害といいます。強い心理的な出来事（心を傷つけるという意味でトラウマ（外傷）という）のあと、さまざまな症状が出ます。災害、事故、戦争などのほか、監禁、虐待、レイプなどの犯罪などが原因となります。今回の大震災により、多くの人がPTSDとなることが懸念されています。自己防衛としての多重人格なども話題となっていますね。

Q：修論や就活、就職した後の仕事や企業業績、さらには日本経済（日本の将来）についていろいろと不安があります。不安障害にならない予防策はないのでしょうか？

A：予防は難しいですね。どんな状況にも挫けない強い精神力を誰でもが持つという訳にはいきません。ただし、不安を持った時にそれに対処する力をあらかじめ用意しておけば、良いかもしれません。ひとりだけ名医を紹介しましょう。すでにテレビドラマやアニメでおなじみかもしれませんが、奥田英朗著『イン・ザ・プール』『空中ブランコ』『町長選挙』の主人公Dr伊良部です。ここに出てくる患者を研究するのも一案です。不安障害に陥ったあとはDr伊良部に診てもらうのが最良ですが、なかなか忙しい方なので、とりあえず、本の中で診てもらうしかないと思います。そうそう、診てもらう時には看護婦のマユミさんに気を付けて下さいね。ビタミン注射も怖がらずに。

執筆者紹介

三宅 仁

経営情報系教授、体育・保健センター長。専門領域は医用福祉工学。最近は心理学と工学の合体を目指している。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『イン・ザ・プール』 奥田英朗著 文藝春秋（文春文庫） 2006年 530円
『空中ブランコ』 奥田英朗著 文藝春秋（文春文庫） 2008年 530円
『町長選挙』 奥田英朗著 文藝春秋（文春文庫） 2009年 530円

[ブックガイド目次へ](#)

『涼宮ハルヒシリーズ』

谷川流著／角川書店

いわゆるラノベ（ライトノベル）であって、第1作の『涼宮ハルヒの憂鬱』はスニーカー大賞作品であって、シリーズ累計1600万部も売れている本なのだから、教員の私なんぞが紹介するよりも学生諸君の方が良く知っているであろう。ということで、小説そのものの紹介はここではしない。Wikipediaにストーリーから登場人物まで詳細に掲載されているので、それを参照すれば充分である。

ここで書きたいのは、この小説、そしてこれを原作としたアニメーション番組（アニメ）から、インターネット時代の新しいメディアミックスが始まったことである。小説を原作としてマンガを出版する、映画やアニメを上映・放送する、キャラクターグッズを販売する、といったメディアミックスは古くからあった。この『涼宮ハルヒシリーズ』もそこまでは同じであった。しかし、ストーリーに学園生活で良くあるイベント（学園祭でのバンド演奏）が含まれていたこと、アニメのエンディングテーマ「ハレ晴レユカイ」に振り付けがなされ主人公たちが曲に合わせて踊っていること、などから、物語のなかの曲を演奏したり、テーマソングに合わせて踊ったり、という読者・視聴者が現れた。これが折しも、YouTubeやニコニコ動画などのCGM（Consumer Generated Media）サービスが普及する時期と重なり、演奏やダンスがこれらのサービスに続々と投稿されることになった。そして、この動画を他の消費者が見て、小説やマンガ、アニメのDVDを購入したり、また、自分でも踊ってみたり、と、消費者同士の共鳴により作品が爆発的に有名になって行ったのである。また、作者側も振り付けの絵コンテを公開するなど、消費者の派生作品の制作に間接的に協力している。

従来のメディアミックスは、複数のメディアに展開するものの、あくまでも供給者から消費者への一方通行であった。ところが、この作品の場合は、前述のように消費者もメディアに派生作品を発信し、供給者・消費者が共鳴しながら作品の価値を高めて行ったという点で、まさに「web2.0」の思想に基づいた発展形態となったのである。

さらに、この作品の楽曲を演奏したり踊ったりしたことをきっかけとして、人気が出て、プロとしての活動に入る消費者も現われた。インターネット時代の「スター誕生」である。このようなメディアミックスのモデルが成立し得ることを先

駆的に示した点で、この作品の社会へのインパクトは限りなく大きい。アニメが意図的に演奏やダンスを精緻に描いていたことや、CGMの普及期といったタイミングも要因としては大きいですが、やはり、原作のストーリーそのものに、それらの素材となるだけの魅力があったということであろう。

文学やSFファンからすれば「所詮はラノベ」という意見も多いだろうし、実際のところ、それははずれてはいない。しかし、インターネット時代の社会へのインパクトという側面から、読んでみる価値のある作品である。

執筆者紹介

湯川 高志

電気系准教授。専門領域は、知識処理、テキスト処理、並列コンピューティング。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『涼宮ハルヒシリーズ』 谷川流著 角川書店（角川スニーカー文庫） 2003-2011
年 540-630円

[ブックガイド目次へ](#)

『砂漠』

伊坂幸太郎著／新潮社

伊坂幸太郎は、最初、大学生の娘に実質的な処女作である「オーデュボンの祈り」を勧められ、その後、ほとんど全ての作品、文庫本、単行本で出版されているものを読破した。その中で、一番のお勧めが「砂漠」である。そもそも名著であっても、青春時代に読まないとその若々しい感性に反応しない本がある。例えば、一昔前ならばサリンジャーの「ライ麦畑でつかまえて」や夏目漱石の「こころ」がその類であろう。この「砂漠」も学生時代に出会っていればもっと感動しただろうという本である（それでも、私も大いに楽しんだのだが）。実際に、大学生である私の娘と息子は絶賛している。

入学した大学で出会った5人の男女が、様々な出来事や事件に出会い、共に経験したことで互いの絆を深め、それぞれ成長させあっていくという青春小説である。モラトリアムとしての学生時代を謳歌する学生達が、比喻としての『砂漠』という厳しく苛酷な『現実の社会』へと出ていく前の様々な出来事を描いている。登場する5人はそれぞれ个性的に描かれている。話し手としての主人公北村が、当初は醒めた性格で物事を俯瞰的に見ていたのが、徐々に変わっていくのだが、そこには何事にも熱い西嶋という同級生の言動が大きく関わってくる。この西嶋は『砂漠に雪を降らせるような試み』に真剣に取り組み、世界平和を祈るために麻雀では、ひたすら「平和（ピンフ）」をあがろうとする。実は5人のうち4人には麻雀につきものの東西南北が名字に入っていたりする。

伊坂幸太郎の本は、ほとんどの作品が伏線を綿密に張りめぐらし、それを後ろの方で回収するという巧みなプロットで構成されているが、この作品もまさにその通りである。また、春、夏、秋、冬という章で構成して、大学生生活を季節ごとに追っているのだが、これは一年生の時の話と信じ切って読んでみると、著者の罫にはまっていることに最後に気がつく。一年の春、二年の夏、三年の秋、四年の冬の話なのである。読んでいる最中に、時間的に違和感を抱いていた部分が最後に晴れ晴れとした気分とともに、解決する。

とにかく、自分自身の置かれた境遇、環境がシンクロできる学生時代に読んで感動して欲しい本である。昨年末に発表された「今、読みたい新潮文庫2012年」で第一位になっているから、私だけの思い込みではないと思った本である。

他にお勧めできる伊坂幸太郎の本（実はどれもおもしろいのだが）

- ・オーデュボンの祈り 今読みたい新潮文庫2009年の第一位、一風変わった推理小説？
- ・ゴールデンスランバー 首相暗殺の濡れ衣を着せられた男の二日間に亘る逃亡劇

執筆者紹介

中出 文平

環境・建設系教授。専門領域は、都市計画（土地利用計画 地区計画）。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『砂漠』伊坂幸太郎著 新潮社（新潮文庫） 2010年 780円

『オーデュボンの祈り』伊坂幸太郎著 新潮社（新潮文庫） 2003年 704円

『ゴールデンスランバー』伊坂幸太郎著 新潮社（新潮文庫） 2010年 900円

[ブックガイド目次へ](#)

『現代アメリカ女性詩集』

高橋綾子、小川聡子著／思潮社

私の初めての翻訳詩集が出版されましたので紹介したいと思います。私は、学生時代からアメリカ現代詩を専攻してきました。アメリカ現代詩と聞いて、音楽の好きな人なら、ボブ・ディランを知っているでしょう。そもそも、なぜ人は詩を書くのでしょうか。詩は声に出して読み、時に言霊が生まれ、聴く人に強い力を与えます。言葉に深いメッセージを込めて、伝達することができるのです。ディランが活躍するもう少し前の1956年以降、アメリカでは、詩の朗読が文化的な力を持つほどになりました。私は学生時代、詩のもつ文化的な力にとっても興味を持ちましたので、代表的な詩人の作品を読みました。それは、男性詩人ばかりでした。1970年以降フェミニズム運動が興りましたが、それよりもずっと前ですから、男性中心なのは当然かもしれません。そこで、女性詩人の作品が日本で翻訳紹介されていないことに着目しました。とりあげた詩人は、アン・ウォールドマン、ダイアン・ディ・プリマ、ジョアン・カイガー、ジェーン・ハーシュフィールドの4人で、翻訳とともに、それぞれにインタビューを行い収録しました。ここでは代表的な詩のフレーズを紹介しましょう。

アン・ウォールドマンは、著名なパフォーマンス詩人ですが、1978年コロラド州ボウルダー核兵器製造工場に反対し、水素爆弾工場へ通じる鉄道線路の上で座禅を組み、逮捕されました。このことを歌った詩の抜粋が次の引用です。

【代表作 私は覚えている、逮捕されたことを・・・】

私は覚えている ロッキー山脈の核兵器製造工場で逮捕されたことを、

私は覚えている 私たちがロッキーフラッツの敷地内で座り込みをしたときに、その守衛がメガフォンをもってカウントダウンをしたことを。「あと十分でここから撤退せよ・・・九分・・・八分・・・」など。

私は覚えている ロッキー核施設の周りに巨大な人間の輪を何マイルも作ったことを。

私は覚えている ロッキー核施設の近くに乗馬に行った時、馬小屋で毛のない奇形の小牛を見たのを。

引用の詩は、「私は覚えている」を繰り返す手法ですが、「リスト」とよばれる

詩学の形式です。この繰り返しがあるので、リズムカルになります。この詩を読むと、詩人がロッキーマン核施設周辺の被害の事実を告発し、その事実から市民としてのいのちや生活を守るために立ち上がらなければならなかった決意が表明されていることが解ります。現在、福島の問題に直面する日本人にはとても大きな意義を与えてくれる詩です。この詩集全体を通して、詩に込められたいのちの尊厳の視点に気づいてもらえたら、翻訳者として大変嬉しく思います。

執筆者紹介

高橋 綾子

教育開発系准教授。専門領域は、アメリカ現代詩、環境文学、ゲーリー・スナイダー研究。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『現代アメリカ女性詩集』 高橋綾子、小川聡子著 思潮社 2012年 2,520円

[ブックガイド目次へ](#)

『忘却の河』

福永武彦著／新潮文庫

忘却の河は、一人の人物と、その二人の娘、妻、娘の知り合いの男性、それぞれの独白で綴られる、七編連作の一人称小説の形の長編小説である。その一つ一つが、独立した中編として完成した作品として読むことができるし、事実、一編ずつ独立に発表されている。

この作品は、もう40年以上前に書かれたもので、戦争の余韻がまだ実感を持って残っていた時代を背景とした物語だが、そこに現れる主題は、今の世代と何も変わるところはない。

登場人物たちは、妻が治癒の見込みのない病で寝たきりになってはいるものの、特段の大きな悲劇の渦中にいるわけではない。それでも、一人一人が、それぞれの想い、それぞれの後悔の中で、人に言えない悩みを抱え、苦悩し続けている。人の心は、外からは見えない。そして、外からは見えないがゆえに、すれ違い思い悩むことになる。この作品は、一章ごとに語り手が替わり、それぞれの目にお互いがどう映っているかが語られることで、一人一人の苦悩が多面的に示されることになる。

「人が人を好きになる。それから嫌いになる。あるいは好きでも嫌いでもなくなる。それなら、なぜ人は人を好きになるのだろう。」

これは、恋愛に悩む下の娘の言葉だが、彼女の一番の不安は恋愛ではなく、自分が父親の娘ではないかもしれないということだ。彼女は母親のことは好きだが、父親にはどうしても距離を感じてしまう。

父と母が好きあって結婚したのだとしても、今は好きでも嫌いでもないようにしか見えない。だとしたら、母はなぜ、私を産んだのだろう。彼女が母親に、なぜ自分を産んだのか尋ねる前に、母親は病気で亡くなってしまう。

父親は、結婚前に自分の不誠実のために、恋人と連絡が取れなくなり、とにかく謝るために実家を訪ねて行き、彼女が自分の子供を身籠もったまま、自殺したことを彼女の老母から聞かされる。老母は訪ねてきた自分が誰であるかも訊こう

としなかった。

そうして、謝ることも許されることもできないまま、忘れることもできずに生きている。また、長患いの末に妻を死なせたことで、妻に対しても自分が不誠実だったことにまた許されざる罪を感じる。

忘却の河、とはギリシャ神話の冥界を流れる川、レーテー Letheのことで、死者がこの川の水を飲むことで現世のことを全て忘れると言われている。レーテーは、彼岸と此岸を隔てる川ではないが、賽ノ河原、三途の川と重なる部分を持つ。許されない罪にとって、忘却は唯一の救いとなる。

人は忘れることもできないまま、誰かをずっと愛し続けることができるのだろうか。

なぜ、小説を読むのか。それは、自分ではない人物の人生、経験を、追体験するためだと思う。人間は、その経験によって作られるし、自分の経験を元にしてしか、あらゆることの判断ができないものだ。少しでも、よい判断をするためには、より多くの経験が必要だけれど、一人の人間の一生は、一回限りだし、経験できることの総量にも限りがある。小説は、人の目に、様々な人生のあり方があることを教えるためにあるのだと思う。

福永武彦は、フランス語で言うロマンシェであり、ロマンスを書く人、愛の作家と呼ばれている。しかし、彼の書く物語は、甘く幸せな恋愛小説ではない。人を愛するがゆえに、深く傷つき、しかし、それを誰にも告げられぬまま、その痛みと共に生きるしかない、そういう生き方が描かれる。福永武彦の描く愛は、ひどく純度の高い、愛である。

執筆者紹介

高原 美規

生物系准教授。専門領域は、植物バイオテクノロジー。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『忘却の河』 福永武彦著 新潮社（新潮文庫） 2007年 540円

[ブックガイド目次へ](#)

『サクリファイス』

タルコフスキー監督／紀伊國屋書店

二十数年前、高名なロシア人監督の最新作だということで映画館に行きましたが、始まって15分もしないうちに寝てしまい、目を開けてはまた寝てしまうことの繰り返し。もっとも、私の「映画浴理論」によれば、例え眠っていたとしても、映像の光や音響のなかに身を委ねれば、それはそれで意味のある体験です。しかし、話が全然分からないのでは話にならないので、その後ビデオになった時もDVDになった時も購入して繰り返し見ました。何度寝てもまた見たくなるのは、それだけ魅力がある映画だということです。

物語は、北方のある島、優しい光に輝く海辺の草地で、前世が日本人だと信じる男とまだ幼い彼の息子が、一本の「日本の木」を植えるシーンから始まります。その子は喉の病気の手術を終え、首に白い包帯を巻いています。木を見上げながら男は息子に、枯れた木に三年水をあげ続け花を咲かせた修道士の物語を話して、決められた手順に則った日々の行いこそが世界を変える、世界は変わらないわけにはいかない、と独り言のように論じます。

この男は大学の美学の先生で、自分の家に戻ると、家族や知人たちが彼の誕生パーティーをしようと集っている。ところが、突如家全体が地震のように揺れ、グラスが共鳴し、ミルク瓶が落ち、次いでジェット機の爆音が轟きます。まもなく、核戦争が始まったことをテレビが告げる。ラジオが人々にパニックを起こさないようにと警告を繰り返す。穏やかな日常は一気に崩れ、誰もが非常に強いストレスに支配されます。東西冷戦終了後に生まれた学生さんたちには、想像できないかもしれませんが、ああ、世界の終わりは多分こんな風に始まるのだろうなあ、と誰もが一度は想像していた、まさにそれが、白夜を挟んだ一両日として、不安と緊張感をもって淡々と描かれます。

これは「芸術映画」なので（こう言ってしまうと身も蓋もないですが）、なるべく多様な解釈ができるように、あるいは解釈そのものができないように作られています。でも一応その後のあらすじを言うと、打ちひしがれた無神論者のこの男は、どんな犠牲も払うから世界を回復してくれと神に祈る。「私の恐怖心を取り除いてくれ」みたいな祈りは、インテリにありがちな身勝手なお願いのような気もしますが、結局、男と使用人マリアのある捧げものをもって、世界の秩序は回復される。

人々は日常を取り戻したが、男は約束を果たすために自分の家に火を放つ。(この長い長い業火のシーンは、とても有名なものになりました。)火をつける前に友人の大事なものを家から離して置くあたり、滑稽ながら、彼が単に狂っているわけでもないことがわかりますが、病院送りになってしまいます。

全編にわたって、自然、輝く海辺や緑の木々の神々しさが描かれ、また、白いシーツや家具に代表されるような、穏やかな日常生活が讃えられています。そして時折の尺八以外のBGMを排したがゆえに可能になった、鳥のさえずり、汽笛、風、水、木の葉の音。まさに「映画浴」にふさわしい美しい映画です。

一方、どこか遠くで戦争が始まったことをテレビで知る。それが近いうちに私たちの日常を侵していくことを確信し、現実を、架空の世界であれと祈る。ゆっくりとしたテンポがドキュメンタリーのような迫真性を与え、最も洗練された恐怖映画であるとも言えるでしょう。

私たちは、どんなに巨大な技術を持ったとしても、頭のいい人達が大勢いるので、きつとうまく制御していけるのだろうか、世界が次の瞬間もその世界のままであるだろうとかなんとも思っています。でもある日ある時、ほうらやっぱりうまくいかなかった、最初からそんな気がしていたよ、みたいな結末もあり得るのだと、この映画は警告しました。

最後に、首に白い包帯を巻いた「子供」がただ一人、「日本の木」のために2つのバケツを使って交互に数十メートルずつ水を運ぶシーンで、辛抱強くこの木を育てていくだろうことがほのめかされます。一見不効率に思えるこの尺取虫のような水の運び方、工学的にコストを考えるとかなり合理的で、この子の成長が楽しみです。

この映画のタイトルを書名の一部とするノン・フィクションがあります。ここではその書名のみ紹介することにします。

柳田邦男著『犠牲（サクリファイス）我が息子・脳死の11日』

執筆者紹介

原 信一郎

教育開発系准教授。専門領域は、代数的位相幾何学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『サクリファイス [DVD]』タルコフスキー監督 紀伊國屋書店 2010年 6,300円

『犠牲（サクリファイス）：わが息子・脳死の11日』柳田邦男著 文藝春秋（文春文庫） 1999年 540円

[ブックガイド目次へ](#)